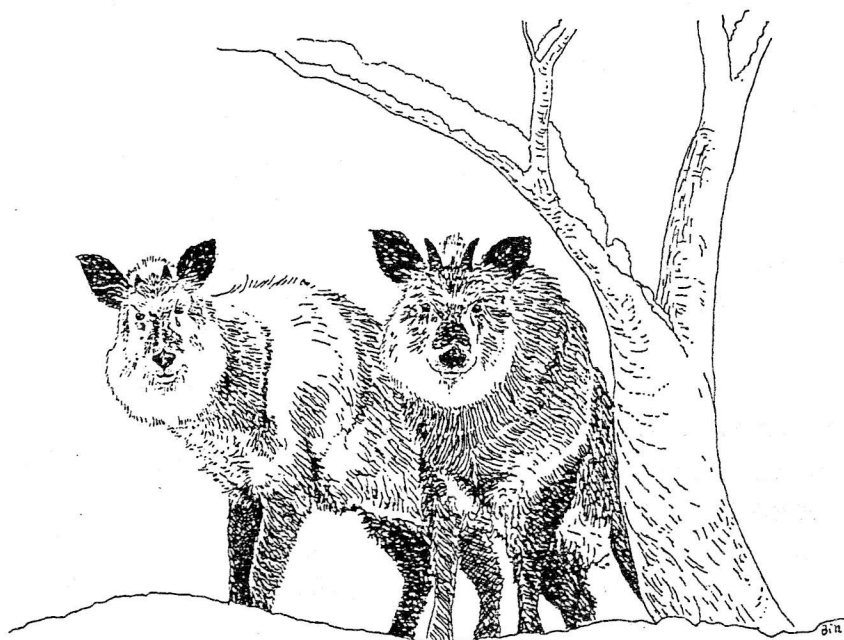


# やまざと

会報6号 (96冬号)



## 金沢大学ワンダーフォーゲル部・OB会

### OB会会長の挨拶

13期 大島 良治

皆様、明けましておめでとうございます。  
「一年の計は元旦にあり」といいますが、どのような夢、または目標を、この新春に抱かれましたでしょうか。

私共の金大ワンダーフォーゲル部OB会が発足して、もう4年の歳月が過ぎました。特に際

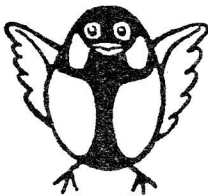
立った活動もなく、申し訳なく思いますが、まずは会の継続こそ最大の目標と考えています。

今年の一年の計としては、山小屋周辺、そして思い出の高三郎登山道の整備に、昨年以上に力を注いでみたいと考えています。OB諸氏の援助を切にお願いする次第であります。

金沢城跡の懐かしい部室もなく、私共に現在あるのは、山小屋と高三郎山です。金沢を離れてまだ一度も山小屋を訪れたことのない方も多いと思いますが、どうぞ今年の計の一つに「ベルクハイムで、昔からの友と語る」

をお加え下さい。OB会は全力でそのような方の夢を実現させていただきます。

話題を変えて…。金沢の人口は約40万人と、昔からあまり変わっていないものの、街の中心の県庁は、数年後、駅西に移転します。既に金沢大学も角間山中に移転しており、街の中は非常に淋しくなりつつあります。夜の香林坊・片町も昔のような酔っぱらいは皆無で、お金のない若者がたむろする町となり、夜の商売もバブル崩壊から立ち直れないまま壊滅状態という噂です。兼六園と、武家屋敷、片町の飲み屋



21期 竹中 Bin

紅葉のはっぱもだいふ散ってしまいました。もう冬も、すぐそこまできました。お元気ですか。

先日は、本を送っていただき、ほんとうにありがとうございました。会社の行き帰りの電車の中で読んでいます。北陸の広々とした平野の向こうに横たわる山々の姿が目につかびます。こちらの方は山が近すぎて、広々とゆったりした空間がなくて、息がつまるような感じがします。やっぱり空は広い方がいいなあと思います。

大聖寺にある片野鴨池という所に、冬になると冬鳥がいっぱい渡ってきます。冬の雪のある時に何回か見に行ったことがあります。

何万羽というカモ達が休んでいます。オホーツクの方からやってきたオジロワシも一羽いました。そいつが飛ぶと、カモ達が恐れて、一斉に飛びたったりします。

夕方きりあげて、大聖寺の駅へむかって歩きます。高速道路の下をくぐって田んぼの広がった空間に出た時、目の前に、赤く染まった雪をかぶった白山がそこに連なっていました。雲もなく、晴れた冬の日でした。しだいに紫色になり、とっぷりと日が暮れた頃には、白い白山に戻っていました。忘れられない光景でした。

に城跡の金大…そんな金沢らしさがどんどん失われているような気がいたします。「金沢に新幹線を通す」「能登に空港を作る」と、土建業者の喜ぶことばかりか政策で、昔ながらの金沢らしさを大切にするビジョンが示されないのが残念です。

皆様、我々の青春時代の金沢は、段々面影もなくなりつつあります。懐かしくお思いの方は、金沢の町を早く訪れ、暇に刻み直されてはいかがでしょうか。

皆様方にとって素晴らしい年でありますようお祈りして、筆をおきます。

イラストのコピーを送ります。コピーで申し訳ありませんが、OB会報でなくても何か用途があったら使って下さい。また、知らせてくれれば書きますので、連絡待っています。

(編者注；35周年記念誌の編集の時、「誰か表紙の絵を頼める人はいないかしら？」で、梶さんに紹介してもらったのが、21期 竹中 敏さんでした。「自然人」のイラストレーターが、ワングルのOBであったことを、この時に知りました。

彼はNaturalist Network Nagano や日本野鳥の会諏訪支部支部報「いわすずめ」のイラストも担当しておいでです。

大江 健三郎氏以来「癒し」はキーワードになりました。これらのイラストから受ける私のイメージも、「自然の癒し」なのですから、皆様はいかがでしょうか？檄文以上に自然保護を訴えかけてくる絵の力に、感嘆してしまいます。

ただ、編集上は、全体構成の中でのあくまでイラスト扱い…余白もへったくれもなく、非常に申し訳なく思っています。

OBの皆さんにお目にかけられるだけでもと、編者は開き直っていますが、皆さんは、イラストはイラストで、どうかゆっくりご観賞下さい。)



## OB会役員会の活動経過 とOB関係情報

(井は日の確定していないもの)

- 8月13日 会報5号製本済(久富)  
15日 発送(舟田)  
9月5日 小屋作業打ち合わせ  
(大島 辰野 舟田 椿川 岡部  
川本 後藤 西田 阪本 )  
9日 小屋作業援助金(50000円)渡す  
9月12日 山小屋酒場参加者へ案内送付(舟田)  
20日 資材ボート搬入(椿川 大島)  
21日 第2回OB小屋作業(16名参加 のべ  
(16名参加 のべ36名)  
現役小屋作業(26名参加)  
22日 山小屋酒場隊入山・現役下山  
23日 OB隊下山  
9月25日 スポーツ振興課へ作業報告  
29,30日 13期同期会(能登島)  
10月7日 小屋番田村氏下山  
14日 OB会役員会通信N025発送  
23日 スポーツ振興課より補助金残額入金

- 24日 OB会役員と現役3回生の懇親会  
(辰野 上馬 舟田 北川 久富  
鳥越 名倉 38期西馬 39期6名)

11月3,4日 15期同期会(清里、小諸)

- 22日 スポーツ振興課に押印書類完納  
25日 現役に補助金30万円振込(鳥越)  
井 名簿、宛名ラベル作成(名倉)  
井 会計報告、発送人ラベル作成(鳥越)  
井 一言通信葉書、寄付依頼作成(坂尻)  
井 会報印刷(中川)  
井 製本手配(北川)

コリハズク



\*今年度、高三郎登山道整備作業につきまして、30万円の補助金があり、現在現役に全額が渡っています。

\*来年度につきまして、すでに同額の補助金を約束いただいています。

これについて、5期稲葉さんから、同窓会のおりさらに課長に根まわしいただきました(もちろん自腹飲食)。また舟田も、迅速な報告と、全山金沢市にありゆたかな自然を誇る高三郎山・その登山道を維持する者は金大ワンゲルしかない旨の陳情とに努めました。

\*こんな補助金に限らず、先手をうったり人脈を活用することで、ずっと安全になったり、便利になったり、すっと道が開けてくることのあるのではないのでしょうか？

\*まずは一言通信で、ご健在ぶりをアピールして下さい。

来春の山小屋酒場案内をご希望の方は、一言通信はがきの指定欄に○をつけて、ご投函下さい。

## 参加希望者からの返信

\*吉本 良治 13期

9月22日夕方または23日早朝に入山します。21日22日は出勤予定ゆえ。

\*吉田 穂積 13期

\*上馬 康生 15期

ご苦労様です。尾瀬へ行ってきました。家族4人で、御池-尾瀬沼-燧ヶ岳-尾瀬ヶ原-三条ノ滝-裏燧-御池のコースで。キスゲ、ワタスゲともみごとでした。

\*松林 知一 15期

ワイン酒多飲日記を拝読しているうちに参加の思いがこみあげてきました。実際に行けるかどうかはギリギリまで分かりませんが、何とか万難を排して、差し入れを持って、田村先輩のお顔を見にいきたいと念じています。「やまぎと」楽しく拝見しました。ありがとうございました。

\*舟田 節子 15期

「山岳警備隊出勤せよ！」(東京新聞出版局)に蒲原さんの事故が載っています。あれから、部室へ貼紙に行くまでの2ヶ月…が逡巡しぬいた日々でした。もし立たなかったら…ワンゲルなんて青春の約3年間にすぎなかった。人生はおもしろい。おもしろくするもしないも、本人次第だよね…我孫子の横井さんの仏壇に、そう語りかけてきた今年の夏。

\*岡部 伸一 18期

仕事の都合で参加できなくなる場合もあります。

\*椿川 利弘 18期

\*鳥越 伸博 23期

仕事の都合で非常に流動的です。一応、22日の日帰りもしくは23日朝までとしておいて下さい。

参加日程に変更があった場合、すぐに連絡します。

\*山本 英男 37期

みんなに会えるのが楽しみです。



## 非参加者からの通信

\*鈴木 兵一 3期

高三郎山は30数年前に藪をかき分けかき分け登ったなつかしい山です。三日間雨にあい、倉谷の部落にとじこめられて、部落の人々の温かい心にふれました。残念ながら参加できません。少しでもお金を同封します。登山道整備に使って下さい。

(登山道整備大変でしょうが、頑張ってください。参加できず申し訳ありません。医王山の山道作りの苦しかった事、楽しかった事を今思い出しています。)

\*森島 稔 4期

毎回ご案内をいただきながら、参加できず申し訳なく思っています。

会報は隅々まで読み、田村兄の若さに感服しています。私もサムエル・ウルマンに傾倒して？十年！兄のご健勝を祈ります。

\*亀田 武 5期

残念ですが参加できません。楽しい集い、楽しい作業、そして楽しいお酒になりますよう念じています。

\*金岩 孜 5期

やまぎと5号をお送りして頂きありがとうございます。OB会行事になかなか参加することができず申し訳ありません。皆様のご健勝を祈っています。

\*大崎 進 6期

「やまざと」の愛読者です。

\*合津 尚 6期

しばらくは下界の仕事場―酒場のサイクルをくり返すことになりそうです。

\*四十万 利之 7期

「やまざと」の中になつかしい人達の名前を見つけ、いつのまにかニヤリと笑いながら読んでいる自分に気がきました。催しに参加出来ませんが、酒場の大繁盛を祈ります。

\*榊原 恒昭 8期

KUWV 8期前後の皆さんは、特異な、又、活発な人が多かったと記憶しています。その人達の一言通信が少なくして残念。年齢的にも余裕が出てきた頃と思います。KUWV時に戻った一言を願いたい。

\*篠島 益夫 8期

田村先輩のベルクハイムでの晴耕雨読と哲学創造のワイン酒多飲日記を読ませて頂き、その生活に得難い値打を感じています。続編の掲載を希望します。

\*清水 一 9期

やまざと5号ありがとうございました。いつの日か作業に参加したいと思っています。会の盛会を祈っています。

\*平村 耕作 9期

やまざとありがとう。山小屋が整備されて見違えるようになったとのこと、1年前の「月見の宴」を思い出します。9月に参加できなくて残念だけれど、次の機会に「山小屋酒場」に行きたいと思います。

\*島林 仁司 10期

田村さんによろしく。10月の終わり頃には訪問の予定。来年5月には、又山小屋酒場でお会い

しましょう。

\*小山 清 11期

やまざと5号興味深く読ませていただきました。編集委員の方々大変御苦労様です。6号を楽しみにしています。

\*青柳 健二 11期

ますます内容充実の「やまざと」を感涙しながら読了しました。「ワイン酒多飲」大先輩の「万有斥力」論完成に乾杯!! あくなき真理追求への情熱に感嘆しつつも理論的には???ですが、その至福の刻が共有できる倉谷ユートピア計画に期待しています。

(山小屋酒場は残念ながら参加できない。皆様特に田村先輩によろしく)

\*矢崎 利哉 11期

カネはあれど体力なし。体力あれど暇はなし。暇はあれど気力なし。もう少し参加させてもらうのはお待ち下さい。

\*南 梅子 13期

いつもやまざとをありがとうございます。連絡遅くなりまして申し訳ありません。日程調整がつかなくて、今回は失礼致します。当日は関東へ出掛けていて石川県を留守にします。その一週間後、同期会があるので、山小屋での話など聞かれたら、と楽しみにしています。無事、有意義な小屋作業になることを願っています。

(今回お送りいただいた「やまざと」盛り沢山の内容で楽しかった。特に田村さんの山小屋日誌に感動!)

\*清家 雅幸 14期

やまざと5号楽しく読ませていただき、皆様の御苦労に感謝しています。せっかくの機会ですが参加できなくて残念です。次回には高三郎に登頂できるようトレーニングしておきます。



\*坂尻 忠秀 15期

5月晴のもと、懐かしい倉谷で仕事をするも良し、酒を飲むのも良しという第1回の小屋作業が大変楽しいものであっただけに、9月もと思っていたのですが、地区の祭礼のため残念ですが不参加とさせていただきます。

\*金井 澄 15期

田村先輩の痛快きわまりない山小屋日記を繰り返し読んでいます。是非とも大先輩の教えをいただきたく思っていました。日程の調整がつかず、また次の機会に。

\*大家 慎一 17期

遠方の故なかなか行けなくて残念です。山小屋酒場とはとてもしゃれていますね。高三郎のピークはどんなだったか、思い出そうとしています。思い出せません。住所と電話が変わりました。

\*横井 恒雄 18期

楽しそうですが行けそうにありません。OB会幹事の方いつもありがとうございます。そしてご苦勞様です。

\*佐野 吏 19期

OB会報により皆様との距離が縮まった気がします。お手伝いできませんがガンバッテ下さい。

\*難波 利行・清芽 25期・26期

いつかきっと参加します。「コンボスタイレ」詳しいこと知っている方、是非教えて下さい。

(ひょっとしたら、山小屋便所の改善策になれるかも?)

\*外村 雅治・美佳 26期・27期

会報をいつも楽しく読ませていただいています。何分遠いので参加はできませんが、懐かしく思い出しながら応援いたしております。よろしくをお願いします。

\*塚原 由紀子 27期

いつも会報をありがとうございます。幼い子供がいるため、今回は参加できませんが、何年後かに参加できたらいいなと思っています。事務局の方々、本当に御苦勞様です。

\*沖田 直久 31期

\*金田 学 34期

返事遅くなりました。今回は私用があり参加できません。また機会があれば行きたいと思っております。

\*石川 明弘 36期

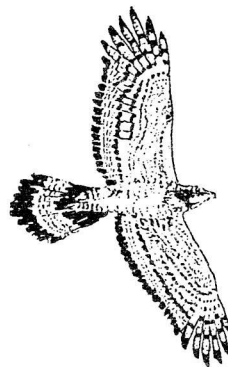
就職先、何とか決めることができました。初めは東京で研修です。業種はコンピューター関係です。「東京でなじめることができるか」が、第一の関門です。

\*藤牧 康子 37期

今回は残念ながら参加できませんが、次の機会があれば是非参加したいです。

\*新堀 由佳 37期

返信遅れまして申し訳ありません。仕事の予定がたちまosenので、不参加とさせていただきます。それにしても卒業してから「やまざと」を読むと、編集の方々に頭が下がるばかりです。



Bin

ハチクマ

## ワイン酒多飲日記IV

3期 田村 昭夫

7/22 (月) 曇時々雨

8時半頃小屋を出て金沢の街に出る。ダム添いの道で川の様になっている箇所があるのでダム側に流れを変える作業を行った。ダム事務所で鹿野教授夫人と彼女の友人に出会う。三人一緒に自転車を連ねて街下る。小立野でお二人に別れ舟田女史宅へ行く。小林宅に預けてあった寝袋を持って天神橋詰の常宿に行く。

午後10時頃、学習塾の授業を終えた舟田女史がビールとつまみ持参で我が一夜の宿をたずねてくれた。30分程雑談して彼女は帰宅した。浅の川を渡ってくる涼しい風を満喫しながらこの日誌を書く。夜中豪雨に見舞われた。

7/23 (火) 曇時々雨

7時半頃舟田女史に挨拶に行ったが、まだ鍵がかかっていた。小屋に3時頃帰る。これ書いて寝る。

7/24 (水) 快晴

羽場さんのテント小屋は撤収されていた。木製の棚と真空包装されたコンブとアワビの佃煮が置いてあった。ごっつあんである。佃煮を着に今宵も酔いしれん。豊かなり。限り無く豊かなり。今夜から蚊帳を吊る。完全なり。安眠疑いなし。Gute Nacht!

7/25 (木) 快晴

午前中コンクリート壁に金色スプレーをかけた。あと2本不足なので街に買いに出る。途中丸太運び。家族が2日に金沢に出てくることになったので、駅近くのホテル「キバヤシ」を予約した。常宿となった無料休憩所で泊まる。

7/26 (金) 曇

帰途、駒帰から「少年の森」に行った。縄文時代の生活から山村農業、炭焼迄体験出来る素晴らしいサバイバル教育の施設があることを知



った。これをこの倉谷で実践せぬ法はない。時はめぐり繰り返される。農協でフランスワインを買う。今宵も一人酒宴を張る。

7/27 (土) 快晴

朝、京都から来た子連れ釣人と会う。小屋に遊びに来るようにと云っておいた。聖書によると「神の国への招待は全ての人になされるが、それに値する人は極めて少ない」とある。4時半頃京都の人達三人が小屋を訪ねてくれた。中学の理科の先生だった。例によって私の弁舌はとどまることを知らず。しかし大学で応用物理を専攻した先生もなかなかやる。ビールで盛り上がった。久し振りに楽しい夕べであった。

7/28 (日) 晴

午前中はダムサイト方面の遊歩道整備。午後医学部6年生朝日君(ワングル36期)とその友人が小屋を訪ねてくれた。昨日から岩魚釣に倉谷川上流に入っていた由。ワインで雑談。これもまた楽し。小屋番冥利につきるとはこのことか。

7/29 (土) 快晴

今日は小屋から出ずに聖書や他の本を読んで過ごす。このような天気の下での遊歩道にも出なかったのは珍しいことだ。理由は朝から酒を飲まなかったからだと判明。夕刻、最後の1本に手をつける。やはり俺の活動の源は酒だったのだ。「一隅を照らす」意味も広義に解釈すれば

この小屋に暮らしているだけでも世間に何らかの影響を及ぼすことになりはしないか。あの小矢には酒と安らぎがある…と皆が訪れる。「桃里不言 下自成溪」と古人が云った様に。俺はこの地に骨を埋める。

7/30 (火) 晴

午前中聖書研究。午後金沢に下る。浅の川右岸の公園にて泊まる。只今午後10時半。川面を渡る夜風が心地よい。月は満月に近い。

7/31 (水) 晴

午後3時頃小屋帰着。やはりこの小屋に来ると落ち着く。小屋が我が家のように思えるようになった。小屋に対する愛情である。オロロが出てきた。小屋迄くっついてきた奴ず、裸になった途端キン玉にちくりとやりやがった。キン玉ごとたたきつぶす。

8/1 (木) 晴

朝7時河原へ洗濯物を持って出た途端、オロロが8月の解禁を待っていたとばかりに集団リンチを加えてきた。さすがの俺もまいった。洗濯物を持参して小屋へ逃げ帰った。「夏場はお前などの住む所じゃない。倉谷の厳しさを知らせてやる」と私に教えてくれたのかもしれない。俺は甘かった。倉谷の良い面ばかりを見て天国だなどとほざいていたのだから。家族が来るのを機会に、オロロがいなくなるまで金沢か会津に疎開することにした。

したがってBergheim日誌は中断します。

(7月15日、私は田村さんからの御要望をうけて、春の小屋作業宿泊者に倉谷での還暦祝の案内を発送しました。8月はじめのお誘は無理ではと思ったのですが、前田顧問、大島会長はじめ13期の方々が出向いて下さることになり、私は友人との北アへ出発。

8月3日、下山。旅装もとけないうちに、さっぱり街着の先輩の登場。倉谷をひきあげ、今晚リリーマルレーンでの還暦祝いのみとするからとのこと。一安心ながら、辰野さんの用意されたケーキは、別のお口に入ることになってしまいました。

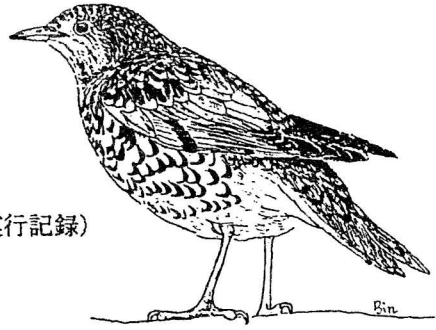
そんな急な変更でのリリーマルレーンへは、前田顧問、12期大出さん夫婦、鹿野教授夫人、が集い、ご家族と酒宴を張りました。鷹揚な奥様、美人姉妹と好青年の三人のお子さん達。常識の枠におさまらない大先輩は、実に多くの好人物に恵まれた幸せ者と思えました。)



オオワシ (ワシタカ科)

## 第2回OB小屋作業

(実行記録)



トラツグミ

9月21日(金)

\*午後 資材運搬 ボートで出島まで

大島 良治(13期) 椿川 利弘(18期)

9月22日(土)

\*午前6時20分 犀川ダム集合

田村 昭夫(3期) 舟田 節子(15期) 岡部 伸一(18期)

椿川 利弘(18期) 山本 英男(37期) 現役26名

\*資材運搬班・BH周辺整備

椿川 山本

西田P(6名)

\*旧道整備班(800m-ザック置き場)

田村 舟田 岡部

橋本P 岩倉P 阪本P(20名)

9月23日(日)

\*旧道整備隊 (ザック置き場一分岐手前鞍部)

\*山小屋酒場隊 午前8時小立野キャンパス集合

辰野 隆義 大島 良治 吉田 穂積 吉本 良治(以上13期)

松林 知一(15期) 栃尾 俊治 深田 進 松下 和隆(以上20期)

奥出 俊一 寺島 祥文 西村 かおり(以上33期)

\*2時 現役下山

OB隊 水場設置作業

\*4時 岡部 山本下山 奥出 寺島下山 梅 典雅(19期)入山

9月24日(月・祭) ホース敷設 畑作り BH周辺整備

\*6時 大島 西村下山

\*12時 全員下山





## 現役と一緒に小屋作業をして---

18期 椿川 利弘

小屋作業の打ち合わせの時、仕事上犀川ダムの所長を知っており「まあいいように話をつけておきます」と軽く返事をしたのだが…。管理のいき届かない休日はボートを出せないと言われ、結局一日前から休みをとって、運搬作業を行うはめになった。大島さんも手伝われることになり、20日金曜日の午後、二人でホースなどの資材をトラックで、犀川ダムまで運び、そこからボートでできるだけ吊橋近くまで運ぶ…が計画だった。

しかし、ある程度予想してはいたものの、貯水位があんなに低いとは！その日はダムサイトの長い階段を3往復もしてやっと資材をボートに乗せ、出発。2日前までなら、何とか倉谷川の対岸までは行けたのだそうであるが、その日は、出島の手前の平地へ行くまでが精一杯であった。明日の小屋までの運搬のことを考えたら頭が痛くなった。

帰りに、ダムの事務所でコーヒーを頂いた時、「貯水位の低い秋に運搬しないで、春にしたらいいと、いつも言っているのに」

と、気にしていることを言われた。そのうえ「大雨が降ると貯水位が一日に10mも上がる時がある」とも言われた。荷おろしが終わるあたりから、台風接近に刺激されたのか雨が降り始めていた。この言葉が現実になったなら、資材は来年の夏あたりまでダム湖に水没したままということになる。どうにでもなれ。ついでに、こんな重労働に出ておいでた大島さんのスタイルはネクタイに革靴であった。帰宅後、奥様にどう言い訳されたものか…これも、どうにでもなれ！のうちであった。

21日、小屋に向かう途中、資材が無事であることを確認。現役とOBが小屋に着いての協議の結果、私と山本君（37期）と西田パーティー



モモンガ

の6人、計8人が運搬作業にあたることになった。

資材はホース（直径2m巻、長さ90m、重さ20kg）が2巻、取付金具（重さ20kg以上）、ツルハシ・鍬4本、一輪車1台である。問題はホースをどのように運ぶか？である。

案1）現状のままで運搬することとし、ガレ場が危険であるので、手前で倉谷川に落として、渡渉して対岸から運ぶ。

案2）2巻を8つに切って、巻き直し、一人1本ずつ運ぶ。

案3）2巻を6つに切って、6本を束にして伸ばした状態のまま全員で運ぶ。

現役のみんなと一緒に考えて、1案は危険である、2案はホースが硬くて巻き直せないとなり、3案で実行することにした。それでもホースの長さが30mにもなるために、横に振られたり、片方の手ばかり辛かったり、おまけに腹は減ってくるはで、シンドかった。実際、後ろで「キャー」と言われた時にはヒヤッとした。（落ちたのだが、ホースにつかまる格好で止まってくれた。）

小屋に着いた時には12時半。ここでビール…と思いきや、昨日からのばたばたで忘れてきたことに気づき、ガックリ。それでも気を取り直し、昼食後には、残りの資材の運搬と、テント整備を行い、登山道修復隊の帰りを待った。

その夜は、現役のお客になれるとのことで、岡部君（18期）と私は現役の作ってくれた鳥野菜とうどんを御馳走になり、昔を懐かしんだ。

22日は、岡部君と現役の先頭に立ち登山道整備。下山後は続いて、後で来た酒場隊と一緒に雨の中、ホースの埋設作業を行った（このあたりは、他のOBが書いてくれるらしいから、省略しておく）。苛酷な労働が3日も続いた結果、夜は酒盛りの途中早々に、高野をかいて寝てしまった。

年齢が半分の現役達と一緒に小屋作業をして、ギャップも感じたが、同じ汗をかくことができて、とても嬉しかった。

現役達には、これを機会にもう少し「自分達の高三郎」「自分達の山小屋」という気持ちを持ってほしいと思っている。

## 9 6 小屋作業を終えて

CL 川本 幸代 (39期)

小屋作業の前日、私は後輩達の質問攻めにあっていた。

「川本さん、本当に行くんですか？」

「台風来ているんですよ。中止ですよ。」

たしかに、ニュースでは次の日は台風接近にともない大雨ということであった。OBとの打ち合わせでは、小雨でもやるということだったが、大雨でもやるのだろうか？あの高三郎に、大雨の中、また登るのだろうか？

高三郎、それは現役にとって、どの山よりも恐ろしい山である。初めてワンゲルに入って、無理矢理登らされたあの山の辛さは、何年たっても忘れられない。私達3回生は、あの辛さをかわいい1回生には味わせたくないという、今から思えば甘い考えのもと（今年の1回生は強烈！）新トレを医王山にした。これが、高三



郎離れと囁かれる一つのゆえんかもしれない。

しかしながら、今回また、高三郎に歩荷で登ることになった。これを知った上回生は、まだ高三郎を知らない下級生達よりも、顕著に嫌がっていた。そんなこともあって、予想される悪天に、現役は甘い期待を寄せていたのである。

しかし、天というのはいつでも気紛れである。次の日の朝はどんよりとはしているものの、雨は降っておらず、出発できてしまう状態であった。そして、ふと気付けば、もうあのベルクハイムに来ていた。

そこでの話し合いの結果、テントはベルクハイムに張り、そこからサブザックで整備作業に出ることになった。

「何なんだ？台風は来っていないのか？」と不可解気持ちのまま、あの素直に懐かしいとは言いがたい道を登った。登るにつれて、意外にも荷物が軽いせいなのか、おもしろくなってきた。おまけに、草刈りを始めたら、みんな思わぬ力を発揮した。日頃やったことのない草刈りに、夢中になったのである。

はっきり言って、我々現代っ子は、草刈りなんて無縁である。鎌と鉋の区別さえもつかない。そんな我々が草刈りに夢中になるとは、物事はやってみないとわからないものである。目の前に生い茂るジャングルを切り開いた時の喜び。我々は草刈りの意外な一面を発見した。

次の日の天気もまた気紛れで、我々3回生を悩ませた。また登って草刈りをすべきか？待機すべきか？我々の中には、行って少しでも昨日の続きをすべきだという気持ちと、できることなら小屋の側で待機したいという安易な気持ちの両者が入り交じっていた。そんな時、一人の3回生が言った。「行けるんやから行こうよ。」確かにそうだ。せっちゃん（舟田さん）達が行くのに、我々が行かないわけにはいかない。それに、このまま下級生達の期待に応えてはいけない。

そんな訳の分からない上回生意識にとりつかれた我々は、再び高三郎を目指すことにした。だんだんと雨と風が強くなった。しかし、そんな風雨も心地良く感じた。女子は鎌で小さな枝を、男子は鋸や鉋で大きな木々や根っこを切り落とすという見事な連携プレーを見せた。そして、あっという間に、前高三郎と高三郎の鞍部

までやり終えた。

ベルクハイムに戻ったのは午後1時頃であった。我々はOBの方々の好意に甘えて、その日のうちに帰れることになった。

結果的に2泊3日が1泊2日になったわけだが、我々にとってこの2日間はとても中身の濃いものであった。この2日間の中で、我々3回生はあることに気が付いた。それは、我々がいつのまにか抱いていた高三郎に対する愛着と、それを後輩達にも持って欲しいという願いである。当初あんなに嫌がっていた高三郎だったのに、時が流れるにつれて、それは我々がいつでも戻ることのできる故郷のような存在になっていた。

そんなことに気付けたという点で、この山行の持った意味は大きかった。



## OB小屋作業あれこれ

15期 舟田 節子

参加者全員の参加日がようやく確定した時には、現役との2回の打ち合わせとはかなり違った様相になってしまっていた。何といっても、OBは仕事優先だし、その仕事は自分の予定だけで決まるはずがない。ただ、そんな事前変更が可能なのも小屋があるおかげであって、テントだの炊飯道具だのの采配も加わったらもうお手上げである。つまりは、小屋があるからやる小屋作業だけれど、小屋がなければ到底やれない小屋作業といった一面もあるのだった。

ともあれ、そうやって参加日が確定した時点で…このままでは登山道修復隊と、小屋酒場隊が接触できる時間がない。無理せず楽しく…がやはりOB会活動には大切なことだ。登山道修復の人手が減るのは申し訳ないが…かなり悩んだすえに、「2日目は、OB隊は山中泊を止めて、午後下山。小屋泊まりに変更します」と現役チーフに連絡した。

すると、「みんな喜びます」の返事。エーッ何なのよ？素直っていうのか？人手が減ると心配した私の方が馬鹿みたい…。まあ、私だって姑がいるだけでいじっかしいもの。人手よりは人目がない方が気楽なんだろうな…。

また台風が迫ってくる。我が台風予知能力もたいしたものだ。今度は「台風がきてもやるんですか？」と電話がかかってくる。

いったい…どこがやる小屋作業なの？去年の秋、わざわざ確かめたじゃないか！「部員も、部も万年金欠で是非お願いしたい」という返事だったから、進めた話。また、「それは、前の学年が返事したことで、自分達が言ったことではない」のムードなのかしら？

補助金をもらうからには責任は当然つきまとう。「台風がきたからできませんでした」で、通るのか？「しなかったんだから、もらわなければそれでいい」で済むとも思っているのか？では今回やらないとして、日をあらためてや

る考えはあるのか？

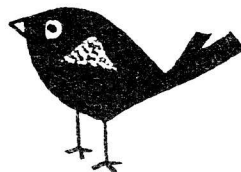
いっぱい不満はわいたが…「できるだけやってみるということで、現地へ行ってみましょう」と返事をする。

わからない訳ではない。登山道修復を主とする小屋作業は平成3年以来、行われていない。

平成5年には屋根修理、6年か床修理、7年か、雨漏り修理と月見の宴。近年の小屋作業は小屋再建に終始していたが、それにした所で、平成3年の前には昭和62年の記録しかなかった点ではまさに画期的だった。その間部誌も発行されておらず、いわゆる登山道整備の小屋作業の伝統の方は見事に消えていた。

だから、今回の企画も、現役は現役の予定で動いてもらい、OBはそれに合わせ、ただ資材運びはお願いするかもしれない…のスタンスをとろうとしていたのが、「どうするんですか」「何がいるんですか」と聞かれるばかり。OBへの遠慮というよりは、何とも見当がつかないらしい。補助金が出るのなら、喜んでやりますとばかり思っていたのが、だんだんOBの方がやりたがっていて指示を出しているかのような、どうボタンをかけ違えているのか？わからない状況になっていく。私は自分の立場でのできる限りの便宜を図ってあげようと思ってはいるけれど、現役に指令を出した覚えはない。（覚えはなくても、OBが言えは指令したことになるのかもしれない）

返事をした後も、これ一体どうなってんの？で、首はかたがったまま…まあ、体験してみなければわからないってのもんだわ…で、辰野さん、岡部さんと最終確認を行う。



9月21日早朝5時半、岡部さんの車でダムに向かう。現役的車も次々に到着…この光景、私達は慣れたが、ほとんどのOBには目が点になる光景だと思う。

台風前の生温かい空気。椿川さんから、「昨日この階段を3往復して資材を運んだ」と聞かされ、ダム横の階段を見下ろしてびっくり。船着き場まで水平移動かと想像していたからだ。それに、彼には4日も今回の作業にかけていただくことになる。あと何もせんでいいと言ってあげたくても、借りてきたツルハシなど、道具の返却までは頼るしかない。負担の分散といったところで…結局各自の思い入れに依存するしかないのが現状だ。

我ヒーロー田村御教祖様は、昨日ザックを預けていかれ、小林さん宅から愛用の(借用)MTBでダムに集合なさるとのことだった。が、財布を手にしたまま走っておいで。昨夜小林さんの帰宅が遅く、起こしては悪いと暗がりて探したMTBが見つからず、結局タクシーで駆けつけられたとのこと。彼一人いれば話題にこと欠かず、あのエネルギーといい、彼こそワンゲル台風である。

ところで、現役は揃ったようだが…なかなか出発しない。ワンゲル規定では台風が30度線を越えたら下山となっているのだそうだ。「そちらで決めればいいから」とは言ったが…

(おヌシら、それで冬山や春山へ行くんか?必死で耐風姿勢をとって、それでも帰ってこなきゃならんのに。だいたい、高三郎も南アも同じ規定かいな。もう一腹立ちついでに、君達の安全基準というの、はっきり言って無難基準だわね。不可欠員なんて、ろくに山にも行ってないのが何人集まってみた所で、安全になりはしない。一人一人がどれだけ山の経験を積み、天候の判断ができ、山行全体やメンバー全体を把握できるか…それが安全でことだわ。悪天だからやめましょう、PWは面倒だから個人山行で気の合う者だけで行きましょう…なんて、安全から遠ざかっているとしか思えないわ。)

「BHで、最新の天気図をとってから」となり、ようやく動きだす。



出島手前に無事資材はあった。ホースはかなりの難物だ。ともあれザックをBHに置いてこなければ運搬も出来ない。

秋の倉谷はススキがおい茂り、どここかもテントサイトのように思えた春に比べれば、よりものの好きの世界になっている。ここで天気図を取り始めたのが3回生の西田君ともう一人で、あとはいかにも暇そう。

(小屋作業ということで、普段とは違っていたのかもしれないが、昔は、そう昔は、1回生の仕事でしたよ。こんな場合は、上回生はどんな状況であればどうするの話し合いをやっていて、2回生やSLはその間パーティー全体を見ていて、次の行動を予想しての指示を与え準備させていたものです。だから天気図が仕上がったと同時に「よし。〇〇」と決定が出て、サッと行動に移ったもんですヨ。

それに…1回生で練習して、実際の天候がどうなっていくかの経験を積んで、リーダーになった頃には的確な判断ができるとされたものでした。ちょっと心配になった光景でした。)

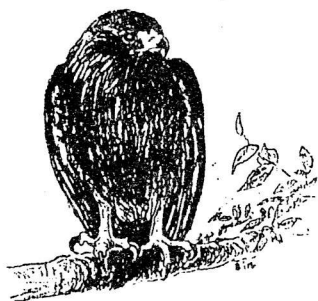
天気図が仕上がり、それから3回生が集まったの協議が始まる。台風の北上スピードが思ったより遅く、さりとて明日からの雨は避けられないであろうし、歩荷で雨の中を下山は危険だし、BHに張って作業をしに行くことに決まる。それから、やおらBHに上がり、やおら荷物を取り出し…OB隊の方はこの間イライラ…。現役も目障りだっただろうけれど、OBはOBで口出ししまいとストレスをためた。ようするに30万円の補助金の責任を感じて、少しでも作業時間をとりたいとあせっているのはOB隊の方

で、現役は、台風来んのかでガッカリムードが漂っていた。

椿川さん、山本さん、西田パーティーが資材運搬にひきかえし、あとの現役と岡部さん、私が旧道へ向かう。田村さんは7週間ぶりの小屋を、まず小屋番としての整頓をしてからおいでるとのことだった。

見覚えのある顔が見えたので聞くと、就職の決まった4回生が4人とも参加しているとのこと。そりゃあ、嬉しい。しかし3回生男子は、風邪やけがで、5名中3名が欠席したのだそう。

(昔、合宿前に手の指を骨折した3回生に対し、リーダー交代ではなく、自覚不足として退部勧告処置をとった学年がありました。新トレ事故後、合宿中止は今後のダメージが大きすぎるとして、期間短縮で夏合宿が実施されることになりましたが、仲間を切っても、気の緩みを排除しようとした辛い措置でした。そんな時代に育った私にすれば、個々の事情があったにせよ、補助金が出るような部の信用のかかった行事に、3回生の野郎の過半数が出てこないなんて、これまた首をかしげるような…。もっとも、「3=過半数」という事態そのものが、仕事をやるうえでは苦しい数字でした。)



イヌワシ

現役の3隊と、後になり先になり、作業をしていく。汗も出てくる。どの枝を処分してやるか…目が怪しく光り出す。執念で切り倒した木をよいしょと、登山道脇にほうり投げて、やったとばかり、にんまりの顔を見合わせる。朝からの、いやそのもっと前からの不快感がすっ

と消えていくのかわかる。やっぱり、一緒に活動するって大事だ。理屈より何より、一緒に汗を流すのが一番わかりあえる。そう、この積み重ねが大事な仲間を作っていたのだ。あれやこれやと腹をたてていたのがあまりにあっけなく消えて、それが嬉しくもあれば、ここへ出てこない人にはなかなかこんな感覚はつかめないだろうなと思うと、また別の溜息も出てしまう一悶々を抱えっぱなしの私なのであった。

田村さんは予告どおり、仙人の杖ならぬ長鎌をつきながら上がっておいでた。「春には刈っておいたつもりなんだが、随分伸びるもんだなあ」とつぶやかれつつ。彼の言動を下界で見ると、奇人変人の類と思われてもまあ仕方ないというか…しかし彼の純粹さ、誠実さは山にあって変わらず、ますます光り輝くのだ。決して手を抜かず、苦難とあればますますいきいきと毅然と立ち向かわれる。自分より年上のOBがこうやって登ってきて下さるのが、すごくうれしかった。現役達だって、煙たいばかりでなく、整備作業の現場に出てくるOBがいることを少しは心強く思っているだろう。

休憩中、皆時々ビニール袋を出しておやつを食べている。あとで正善君にきいたら、今では2泊3日なら2泊3日で、山行全体の行動食を分けてしまい、好きな時に食べるようになっていたとのことだった。そんなあたりと予想しつつ、じっと見ていたら「いかがですか？」と言われて赤面。「ううん。私もいっぱい持っているから。ありがとう。」といって、視線をずらし、それでも談笑している現役の人達について視線は戻ってしまう。あの顔、この顔にかつての仲間達の顔が重なる。あの頃だって、あほらしい馬鹿らしいと思いつつ、いい汗をかいて、そんなあほらしい馬鹿らしいことを一緒にやる仲間がいることが、うれしかった。まわりにいるお互いが宝物だ。二度とない青春という言葉は今まさにあなた達のためにある。

雨にもあわず下山。ずっと上がった道ではなく、あちこち作業しながら登った道だから、記



憶にもよく残っている。ああ、こどもやった、あそこもやったで下りて行くのは、自分を誉めたい、いい気分の一時代。手間暇かけた山はもう、よそよそしい山ではない。そしてわか故郷BHにホッと帰りつく。運動隊との再会にひとしきり盛り上がる。

快い疲れの後の、軽口をたたきながらの夕餉の支度。こんな充実度100%の時間が大好きだった。今日の夕食はお客様。春に作ったベンチに腰掛け、OB時間を楽しませてもらう。犀奥に活動を広げた岡部さんと、夏合宿でBH-白山コースをやった山本さんの話も弾んでいるし、ワインの入った田村さんはますます饒舌となられる。考えてみれば、自分のやったことの中ではワンゲルを作ったのが一番価値のあることだった…と酒多飲氏は続けられる。自分は10年学生をやり（親もスゴイ！とても真似はできない）8年ワンゲルにいたことになるが、もしワンゲルがなければ、級友達は卒業していくし、寂しくて金沢にはいらなかったかもしれない。ワンゲルがあったからこそ、次々と仲間ができて、今こうやってあなた方とも話していただけるのだ。やりましょう、OB会を。やりましょう倉谷をユートピアに！

おいしい匂いがたちのぼり、各パーティーに分散して食客となる。私は中華丼班になった。スプーンを口に運びながら、いろいろな思い出が駆け巡る。35周年記念誌編集委員募集の張紙を出しに行ってから、いろんなことがあった。ワンゲル以外であれば通じないようなことに、皆が協力してくれた。3日家をあけることを許してくれる家族にも恵まれた。ここにこうしていただけることの幸せにひたってしまった…。



22日4時、起床ベルが鳴る。こちらも急いでガスに火をつける。メタやガスの匂い、ろうそくに照らされるまだ十分醒めきらない顔、一日の始まりの一種の緊張漂う一時。予定どおり高三郎の山中のテント泊だったら、どうなっていたものか？小屋泊まりで、随分気楽な支度になった。OB隊の方はご飯のヒートパックに、そのお湯を使ったみそ汁、みりん干しといったあたり。食べ終わった頃にはお彼岸の空も明るくなり、幸いに雨は落ちてこない。

4時起きで、すぐ飛び出すのかと思ったら、また何かぐずぐず、次の指示が出てこない。昨日の連帯感を忘れまたジリジリになる。ようやく、今日はザック置き場から、前高間を作業、下からやるのと上から下りてくると二手に分かれて行くと決まる。それからやおら支度が始まり…で、OB隊は方針を聞いた所で先に出発してしまった。30万円の責任を感じてやるだけやらにゃとあせているのはOBの方で、何とも現役にはロスタイムが多い。

高三郎の連チャンなんて、我ながらようやると思いつつ、山本さんにも「私登りは遅いからお先に」と言ったら、「いえ、僕も遅いですから」の返事。そのうち息苦しそうになって「喘息気味で」と立ち止まる。ちょっと心配だったが、山は続けてきていたんだし、後から現役も上がってくるし…で、現場へ向かうことにした。

さすが日当たりのいい所は伸び放題だ。9時近く、ざわついていた風に雨が混じり始める。山本さんが追いついてきた。「岡部さん達とは何時に集合ですか？」に、「どうせやりながら降りてくるから。出会ったらお昼にするわ」と答えにならない答え。考えてみれば、打ち合わせなければの意識がなかった。山へ来ているというより、手入れに来ているという感覚で、おなかが空けば降りてくるわぐらいだった。打ち合わせなければいけないんだっけ？彼の方は岡部さんと私の間にいればいいらしいと察して上がっていった。

一方不慣れた無線の方は「金沢港まであと一里の所や」とか「スノータイヤが…」とかわか

らのばかりが入ってきて、そのうちどこかのボタンが押されたのかピーガーピーガーもいい始め（懺悔…3日間をあけるため、家事と仕事に忙殺された私は、無線機のあれこれを使い慣れる時間はありませんでした。それで、3箇所ばかりを急遽主人に習い、あとは触るなど言われてきたのです。だから…それ以外のアクセシントには無力でありました。）うるさくて切ってしまった。後から追いついてきた西田君が、現役はザック置き場で待機しているとのことで、「無線がつかならんし」と迷惑気に言い、また連絡に行かんなんと、降りて行った。私は半分反省、半分さっさと上がってくりゃ無線なんていらんものを…とオバタリアンそのもので開き直っていた。

ともあれ、椿川さん、岡部さんのOB隊がはるかに上がってしまったことがわかり、彼等も意を決して作業を始める。雨も汗も一緒になり、マゾ的世界にひたりながら、藪との戦いを続ける。

10時半、上から降りてきたOBの面々にドッキング。彼等は、妙なねじれ方をして登山道にかぶさっているブナの大枝を落とそうとしている所だった。あっちから切り、こっちから切り、それでもかみあわなくて、ややこしい宙ぶらりんになり…私がヨシと体重をかけたらあっさりボキッと折れてしまった。皆、ヤッタ！と言っていいのかわからない顔をした…優しい人達！残りの枝の蔭で昼食。田村さんは「後は私がやっておくから、もうこれでいい」とさかんにおっしゃる。そうは言っても、周囲に仲間の姿があってこそやれる作業だ。

雨が本格的になる。12時下山を始める。作業は前高を過ぎ、分岐との鞍部からやや上がった所までが終了となった。ずぶ濡れになりながら、皆いい顔をしていた。苦しいだけ、辛いだけ、充実感が残る…人の心のパラドックス。そして苦しみを分かち合い、喜びを倍加できる能力こそが、人類を繁栄させたのだ。この小屋作業は時代に合はんのか？いや、そうではない、やはり人が人である、種としての本能に近い所に、

小屋作業はある。知らないで、食わず嫌いで敬遠しているだけなんだ。やっぱりあおった方がいいのかな？私の頭の中は忙しい。

下りだから身が軽いだけでなく、BHに酒場隊がもう到着しているであろうことが、もっとうきうきさせた。BHへの階段をかけあがる。

「御苦労さん！」の声に迎えられ、ああのもので盛り上がり、もちろん待望のビールもいただいた。

現役達は協議を始めた。下山予定は明日であるが、作業の継続地点に行くまでにタイムアウトになってしまう、ましてずぶ濡れである。即下山が決まり、ただ私達の所へ伝えに来るのに少々時間がかかっていたようだった。「台風様来てちょうだい」といった状況から、よく頑張りと、仕事をこなした。OBの持つスケールで量ってはいけない。彼等は今という時代背景の中では、本当に稀な若者らしさを発揮したのだ。

しかし、やはり「しかし」はつきまとう。来年もこんな現状で、補助金を申請できるのか？ボタンのかけ違い所か、ファスナーか？マジックテープか？といった戸惑いから私は解放されていない。

老田主将に尋ねてみる。「来年は？二年生達やる気ありそうですか？やるんなら、今回の報告の時に、来年も補助金をと陳情しておくけれど…」「やるでしょう。大丈夫ですよ。」とあれば私は信じるしかない。

雨中の撒収でふくれあがったザックを担ぎ、現役達は次々に降りていった。「気をつけて」「失礼します！」BHでは酒場隊が立ち働く第2幕の帳が上がりつつあった…。





## 第2回山小屋酒場作業報告

山小屋酒場代表おやじ 13期 辰野 隆義

前回春の山小屋酒場では、皆さんの頑張りの御蔭で、予想以上の成果を上げることができました。これに気をよくして、最大の課題である「山小屋に水を引く」を次回の目標に掲げ、測量、ルート決定、材料協議などを現場で行い、下山してきました。

秋の小屋作業が近づき、現役との2回の打ち合わせ、大島君とのプロの判断を加えた協議を行い、いざ実行。

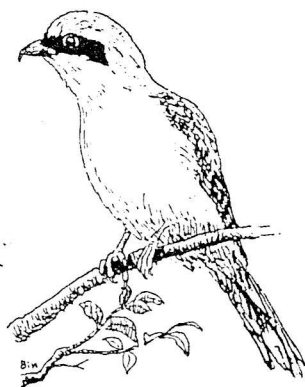
材料の調達、運搬は彼が引き受けてくれ、20日金曜日、椿川君との二人でボートに積み、運べる所までは入れてくれることになった。後で聞くと大変な作業となっらしい。二人に感謝。

22日、日曜日。朝から雨がぱらつく。工学部前に集合したのは13期4人（大島 吉田 吉本 辰野）、15期1人（松林）、20期3人（栃尾 深田 松下。松下君は鎌倉から来てくれたとのこと）の精鋭(?)達。後で33期の3人（奥出 寺島 西村）の県外若手OBが加わる。

ダムで足周りの確認後、雨露をたっぷり含んだダムサイトの道へ突入。大島君の話によると、この秋のダムの水は少なく、資材はあまり奥まで運べなかった。現役隊に余裕があればあるいは、小屋まで運んでもらえているかも…とのこと。荷揚げした場所に資材が残っていないことを祈りつつ、びしょ濡れになりながら進んで行く。荷揚げした場所を探す。う、ラッキー、荷物が無い。足跡がいくつも残っている点からして、この雨で水中に没したかもという疑惑も否定できる。やはり、老体を心配して心優しい現役達が運搬してくれたらしい。心から感謝。何しろポリパイプ90m巻（約20kg）2巻き、一輪車1台、パイプ・継手（約20kg）等、老体にはかなりこたえそうな代物だったのです。

山小屋に到着。階段もしっかり残っている。

チゴモズ



小屋の周りにはテントが張っており、小屋の中にもザックがたくさん入っている。どうやら登山道修復隊は、悪天のため小屋に泊まり、作業に出掛けていっているらしい。途中からの運搬がないとわかっていれば、ダムでちょっと無理やなあと外してしまった罐ビールをもっと運んできてやれたのだが…ご苦労様です。

ともあれ、最初の仕事は、そんな事情で稀少価値の上がった罐ビールを下げて、水場へ。ビールを冷やし、作業前の現場確認。一休みし、昼食をとった所に、登山道修復隊が帰還。雨脚も強くなり、分岐の手前鞍部までで打ち切ってきたとのこと。久し振りで、お元氣な田村先輩を拝顔する。びしょ濡れの現役達を尻目にこれ以上ご歓談ともいかない。というより、OBたるものこんな時こそ毅然と働いていなければならない。丁度頃合もよし。ぞっとするような濡れ合羽を再度身にまとい、外へ出る。

（編者注…辰野様はこの所超午前様続きで、この原稿も相当に出し渋っておいでました。しかし、編集長は、企画・現場監督とたいへんなど無理をいただいていることに恐縮しながらも、頑固に食い下がったのです。

数々の貴重な小屋作業記録が、今は部室から消えてしまい、後世?のためにもどうしても会報の中に現場記録を残しておきたいのです…と。

こんな苛酷な運命は、辰野様がワンゲルに入部した時から決まっていたと…あきらめていただくしかありません。ハイ)

作業開始。取水場所は、小屋から約130m離れた沢の窪みに決定。そこに30cm角のステンレス籠を沈める。しかし、岩盤で籠を沈めることができないため、石を積み水溜まりを作り、ほぼ籠が沈むようにする。その上に大きめの石を積み、多少の雨による増水でも流されないよう固定する。ポリパイプの接続は大島君が担当。さすがプロフェッショナル。ガスコンロでパイプを熱し、接続金具を差し込み、金具についたフランジのボルトを締めつけて接続完了。（編者の同期の誼としての蛇足…この時松林氏はパイプを支え、大島さんとガスコンロの上を傘で覆っておりました。恐らく、ペン以上の重量が持てないのが、新聞社就職の理由であろうと噂されていた氏にも、山小屋酒場には適材適所の仕事が与えられているのでありました。ハイ。）パイプサイズはインチコー（1インチクォーターの略称で32mm径のこと）で、以前のものより1.5倍くらいのものを使い、詰まりにくくした。また、途中で数ヶ所の水抜きバルブを取りつけ、

パイプ内に詰まったものの排出、及び、どこまで通水しているかの確認ができるようにした。昔のホースは露出だったため、秋には巻き取り、春には敷設する手間がかかっていた。その手間の解消として、今回はパイプを浅く地中に埋めることにした。ス stakeなどの根が張りめぐらされた地面を掘り起こし、パイプを埋めていく。沢沿いは、なるべくパイプが隠れるよう大きめの石を積み上げた。簡単に書くと以上のようなのだが、どの作業も雨の中、泥だらけになりながらで、OB各位、かなりの苦勞をしていただくことになりました。またまた感謝。

皆さんの努力の甲斐あって小屋の前には多量の水を吐き出す水場が完成しました。これで、水汲みの心配もなく、洗い物もスムーズに、快適な小屋生活ができるものと思います。あとは一冬越してみても、問題がなければ万々歳です。

最後に、この作業に携わって下さった方々に心よりの感謝の気持ちを表したいと思います。御苦勞様でした。そしてありがとうございました。



## 水場作り

13期 吉田 穂積

### 次回予告

\*小屋土台石積の修復、補強

\*竈の復活

近未来目標…囲炉裏の復活

これを読まれたOB諸氏へ

小屋作業は本当に心も体もリフレッシュ

できますぞ。そして実に楽しいですぞ。

いつでもあなたのおいでを待っておりますぞ。

いざ集わん 山小屋酒場へ！！

3期 田村 昭夫

山小屋酒場のマスターといたしまして、この度御来店いただきましたお客様に心より感謝いたします。

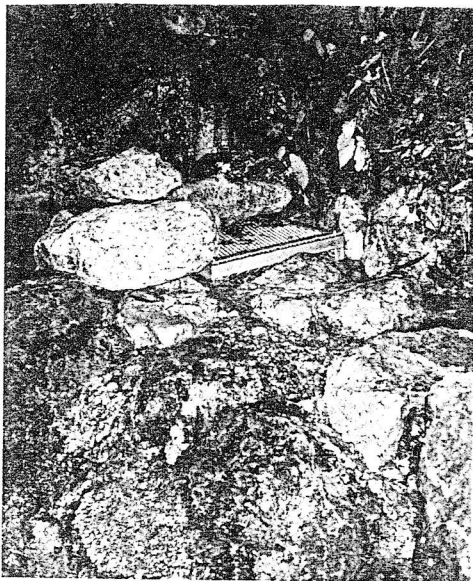
今回御来店いただけなかったOBの方も、来年5月の開店には是非参加下さいますよう、御案内申し上げます。 頓首

今回は水場のホース埋設作業に携わった。水場は通年設置とする為、雪に流されぬよう、ホースを土中に埋設することになる。表面はフワフワの腐葉土なのだが、その下は細かな根の張ったボロボロの土で、所々に石もあり、なかなか思うようにいかない。それでも10人近くで分担し、一人10数m位であろうか、何とか溝を掘ることができた。

バルブ付の継手にプラスチックホースをつないでいくのだが、固くて入らない。小雨の中、ガスバーナーでホースを炙りながら繋いでいった。最後の継目にきた時には、既に取水口の設置が終わり、ホースの先からはドードーと水が流れ出ている。取水口班にもう一度水を止めてもらい、全部を継ぐことができた。

雨の中の作業でかなり濡れてしまい、泥だらけにもなったが、泥だらけの方はさっそく水場で洗い流す。中にはパンツまで替えていた人もあったが、小屋の中は中で濡れた合羽がぶら下がり、なかなか通の世界であった。

皆さん、お疲れ様でした。



## 「山小屋酒場」板前眞末記



13期 吉本 良治

### \*プロローグ

「今度の小屋作業の食料係頼むぞ」そんな電話がCL辰野からかかってきたのが9月の初め。どうせ時間があるからと簡単に引き受けたが、何しろ現役時代は合宿、PWとほとんどは装備係であって食料系の経験は皆無。まして最近では食卓に用意されたものを食べるだけの身であって、何から準備すればよいのか皆目見当がつかない。そんな状態からのスタートであった。

### \*メニュー作り

酒場の板前としてはまず献立を決めねばなるまい。条件をあげてみると

- 1) 酒場向けのメニューであること
- 2) 季節感溢れるものであること

(肉と野菜を炒めて調味料を変えるだけで幾種類もの料理にするなんていうのは論外)

- 3) みんなで楽しめるもの
- 4) 日持ちがして、重量の軽い材料であること
- 5) 春の献立に匹敵するもの

などと、考え始めるとなかなか名案が浮かばない。特に、春の「山菜の天麩羅」に匹敵するものなんて…なおさらギブアップしそうになった。

「春」が「山菜」ならば、「秋」は「キノコ」の連想から、メインを「キノコたっぷりの寄鍋」と決めることができたのが、買い出しの前日であった。「キノコ」なら、誰かが現地調達してくれるかもしれない…そんな期待も込めたメニューであった。

### \*買い出し、荷作り

前日の夕刻、仕事を終えてから、台風の進路を気にしつつも、買い出しに向かう。「気乗りしない」女房殿を口説き落とし、コンサルタントとして同道する。ところが核家族の悲しい所で、4人以上の食事を作ったことのない我が

コンサルタントは15人分の量の見当がつかない。やむなく男の感覚で、米は一人一合、鍋物の材料はわが家の4倍など、かなり乱暴な決め方でようやく買い出しが終わった時には、閉店間際であった。

さらに、生物は腐らせないように、パンは形を壊さないよう、重量はできるだけ均等になるよう、皆のザックの大きさがわからないので、できるだけ小箱に分割するよう配慮して十数個のパッキングが完了したのが23時過ぎであった。

### \*調理、味わい

食料係はどうも食事当番もせねばならない様子である。水場作りの作業から早上がりして支度にかかる。雨に打たれ続けた身には、結構な早上がりではあったが、我がコンサルタント殿よりのカンニングペーパーも雨でグショグショになり読解不能。調理順序がよくわからない。そこでベテランの舟田女子に出馬願った。何しろ、飯を炊こうにも水加減もわからない食事当番ですから。

あたりが暗くなった頃にはようやく調理も終了し、期待どおり桐君の現地調達「キノコ」も鍋に入った所で「山小屋酒場」は開店となりました。日本料理は目と舌で味わうものと、板前は苦心したのだから、暗くてよく見えない。舌だけのハンディでのお味はいかがでしたでしょうか？少なくとも、大昔に倉ヶ岳PWで出会った「アンパン入り闇鍋」よりは、素材が豪華な分美味であったはずと信じておりますが…。

### \*思い違い

ワンゲルは大飯食らい、大酒飲みであったはずであったが、ご飯がいっぱい余り、翌朝は急遽「おじや」に変更となった。お酒はというと、日本酒、ウィスキーが全くの不人気であり、ビール、ワインが好評であった。一日の労働の後は、冷たい飲物がやはり旨い。

(OBの皆様へ。特にこの部分は今後の差し入れのご参考に！！)

## ワイン酒多飲（こと田村氏）と語る...



20期 松下 和隆

### モチベーション

ふと手にした「やまざと（会報5号）」。それは夏休みも最後のとある8月の暑い日であった。明日からはまた仕事。今日は1日ゆっくりこれを読もうと、寝ころがってページを開いた。最初に目にしたのは、13期の辰野さんが提案する「山小屋酒場」。OBで小屋作業をやろう。「無理せず」、「楽しく」、「迷惑をかけず」。「お代はあなたの労働です」、という呼掛けがとても気に入った。「小屋作業」ということばの響きに、私の思いは20年前のあの身も心も充実したワングル時代にトリップしてしまった。

犀奥に道をつける。ベルクハイムから白山まで...。これが当時の我々のテーマだった。ナタ、鎌、鋸。持てるものは何でも持ってブッシュを掻き分け犀奥にいる。「ワングル平」を中心に、白山に向けて、片やベルクハイムに向けて道を開く。ある時は野郎の握ったむすびを、時にはかわいい娘の手によるサンドイッチを頬張り、ひたすら道を切り開く。労働、奉仕、（ついでにブッシュに叩かれるときのマゾヒズムな感情）。これらを私はこの時の実体験から学んだような気がする。

「やまざと」のページを更にめくっていくと...。「ワイン酒多飲日記」3期 田村昭夫とある。おお！これはかの有名な田村先輩ではないか。田村先輩とはかつて20周年記念の白山山行で一度お会いしたことがある。確か同じパーティで、とにかく変わった「おっさん」、という印象を持っていた。20周年記念行事の一環として実施した当時の企画に「オレンジロード」というのがあった。その企画の精神に、いたく感動されていたのを今でも鮮明に覚えている。

「オレンジロード」...。それは金沢の部室から白山のピークまで、とにかく歩き通す、という企画だった。「覚醒」という2文字を書いた「のぼり」を背に、ひたすら歩いたのを覚えている。「ワングル」の原点は歩くことにある。何かを求めて「さ迷い歩く」行動にこそワングルらしさがある。それを20周年記念行事でシンボルチックに演出しよう、というのが当時の我々の狙いであった。確か、21期の田坂がネーミングしたように覚えている。

当時の私は20才の学生。そして田村氏はちょうど今の私ぐらい。そう40才の中年おやじ。その間には当然大きな世代の隔差があるはず。にもかかわらず上記の精神を賛美し、手を握って喜んでいた田村さんに私は一種の戸惑いを感じたものだった。若い。このおっさんは年令とは関係なく生きている。おそろべし...

「ワイン酒多飲日記」は一気に読んだ。酒と素粒子論と聖書と、そして倉谷のコントラストが実にいい。20年前に会ったあの田村さんが還暦を向かえるという。もう一度会ってみたい。私はその日の内に金沢行きを決心した。

### いざ、山小屋酒場へ

9/22（日曜日）の早朝、我々は山小屋酒場こと、ベルクハイムへ向かうべく、犀川ダムサイトに集結した。荷物の仕分けとボッカの分担をする。その際、20期の同僚、栃尾がこうつぶやいた。田村先輩のお相手は、マツに任せろ。その横で、深田がコックリとうなずいた。それは、その夜の、「田村節」の洗礼を予言するものであった。

天候はあいにくの雨。それも台風前日の風雨。天高く晴れ渡った秋晴れの犀奥をイメージしていた私にはちょっと残念。しかし久しぶりの犀奥に私の心は軽かった。加えて私の荷物も軽かった。

言い分け。実は途中で水場作りに使うホースをどっさり担ぐ予定になっていた。しかし現場に行ってみるとホースは無し。現役諸君が作業済み。おかげで私は、えろ一楽させてもらいました。現役諸君に多謝。



相変わらずですね、田村さん

「労働」というお代を払い「山小屋酒場」でくつろぐ我々の前に、田村先輩が姿を現したのは、その日の昼下がりのこと。旧道の整備を終え現役諸君と伴に返ってこられた。

雨にたたられ声少ない現役たち。その中でひときわ元気に振舞うOB諸氏。OBと現役との関わり方にデリケートな一面があることをかいま見たのもこの時でした。でもこれを神経質に問題視するのは特策でないような…。OBはOBの楽しみ方を、現役は現役の楽しみ方を追求すればいい気がします。こと小屋作業に関して言えば、全くの断絶もなく、かつ適度に現役が協力してくれる（ひよとしたらいやいやかもしれないが）現在の関わり方、これが1番いいのかも知れません。親の楽しみは親になってみなければ分からないし、子の楽しみは時代と共に変化する、ってどこでしょうか？でもただ1つ私の経験から言えることは、小屋作業には「テーマ」が必要だと言うことです。現役が現役なりの（つまりその世代の）テーマを持つようになれば事態はもっと良くなるような気がします。OBが「山小屋酒場」というテーマを持って活動しているように…。

「おお、あのオレンジロードの松下君か」。車座になって始まった「山小屋酒場」。私の自己紹介に対し、かつ達な口調で応えてくれた田村さんは、20年前と変わらない。頭は若干白くなった。一方私はだいぶ薄くなった。しかし話しはビシバシ、おもしろいように噛み合う。ワングル論に人生論。政治、教育、哲学に素粒子論。世の中に対する不満と希望。そしてちょっとばかしのエロ話（女性がいたので控えた）。その夜、田村さんとは、ありとあらゆる話を時間にまかせ、夜遅くまで話した。ふと二人が気がついたときには、回りの皆さん、静かに休まれていた…。

同席の皆さん、お騒がてすみませんでした。話題がちょっと偏ってしまったようで…。でも私めは十分リフレッシュさせて頂きました。「山小屋酒場」万歳です。

おれはワングルの寅さんだ！

とは、田村先輩が自らを称されることば。自分を「自由人」と称して疑わない。還暦を向かえ

てもなお、ユートピアを求めて「さ迷い歩く」パワーは相変わらずだ。「何時死んでもいいような生き方したい」、「まだ見ぬ明日よりも今日を充実させよう」という言葉で終るワイン酒多飲日記は、世渡りべたの不器用な人間にも力を与えてくれる。風呂やでサルマタを手拭いがわりに使う田村さん。床にこぼれた雑炊をもつたいたないと這つくばって食べてしまう田村さん。あなたなら「倉谷」をユートピアにすることが出来るかもしれません。Good luck！



クマタカ

## 山小屋酒場雑感

19期 梶 典雅

犀川ダムは雨だった。

どうしても出なければならなかった「きのこ会」の観察会を終えて、ダムに着いたのは午後4時を回っていた。

やっぱり帰ろうか？という思いか頭をよぎる。これでは、まるで「ただ酒」を飲みに行くようなものではないか！しかし20期の面々には「後から行く」と言ったことだし、酒場なんだから、それもまあいいか！とカップに身を包む。

丁度下山してきた現役と二言三言、言葉を交わし、大体の状況をつかんで先を急ぐ。

小屋に着いたのは、まさに宴会が始まったところ。途中探ってきたナラタケとスギヒラタケを寄鍋に入れる。20期の松下君は、はるばる鎌倉からやってきた目的である「田村さんとの会談」に余念がない。騒がしすぎもせず、かといって暗くもない、落ち着いた雰囲気秋の酒場の夜は更けていった。

翌朝、雨をいいことにのんびりする。それでも、10時頃から作業を始める。昨日敷設したという「水道管」の露出部分をうめたあと、せめて酒代の一部にと、テン場の整備に鍬を振るう。昨夜の田村さんの話を思い出し、テン場を農地に転用することにした。畝を立てて、ホウレン草の種を蒔く。チーフの椿川さんをはじめ、重労働をこなした方々には申し訳なかったが、こんな参加の仕方でも許される山小屋酒場がうれしい。

帰り道では、このあとも倉谷での生活を続けられるという田村さんに、栗林、ミョウガ畑、キノコの出そうな場所と、いくつかの食材確保ポイントを急遽レクチャーした。

田村さんは2週間後には、会津へ引き上げられたとのことだった。その田村さんから届いたはがきには

「せっかく種を蒔いてもらったホウレンソウを収穫せずにきたのか残念だ。人糞尿をたっぷりやっておいたので、都合がつけいたら収穫してきてほしい」

旨、したためられていた。

果たして、ホウレンソウは立派に生長したのか？確かめられなかったのが心残りではある。



## 雑感 OBのこと 山小屋酒場のこと

20期 深田 進

ワンゲルOBは500人もいるそうだが、顔と名前が一致するのは、現役時代がダブっていた17期から23期くらいで、最近では23期あたりはかなり忘れてしまっている。

5、6年前、私の職場に、仕事で来ていた設計コンサルタントの人が「深田さん」と声をかけてくれたのだが、その人が「23期の〇〇です」と言ってくれたのになかなか思い出せない。家に帰ってから、名簿やら写真やらを引っ張り出して、ようやく思い出せた。すまん小阪君！

そんな状態にも関わらず、どういう訳か15期には知っている人が多い。金沢に住んで、山に登り続けていることで知り合うことができたからだ。今回の山小屋酒場では13期の方々とも知り合うことができた。

突然余談になるが、私は山登り以外の趣味として「11ヶ国語を話そう」というサークル活動に参加している。

先日、そのサークルに、今回の山小屋酒場の写真を持ってきた人がいたのには驚いた。その人が私の妻に、「これが友祐の父親よ」と言って指差したのが、13期の辰野さんだった。友祐君というのはその人の息子で、先日イギリスのホームステイから帰ってきたばかり。母親と二人でこのサークルに参加している。そんなこととは露知らず、小屋酒場では取水用の籠を取りつけるために、この人の御主人と一緒に川床の砂利を掘っていたのだった。当たり前のことだが、この母子は辰野という姓で、写真を持ってきた人は結局13期の辰野さんの奥さんだったのだ。

それからもう一人、3期の田村さんについて語らなければならない。20周年の時に白山の頂上で祝詞をあげたり、人力車をワンゲルに寄贈



してくれたり、話題には事欠かない先輩だ。

今回はベルクハイムで長期間の生活をしてもらえる最中ということで、神様か仙人のような、近寄り難いイメージを抱いていたのだが、実際はとても気さくで、話しやすい人だった。

ただ、普通の人と違うと思ったのは、学生時代そのままの情熱を今も持ち続けている、大変な熱血漢ということだ。宴席は田村さんの独壇場になるのが常ということだったが、今回は我が20期の熱血漢の松下君がはるばる鎌倉から参加してくれ、山小屋酒場はさながら「二人のビッグショー」というところだった。

翌日、皆が帰ってしまうので里心？がつかれたのか、田村さんも我々に同道されて、金大ワンゲルの新しい部室を訪ねられた。

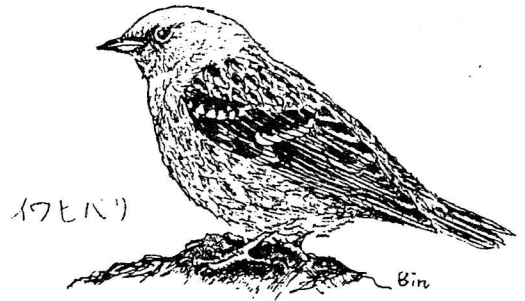
丁度、昨日先に帰った現役部員が3人居て、近況を聞くことができたのだが、部室を後にしてから田村さんが「彼等の言葉は速すぎて、ついていけない」とおっしゃる。田村さんも調子が出ると結構速いし唾も飛ばすし……と思ったが、確かに彼らの語り和田村さんの語りとは違っていた。

彼らはバラエティ番組の司会よろしく、軽いノリでぼけたり突っ込んだりしているのだが、田村さんは、自分の所感を溢れんばかり情熱でまくしたてるといった感じである。丁度中間の年齢にあたる我々の会話はどのように聞こえているのだろうか？

その後、20期の松下、栃尾、私と田村さんの4人で石引温泉に浸かる。さっぱりしてしまうと、明日からまたベルクハイムに戻られるという田村さんのご苦勞が身にしみるとともに、それを苦勞と感じていない田村さんの「異常さ」が、良く分かるのだった。

今回の山小屋酒場、天気も良くないし、仕事もひどそうだし……と、あまり乗り気ではなかったのだが、知らなかったOBと知り合うことができて、とても良かったと思っている。この年齢になると、新しく知人ができるというのは滅多にないことなので、貴重な経験だった。

3期の小林さんの家に泊まるという田村さんを近くまで送り、松下を金沢駅で見送って、一件落着となったかに見えたが、田村さんが財布をなくされて途方に暮れ、栃尾君と一緒に探し回るといいう後日談があった。ようやく石引温泉で見つかり、その夜は二人でまた盛り上がったとか……。ご苦勞様でした。



イフヒバリ

## 曉風翁日記

曉風（昭夫の号）

9/25（水）晴

本日より小屋番に復帰す。会津の自宅を出て早一週間過ぎた。

「もの書きは二流人間のするもので、一流人間は行動をする」と一昨日ワンゲル12使徒の前でのたまいてしまったが、書くことも、師の行動を見ていない愛弟子の為のサービスだと思って、一段と重くなった鉛筆を又とる。

どうでもいいけれど、よくもこんなに大量の食糧を私の為に残しておいてくれたものだ。太平洋戦争時代の食糧難を生き延びてきた私が、食べ物の誘惑に如何に弱いかを、知ってか、知らずか。60年の人生を「粗食深考」を信条としてきたが、今それが音をたてて崩れんとしている。「ひょっとして、皆でよってたかって私を糖尿病にして、倉谷から天国へ直送する気ではないか」と勘繰りたくもなる。よほど意志堅固にしないと彼等の思うつぽになる。私には為さねばならぬ仕事がある。

9/26 (木) 曇りか晴

ああ、なんという幸せ。朝7時、舟田女史の作っていったくれたおでんを温め、うんとカラシをきかせてアツアツを食う。左手には月桂冠の桃ジュース割。カラシ汁に食パンを浸して食う。いとおかし。よく考えてみると、よく考えなくてもそうだが、私はワンゲルOB会の食客なのだ。このようなくだらない文章を綴りながら食べるなんて、これ以上の幸せやある。これでは修行どころではない。徹底的に墮落してやる。外は曇、でも心は晴だ。カラシがキクッ。諸君、会費を納めよう。

でけた。

「閉経の妻を想いてかくセンズリに

鳴き声合ふ秋の虫 暁風

又でけた。

「秋の山路は楽しきものよ

松茸、あけび、栗取りす 暁風

高三郎にかかる中秋の名月を愛でし句。

「月の頃、土手にススキが生えにけり

読み人知らず」

(蛇足…月の頃；初潮の頃

土手にススキ；恥毛)

9/27 (金) 曇

山小屋酒場は今日も朝から開いているのであります。今日のメニューはおでんに日本酒のリプトン紅茶割。とてもよく合うのです。マスターは一人紅茶酒をすすりながら、遠い昔の失恋の数々を、ほろ苦さに砂糖の甘さを混ぜて追想するのであります。

(その1)

万年大学生の私に「…今、縁談があるのです」とその人は云った。思わず抱きしめようとした時、片手に持っていた風呂敷の中のリングが、雨あがりの歩道に転がり落ちた。抱くの忘れて、転がったリングを拾う私をケイベツの目で見ながら立ち去った人。つつがなしや。

(その2)

愛の営み中、背中に回されたA子の指が、私のシャツの破れ穴に差し込まれた。私は恥ずかし

さと屈辱に思わず我が身を離してしまった。あの時のあの人の眼を忘れず。

(その3)

「今、寿司頼んだから、もうちょこし待ちまっし。」と云われて待つこと一時間。やっときた寿司を頬張りながら駆けつけた約束の喫茶店。ウェイトレスから手渡された一枚の紙片。B子よ、今何処に。

(その4)

「田村さんはもう卒業ですね。就職はどこにお決まりですか。工学部は引く手あまたでしょう」と彼女。「はあ、僕はもう少し大学に残るつもりです」と私。一月ほど後、彼女から手紙がきた。それには「私は金沢を離れます。その前に一度あなたにお会いしたく思います」とあった。不甲斐なき私は泣きながら、その手紙を破り捨てた。C子は今誰のものか。

午前10時頃、福光の橋本氏が、高三郎に登りに来た。午後4時頃下山。小屋に立ち寄った。意気投合す。

9/28 (土) 快晴

今日は水平道の草薙に出る。途中で玉井さん家族(4人)に会う。玉井さんは鹿野教授夫人の友人。小屋に入ってもらい接待す。私の馳句、名句を見せたら喜んでた。小学4年生の息子を今夏、北海道の野性塾に送ったそう。野性塾の塾長は四高の出身で67才の人だと云う。有名な児童文学者で素晴らしい人物だそうである。金沢からは人材が多く出る。我々も先輩の後に続こうではないか。



9/29 (日) 晴

「キツネは沢山のことを知っているが、ハリネズミはでかいことを一つだけ知っている」(外国の諺) 私がネズミ歳生まれだからではないが、ハリネズミの方が好きである。「でかいこと」とは何か。神の存在、宇宙の真理かもしれない。知識などこれに比べれば全く無価値である。ハリネズミは知識もなく学もない。しかし生活と体験で得た大きな信念を持っている。周囲からいかなる妨害や中傷を受けようと、それをはねつける強いハリを持っている。信ずる道をまっしぐらに突進していくハリネズミに乾杯!

9/30 (月) 曇

「おもしろき、こともなき世をおもしろく、  
住みなすものは、心なりけり」

高杉 晋作の辞世。

皆さんで楽しくばーっとやろうぜ。ワンゲル  
酒場甚句。

”この世は酒飲んで、騒いで、ハイさようなら。  
サノヨイヨイ”

”神をたたえて 酒飲んで踊れ。

サノヨイヨイ”

”金を貯めたい奴、貯めるがいいサ。おいらが  
それを使っただけ。サノヨイヨイ”

”忙しくもないのに 忙しがりゃいいサ  
アクセクと死んでゆけ。 サノヨイヨイ”

出けた! 閉経の妻シリーズ第2弾。

「閉経の 妻ノタウチまわらす我が技に  
我満ち足りて 共にはてなむ 晩風」

”うまいもの食いたきゃ 食べばいいサ  
そしてビリクソこけばよい。サノヨイヨイ”

”いいもの着たけりゃ着るがいいサ、  
風呂じゃ醜体かくせない。 サノヨイヨイ”

”御殿に住みたきゃ住むがいいサ  
地面ひとゆれハイおしまい。サノヨイヨイ”

10/1 (火) 曇

「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由の  
君主であって 何人にも従属しない

キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であ

って 何人にも従属する」 ルター

これは一見矛盾しているようだが、矛盾していない。権力には従属しないが、全て平等に奉仕するのがキリスト者であると言うことである。キリスト者をワンゲル部員に置き換えてみたらどうだろうか。

もしクラブに権力機構のようなものがあつたとすれば(ワンゲルには絶対ないと思うが)それには服従しなくてもよい。クラブの一員としてクラブ員全員に奉仕して欲しい。一人は皆の為に、皆は一人の為にあることを、クラブ活動を通して学んで欲しいのだ。他のクラブと異なつてワンゲルは寝食を友にした仲間達だ。この体験は必ず社会に出てから生きてくる。

舟田女史と山口君の論争楽しく読ませてもらいました。一OBの感想を込めて書いてみました。

10/2 (水) 晴

昨日にひき続きお二人の論争に加わらせていただきます。ワインと日本酒の番茶割の勢いを借りて書きます。

舟田女史の現代の世相、青年の価値観の分析まさにその通りです。私達は所詮時代の申し子でしかないのです。ワンゲルの将来と云う議論を通して日本の将来を憂うジャンヌダークを、女史に私は見出します。あなたが云われているのは一大学の一つの部についてではなく、日本の教育、日本の政治、日本の未来を問うことなのです。頑張れ! 和製ジャンヌ・ダーク。

水平道整備に行く途中、元倉谷住人、山下忠氏(65才 湧波町4丁目)と話し合う。山下氏は金沢市職員だった人で、「青少年の森」に炭焼小屋を作り、青少年に炭焼実習を指導している人である。私の炭焼の里復活案には大賛成してくれた。それには営林署の許可がいるとのこと。「その方は私に任せて下さい。」と別れた。来年はやれる! 見通しは明るい!

倉谷産の木炭がボートで運ばれてゆく図が目に浮かぶ。

10/3 (木) 曇のち雨

散歩の途中、山下氏に会った。ダムの人達の宴会用にゴリを採りに来たという。土・日を除いて天気の良い時はほとんど来ているそうである。土・日は街の人達の邪魔にならないようにと来ないそうである。私は山下氏に山人の優しさを見た。街の人達にこの山人の優しさを伝えたい。

10/4 (金) 晴のち曇

運動不足と夜が長いので2時から起きている。私の敬愛する綾井英二先生（プラスチック加工の権威 中小企業庁技術アドバイザー）が著書に

「サラリーマン社会というのは、馬鹿を優秀な人間が養うシステムだ。得をするのは馬鹿な奴だけだ」

と述べている。私もこれには同感した。私ばかりでなく、この本を読んだサラリーマンはかなりの数、会社を後にしたという。様々の会社の社長が綾井先生のところに苦情の電話をよこしたそうである。サラリーマンに限らず、同年輩の5%が、他の95%を助けているのが実情だ。日本の将来は5%の日本人の肩にある。自分を5%の人間と思う者、しっかりしなくてはならない。

今日も朝食をおいしくいただけたのは全てワッゲルOB会様のおかげです。いくら感謝しても感謝しきれない。OB会のご好意に答える為にも、修行に励まなければならない。聖書、科学史、トポロジー、etc.

山下さんの小屋の前に折りたたみ式寝椅子が

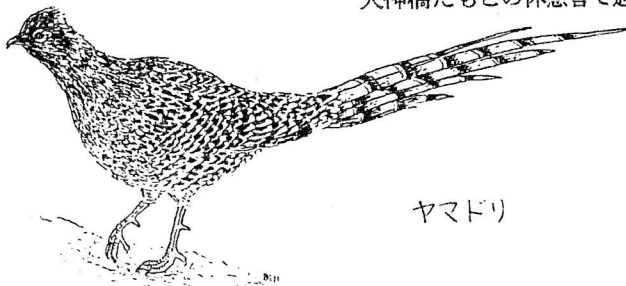
放置されていたのでBergheim備品としていたでいてきた。山下さんの相棒、東さんに事後承諾。ベルレーヌの詩を口ずさみたくなるような秋の午後でありました。

10/5 (土) 晴-曇-雨-曇

栗拾いに出る。お目あての栗の木のの下には既に先客がいた。カモシカである。彼のエサ場を邪魔しないように道に落ちていた数個で我慢した。方励之著「宇宙のはじまり」（講談社、ブルーバックス）を読む。科学をやるらは必ず信仰がなければならぬ。本物の科学者は信仰を持っている。アインシュタインは信仰を否定して、人間の知性で自然が解明できると思い上がっていた。科学を支えるのはキリスト教的世界観である。日本には無神論をとる科学者が多い。西欧から科学が伝わった時、科学の知識と、その底流となる精神を切り離した日本の為政者が悪い。科学者も信仰と迷信を混同し、非科学的と云う言葉でひとくくりしている。

ニュートンは晩年神の証明に心血をそそいだという。自然は聖書の別冊とする思想が、自然科学の精神である。したがって信仰なくして自然科学はありえない。

(10/6 (日) 晴 この日、鹿野教授夫人と彼女の友人玉井さんが、ボートに乗って倉谷を訪れました。鹿野さんは高三郎の途中まで登山。田村さんは急遽荷物をまとめられ、小屋じまいをされて一緒に下山されてきたそうです。私は福井経ヶ岳に登ってきた日で、就寝前のもう一仕事で学研の部屋の明かりをつけていたところ窓の外から呼び声。田村さんが金沢最後の晩を天神橋たもとの休憩舎で過ごそうとされている



ヤマドリ

ことを知りました。生命あふれる季節の頃と違い、冬に向かう季節は侘しさも募ります。精神衛生上よくないなあと気掛かりでしたので、めでたしめでたしでした。

翌日、一緒に読売会館へ宮本憲一氏の講演を聞きにいき、この講演に誘って下さった鹿野夫人が、環境を守るための運動、特に産廃不法投棄の調査のために山奥に入られていることを知りました。犀川に危険な水が入りこんでいること、住民運動としては動かぬ証拠をつかんで行政につきつけるしかないこと。利権でしか物を考えていないやくざまがいの業者との間で危ない目にも遭うこと。しかし感情だけでは運動は進められないので、調査のための人、特に土地勘があって調査できる人が欲しいのだとも言っていました。私はことの重大さを感じながらも、泥沼はOB会だけで手一杯という感じで、ろくな反応も示さず帰ってきました。

ともあれ、田村先輩は7日、福島へ帰られました。)

舟田様

金沢在住期間中はお世話様になりました。今年は春からついていました。金沢が私を父祖の地へ呼び戻してくれた感じがいたします。

今後は学生時代の様に、夏休みはオロロ休暇を会津で過ごし、春や秋は金沢で暮らす生活になりそうです。

宮本憲一先生の講演には反省させられたことが多くありました。被害者意識には敏感であるが、加害者意識には鈍感な自らを思い知らされました。プラスチック加工の技術者として耐候性のある丈夫な製品を開発してきた私は、その製品の使用期間が切れて廃棄される時のことなど考えもしなかった。私達技術者が作った物が自然をどれだけ汚染しているか、その責任とことの重大さに胸が痛みます。鹿野さん達は産廃処理業者を糾弾していますが、本当は企業に責任があるのです。処理業者はメーカーの罪を引

き受けた、気の毒な羊です。糾弾されるべきは廃棄物質に手を焼いて、処理業者に引き取らせているメーカーにあるのです。私は処理業者に顔向けできません。私の為すべきことは、回収・処理作業なのかもしれません。ユートピア建設はその後に来るものだと思います。 敬具

田村拜



綾井 英二氏のエッセーから  
(東大工学部造兵学科・工業化学科卒  
元中小企業庁技術アドバイザー)  
---ワインシュタイン氏の名付親

## 会津のワインシュタイン

平成8年3月20日

ある日NHKテレビの朝の番組を見ていたら彼がいた。会津の哲人、我が弟子ワインシュタインである。早速電話してみると、やはり彼であった。会津の伝統工芸、漆の技術の保存に漆の木から樹液を採る会の話だった。

その後郡山に行った時、その時の事情を詳しく聞くことが出来た。

「驚いたよ。君が出てるナンテ……」

「いや、テレビで放映したのは極一部なんですヨ。実は漆を掻く時、会のリーダーの先生が漆なんて慣れるとあまりかぶれないものだと言われましたもんで、テレビ局の女の子にいいとこ見せようと、私が裸になって、漆の木に抱きついて見せたんです。顔も擦りつけて」「それで何ともなかったんか？」

「いや、2-3分したら身体中かぶれてきて、顔なんか見るに堪えない程腫れ上がってしまいました。」

「そりゃそうだろう。それでNHKはビデオに撮ったんか？」

「撮るには撮ったんですが、余り残酷なシーンなんでカットされました。」

その後治るまで一週間位かかったそうだ。大変な弟子である。

彼との付き合いは、十五年前に会津若松の会社の指導をした時に始まる。ホテルのトイレで「弟子にしてくれ。」

と頼まれた。

「僕は弟子はとらない。」

と断ったんだが、トイレに正座して

「お願いします。」

と言う。

「弟子にしてくれなければ、トイレから出さない。」

何時迄もトイレに居る訳にもいかない。「マア、マア。」と言っているうちに弟子になってしまった。文字通り臭い仲である。

技術はともかく、純粋さは人後に落ちない。  
ある時

「宇宙飛行士になる。」

と言いだした。

「好きにしたらいい。」

内心試験を受けたって、どうせ落ちるだろうとたかを括っていた。まさかと思っていたら、ホントに願書を出してしまった。勿論不合格だったのだが、何故不合格になったのか、理由を聞くために東京迄出掛けたのだから驚いた。

「俺が落ちる筈が無い。」

と言うのである。一ドンキホーテが現在でも生きていたと思った。直情径行、思いついたらやらねば済まない。ホドホドにしないと、奥さんが迷惑する。

また、孤高の人でもある。日本の将来を憂い悲憤慷慨して、語り出すと止まらない。

「日本が今日のように墮落したのは、戊辰戦争で会津が負けたことに端を発するんだ。」

と言う。

「そう昔のことを言うなよ。俺はまだ生まれてなかったんで良く分からない。」

と宥めるしかない。

孤高であることは、俗人の理解を得られないことでもある。会社勤めには向かない。サラリーマンというのは、嫌な仕事をガマンしてやる



から給料が貰えるんで、彼のように嫌なことはやらないのでは所詮勤まらない。と言って、他の商売でも、人を相手にするものは、多少は妥協しないとやっていけないものだ。

自分でも分かっているのだろう。一人でやることを考えた。

「人力車を引いて、観光客の案内をします。」  
と言い出した。五年程前のことである。郡山で講演会をした時、わざわざ会いに来てくれて、滔々と人力車の人文的価値を語り出した。どうやら、人力車の元締めになる気らしかった。アイディアは悪くないと思った。最近になって、京都でマラソンの選手がアルバイトにやりだした位だから、先見の明があると言える。それに人力車を引くのは一人で出来るから、彼に向いているとも思った。残念ながら奥さんが体裁悪いと反対したことと、会津若松では観光客が少ないことから、実現しなかった。

かたわら、彼は現代の師弟を鍛え直すと言うことで私塾を開いた。訪ねてみると、彼の家の門に「獅子塾」と書いた大きな板がかかっている。

「まるで吉田松陰みたいだな。」

と言ったのだが、生徒が来るかどうか心配だった。今年山形に行った時、その顛末を聞いたのだが、

「アアあれは、生徒はいたんですがみんな出来が悪いので破門しました。」



ウチのポチは感心していた。

「あんなことしてたら、ピアノの先生でもみんななくなってしまう。カッコいいこと言っ  
て、生徒に愛想をつんされたんとかがう？」  
言うもんである、我が奥方も…。

それやこれやで、目下朝早くから新聞配達しているのだそうだ。これならケンカも出来ないし、健康にもいい。彼は欲は無いから、それでワインを飲みながら、アインシュタインの哲学を一日中考えて時間を潰しているんだそうだ。テレビもくだらないから原則として見ない。ただし木曜と金曜はNHKの「お江戸でござる」と「とうりゃんせ」を見せてもらうのだそうだ。それでも奥さんに気を使って、自分から座敷牢に閉じ籠もって謹慎しているんだとうそふいていた。

「一日が長く感じられます。」

「そうだろうナ。フィジーの土人と同じ生活だからネ。きっと肩もこることは無いだろうネ」  
「その通りです。全く肩はこりません。アハハ」  
僕はポチに言ったものである。

「あれが会津のワインシュタインだよ。」

山形駅で別れる前に、彼が励ましてくれた。  
「先生、あと少しの辛抱ですから、ラストスパ  
ートして下さい。」

それってもしかして、もうじきクタバルから逃げ、ってことじゃないのかな？

「先生が呼んでくれるんなら、いつでも大阪に行きます。ナーニ、ダンボール一枚あれば、住む所には不自由しません。」

ホームレスが弟子では困るんだよナー。しかし、彼のような人が政治していたら良かったのにと  
も思わないでもない。



## その後のワインシュタイン

平成8年4月10日

先の一文はワインシュタイン君にも送った。  
一月後、出光が波を招いて若い人達に紹介したところ、寝袋をリュックに入れて飄然と姉ヶ崎の研究所に現れた。その夜の泊まりはまだ決めていない。その席で追記を申し込まれた。

「先生、私は漆の木に抱きついただけじゃないんです。漆の液を採る溝をベロベロなめたんです。」

「そりゃ大変だ。それでどうなった。」

「みるみる内に、口中腫れてきて、見るも無残な姿になりました。しかし面白いですね。口の中は真っ黒になって、2-3日したら唇ごと剥けてしまいました。」

おそらくその間、何も食べられなかっただろうに…えらいことをやるもんである。

その時、気になることを言っていた。

「5月から炭焼きをやりようと思って、ただで泊まれる山小屋を探したんです。金沢の山の中にいいのがあるんで…酒は山ぶどうなんかありますから、用意します。ナーニ猿だって酒くらい造るんですから、任しておきなさい。先生、金沢に来たら、泊まりがけで来て下さい。」

「だって、寝るところがないだろ。」

「心配ありません。寝袋を用意しとくから…」

「でも、山の中じゃ、自動車は使えないだろ」

「先生なら10キロや20キロ歩かしたって大丈夫です。」

トンダことになってしまった。フィットネスで鍛えたのも善し悪しだ。10キロ歩かされて、猿酒を飲まされて、寝袋で寝させたらエライことになる。

大阪に帰って来ると、間の悪いことに5月に金沢から指導を依頼してきた。ほっておく訳にもいれないが、猿酒もいただけない。ワインシュタイン君に連絡したもんか、どうしたもんか目下思案中である。

秋の登山シーズン真っ只中ですが、お元気で山行続けられていることでしょうね。私、最近はなかなか出られなくて、くろゆりクラブの方もご無沙汰。主人の時間のある時のみ、ほんとうに寂しい思いです。せめてもと思い、深田久弥の「百名山」の本、ビデオを見て、山に登ったような気持ちになって楽しんでいます。夏の追われに群馬に行く機会があり、上州武尊山に登ることができ、至仏山、巻磯山etc 一遠く望め、感激致しました。

先日図書館で偶然「分県登山ガイド石川県の山」に出会い、昨年執筆されていたことを思い出し、早速読ませていただきました。貴女と坊やのお写真を所々に見つけ、とても分かり易い解説に何度も読み返し、嬉しく思いました。

本当にご苦労様でした。大変でしたね。益々ご活躍されます様、お祈り致します。



オオアカゲラ

大学を卒業してから一十年になります。懐かしい学生時代を振り返ると、ワンゲルでの山歩きでは一山の風、土の匂い、木の香り、草木の花の香りと色合い等々、五感で楽しんだものでした。

私がいたころのワンゲル部はどちらかと言えば、ひたすら歩くことにポイントが置かれていたように思います。私はといえば、どんどん歩くより、道草をしながら、周りの木々、野草、動物達に会えるのが楽しみでした。高山植物が厳しい自然の中でも、頑張って花を咲かせている姿を見て、ある種の尊敬さを感じたものでした。

昨今、時間は急速に進み、「人は何のために生まれてきたか」と考える時間をも奪いつつあります。我々が生きている地球を、「便利だ、便利だ」と開発という名のもとに、どんどん破壊する文明を押し進めてきたように感じます。

便利で快適な生活は、自然と人間社会の深い関係を知らないで、どんどん自然破壊を進めていくのではないのでしょうか。

そのため、あちこちで自然保護運動が起っています。

人間も自然の一部、母なる自然は、生きるためのさまざまな智慧を与えてくれます。

山、海、と遠くへ出掛けていなくても、私達の身の回りをみまわして、お世話になっている地球さんに少しでも恩返しをしたいものです。

そんな気持ちで自然解説員（の真似ごと）をしています。

自分を好きになると、世界も好きになれる  
生きていることを喜べるようになる

鳥や、花や、虫や

山や、空や、風に揺れる木々も

同じ時を生きている仲間として大事にしたいと。

3年間の「ベルクハイム」編集作業で培った技術を生かすべく、新聞社に勤めて23年。このうち18年間を新聞記者、編集記者（内勤、いわゆる整理）として編集局で過ごしましたが、5年前に出版部へ異動となり、現在は営業局の営業企画部というところにいます。肩書も「記者」から「ライター」へと変わりました。

新聞社の営業局というのは新聞収入の大黒柱である広告を扱うセクションであり、営業企画部は、第一線部隊の広告部をサポートし紙面化する企画・制作部門にあたります。毎日の仕事が「原稿を書く」ことであるのは記者とさほど変わらないのですが、読者のために書く、というよりはむしろスポンサーのために書く、というところが記者との大きな違いでしょうか。

そんな私に、編集局長より怖い事務局長から「原稿を書け」との命令です。読者諸兄を感動させる話など書けるべくもありませんが、日常業務の一端をご紹介しますことでお許しいただければ、と思います。

広告（に限りませんが）はスポンサーが持ってくるのを待っているだけでは数字が上がらないので、いろいろな企画や特集をでっち上げて、協賛を募る（セールスをする）わけです。「〇〇の日」とか「高校同窓会シリーズ」とか「〇〇町40周年」とか「祝／浅蔵五十吉先生文化勲章受章」とかタイトルを付けて、記事（広告ではカットといいます）の下に名刺広告をずらっと並べるのが代表的でしょうか。

これらは「純広」（スポンサーの純粋な広告）に対して企画広告といいますが、日々の紙面を見ていただくと「よくもこれだけあるものだ」というぐらい、さまざまな広告が紙面を飾っています。「広告ばかりで読むところがない」と言うなかれ。広告も、りっぱな情報なのですぞ。

それはさておき、本体に収容しきれない場合には「別刷特集」という形を取ることがよくあります。前回の『山ざと』にご紹介いただいた「金沢大学別刷特集」は私が担当したものでした。このときは「金大ワングルOB」の肩書？が大いに威力を発揮し、金大事務局との折衝では身内意識を持ってもらえ、スムーズに話が進みました。紙面に何人かの現役部員が登場していましたが、あれはまったくの偶然で、私も『山ざと』を見るまでは気がつきませんでした。

仕事の上でワングル人脈に助けられることは、しばしばです。今春まで「いしかわの自然百景」という月1回の連載を担当していましたが、これのネタの仕込みは19期の樺さん（県庁環境政策課）にずいぶんお世話になりました。15期の上馬さん（県白山自然保護センター）には紙面に登場していただきました。

このシリーズでは、ヘリに乗って地獄谷へ行ったほか、岩間の噴泉塔、白山のブナ林、白山のお花畑、ブナオ山など自分の好みでテーマを選定することができ、ワングルOBとしてのプライドをちょっぴり満足させることができました。

再来年は「祝／金大ワングル40周年」という広告特集を企画したいと思います。OB各位には名刺広告一口5万円の協賛をお願いいたします。新聞社に儲けさせるのはいやだ、とおっしゃる方は金大ワングルOB会の口座に振り込んでいただいても結構です。できれば20ページほどの別刷特集を出したいですね。

（了）

## 1 5 期同期会報告 清里・小諸編

第11回幹事 15期 佐野 哲雄

15期は特異な期であるらしい。スーパーレディーのOB会事務局長を輩出したことからだけでも判るかもしれない!?。現役時代の活動もさることながら、OB、OGになってからの活動や、特に同期会の開催に関しては、他の期と少し違うらしい。

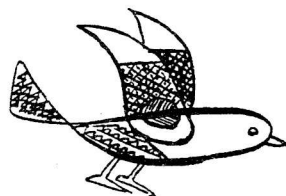
「…らしい」という婉曲な表現にしたのは、単に、筆者の情報不足かもの懸念があるため。「我が期はもっと特異性がある」という方は、是非、原稿を投稿して下さい。催促疲れの編集長には、何よりのプレゼントになることでしょう。

さて、今年の15期会は第11回を数えます。同期の結婚式が一段落し、仲間の突然の訃報（高村氏）に悲しみ泣いた年の、翌々年の昭和60年。第1回が私の生まれ故郷、愛知県蒲郡市の三谷温泉にて開催されました。

東海地区にいた16期の数名を含め、盛大に宴会を催した結果、翌朝にはびっくり仰天の請求。当初の会費以上の追加を余儀なくさせられました。以来、同期会開催時には、決まってこの話から昔話が始まるのであります。（ついでに、あの水車風呂は覗けたと、話も一気に急降下するのであります…ああ、おぞましい。）

そんな法外な追加請求にもめげることなく、翌年からも、担当幹事の汗と努力のおかげで、毎年趣向をこらした会が各地で開催されてきました。この間さらに二度も仲間の訃報（比田井氏、横井氏）に接しながらも、家族ぐるみの会へと発展・継続しております。

今年は、清里・小諸にて、11月3、4日の両日に行われました。参加者は11組20名。一時は50数名に膨らんだ参加者も、親離れ・子離れが進み、また親族・地域社会の中堅としてどうにも抜けられない立場になったりで、少々寂しい



数字となりました。それでも、卒業時の20名の過半数の家族が集まれたわけで、これはこれでよしとしましょう。

「清里の森」は八ヶ岳の麓にある、山梨県が開発した別荘地です。落葉松や白樺の林に囲まれたその一画に、私の勤める会社の保養施設があり、これを利用すれば、第1回の汚名挽回（経済出なのに、経済観念のない幹事など…）ができる。しかも、ご無沙汰している比田井君の墓参りもできる…まずは企画賞といったところでありました。

山荘の定員は15名。20名全員を押し込むのも無理ではありませんでしたが、プライバシーを尊重し、希望者には近くのペンションに宿泊してもらうことにしました。ペンションの方を貸し切りに、と逆発想も検討しましたが、子供達が騒いでも怒られないの条件がクリアできそうになく、分散宿泊となりました。

年に1回ながらも、数回顔を合わせていると、子供は子供同士の絆ができ上がっています。新顔でも、親が心を許しているのがわかるのでしょうか、すぐに打ち解けて一緒に騒ぐようになります。子供達だけで親をシャットアウトの「宴会ごっこ」も始まります。真夜中のエレベーターの前で、懐中電灯で照らしながらトランプをやっていたとか、親顔負けの武勇伝も数々。しかし、この子達も、数年後には誰も参加しなくなり、その頃には「おじさん、おばさん」だけでどこかの湯治場につかっているのでしょうか？たとえそうであっても、スイスカヒマラヤのトレッキングをと、意気盛んに議論しあっているものと思います。

さて、幹事の苦労はまだ続きます。山荘には

管理人はおらず、夕食は昔ながらにみんなでワ  
ンゲル料理でもと思いましたが、20名もの料理  
となると厳しい。せっかく旅行に出てきたのに  
やっぱり夕食作らなきゃいけないの？と、特に  
女性軍から無能幹事と思われそうで、ペンシ  
ョンでの夕食としました。元シェフのオーナーの  
手によるフルコース（一応ガイドブックでは）  
をペンションで一緒にゆっくり取り、懇親会は  
山荘にまた移動して行われました。

近況報告では興味深い話がいろいろできま  
す。震災の事、仕事の事、家族の事、海外旅行、  
新築、借金、etc…。とりわけ、K君・U君の  
両奥さんの話は、とどまることを知らず…両君  
の狼狽ぶりが、またほほえましいものでした。  
今回初参加の比田井さんや、子離れで単身参加  
組になった高村さんの話にはやはりしんみりし  
てしまいます。その後は、あいもかわらぬ昔話  
や最近の趣味の話。波長のあっている仲間とい  
うものは、とりたててどうということのない話  
をかわしながら、心のマッサージをやっている  
のでしょうね。清里の夜は更けていきました。  
明日の好天を落葉松林の上に輝く星達が約束し  
ていました。

翌日は、それぞれの宿泊場所で朝食。山荘組  
は、朝食作りから、後片づけ、寝具の整理整頓、  
部屋・浴室・トイレの掃除に、ゴミ集めと結構  
作業がありましたが、実にスムーズに進みます。  
見ていて、気持ちがいよいよほどうでした。やはり、  
これはワンゲルで鍛えられたおかげか！

赤岳は名のとおりに朝日に赤く輝いていました。  
そんな山並をバックに記念写真を撮った後、国  
道141号を北上し、小諸へ向かいます。途中、  
旧国鉄の最高地点の野辺山に寄ったり、小諸駅  
付近ではSLのD51が引く臨時列車を見たりで、  
鉄道マニアのM君は満足そうでした。

駅の近くの、浅間山を望める墓地に、新潟生  
まれの比田井君は眠っています。久しぶりの大  
勢の仲間の顔に、喜んでくれたことでしょう。

墓参りの後、懐古園の入口の蕎麦屋さんで昼  
食。久々に、蕎麦らしい蕎麦でした。予定して

いたのは郊外の食堂でしたが、時間の都合で急  
遽キャンセル。この辺の段取りは地元の比田井  
さんにお任せしてあったので、もたつかずに済  
みました。

懐古園の散策後、来年の再会を期して解散。  
幹事は宇野君で、余呉湖でキャンプするか…ま  
あ、お任せです。連休の渋滞もあったけれど、  
無事全員帰宅できたようです。メデタシ、メデ  
タシ…。

で、終わりたいのですが、やはり懺悔してお  
かないと、後で何やかんやと言われそうです。

（否、懺悔しても、15期の連中ですから、同じ  
ことなのです。）

要するに、関西からのお客を名古屋で乗せた  
ものの、まず高速の入口を選択ミス。さらに渋  
滞に巻き込まれ、清里到着が大幅に遅れてしま  
いました。山荘へ着いてからの準備も数々かか  
えていた私は、M君の「駅へ着いたら、適当に  
そこらを回って行くから」と言っていたような  
…の記憶の方をあてに、つまりJR駅へ寄らず  
山荘へ直行いたしました。ところが、彼女達は  
「駅まで迎えに行く」と私が言ったの信じ、  
渋滞で清里にも着いていないものと思って、山  
荘への電話もせず、観光にも回らず、ひたすら  
寒風の駅前で待ち続けていたというのです。彼  
女達は、たまたま観光ついでに駅に寄ったU氏  
に発見され、事態が判明…。「ドラブルが発生  
した時は、そこを動かんのが山の鉄則や！」に  
陳謝するしかありませんでした。決して忘れた  
訳ではありません。勘違いしていただけないで  
す。こんな時には、日頃は快く思っていない携  
帯電話を用意しておけばよかったと思いました。

というわけで次回からの幹事の人材は、携帯電  
話の番号をメンバーに知らせておいて下さい。

OB会名簿にも乗せましょうか、編集長？



## 連想＝高桑へのレクイエム＝ 台風、剣、高桑

19期 早川 大善

今から14年前、1982年の1月2日、吹雪をついて、それまでの長年の夢であった厳冬の剣岳の頂上に立った。早月尾根からのアタックであった。

当時、剣へは何度も行っていたが、早月はワングル時代に登ったきりで、実に8年ぶりの2回目であった。あたりまえのことだが、厳冬期、避難小屋（2000m）は白い世界の下だった。ただ煙突が危しく崩れ落ちているのが分かったのみであった。

その8年前の夏、金大WV時代、僕は初めて  
の剣へ登った。

ダラの大西先輩を無理矢理引っ張り出してリーダーに担ぎ上げ、高桑と、1年後輩の深田、土田とで行ったPWである。高桑と一緒に行った山はそれが初めてだった。それまで、東北とか北海道とか白山を志向していた高桑が、どうとち狂ったか、初めて北アへ行く気になったのである。

前日、我が早川邸でひとしきりビールを飲んで、翌朝早く出発。台風通過直後の猛烈に暑い日だった。

トップは高桑である。それまでは”よくバテる高桑”というイメージを山田先輩（同期の山田のことである。途中で退部してしまったが、彼は「先輩、先輩」と言えば、先輩がケツまでも拭いてくれるか如くいつも「先輩」という言葉を連発する癖があり、反対に自身の敬称にされていた。）から聞かされていたが、どっこいモーレッツなスピードである。

”このままのペースで行けば俺がやられる”と予想できたので、大西リーダーに「ちと早い」とアピールした。しかし、ダラの大西先輩は

（依頼原稿に付いてきた「私信」なのですが…これがまた、おもしろい。早川 大善氏と、初対面？の方には、これも紹介しておいた方が、会報の目的に適うように思いました。

「判決。この沙汰により、これまでの返信なしの件を不問とす。一件落着！」）

舟田さんへ

11月16日

原稿依頼のきた時はこんなに寒くはなかったのですが、もう冬ですね。

大変遅れまして申し訳ありません。OB会報いつも楽しく見させてもらっています。

ところがどっこい、全くの不精者で、郵便物はいつも、さっと一瞥した後机の上にならず高く積んであります。そのうちぶつつんして、ある日まとめて捨てることになるのです。それで、ワングルOB会費とか、その他の連絡も恐らくしたことがないのではないのでしょうか？

まったくとんでもない奴なのです。でも、そういう無責任さとは裏腹に、先程も言ったように結構楽しんでいるので、見捨てられないだけの努力をしようと、忙しい中、必死でこの原稿を書きました。というより、探しました。

つまりこの原稿は、その昔、根に高桑のことを書いてくれと頼まれ（きっと、追悼文集を出すのだと思いますか）途中まで書いてあったものなのです。それもまったくの途中で、いつものごとく、そのままにしてあったのです。でもこれはぶつつんになった時もさすがに捨てる気がなくて、どこかへしまいこんでおきました。捨てた覚えはない、どっかへしまいこんだはずという記憶をもとに、家中をひっくり返し、ようやく見つけて、最後まで書き足しました。

以上のように、私としましては、ほんとに忙しい中、この件では「非常に努力をした」つもり（つもりだけ？）ですので、どうか遅れたことは水に流して、これからこんな私を見捨てず、連絡を下さい。

OB会活動ほんとうにご苦勞様です。



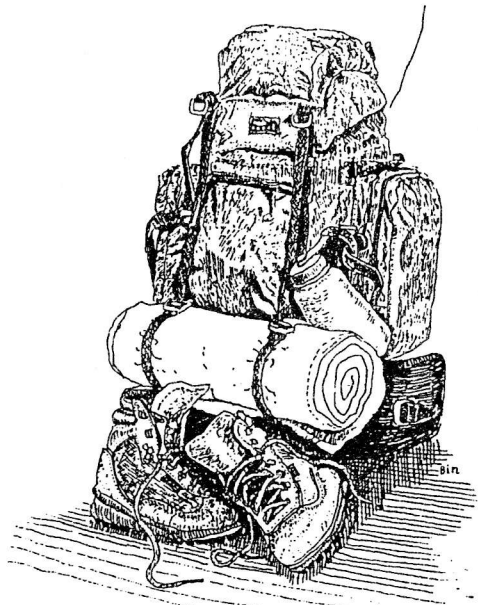
意地を張ったのか、高桑のスピードにストップをかけないで、「まあ付いて行け。」と言うばかり。そこで、ぶつぶつ文句を言って登る。

そのうち文句も出なくなってしまった。汗が10リットルも流れたらうか、とにかくひどかった。そして、ようやく樹林帯ももう少しで抜けようかというところ、突然に高桑のペースが遅くなり、とうとう避難小屋地点でダウン。正直言って”やったぜベイビー!!”ホッとした。

(下山して、皆同じことをあの時思っていたのだとわかった。) 高桑様々、そこで我々は高桑と一緒に、1時間以上も木陰で昼寝という特典を、鬼のような大西リーダーから得ることができたのである。

この最初の剣岳、そして高桑との山行は、標高2000mの避難小屋地点で、強烈な印象を僕に与えていたのだった。

その当時、避難小屋は、確かに立派に立っていた。



んでもないことが起きたことを知った。受けた大きな驚きと衝撃とが、半信半疑のままの僕を犀川ダムまで運んでいた。

搜索…。だが、ベルクハイムでの3日間は、高桑を探しに来ているというより、まるでワンゲルサロンであった。久々に会った連中と話が弾んだ。当然のことながら、高桑のことも話題に昇ってはいたが、まだこの事態への現実味がなく、悲しいというよりは懐かしみ、楽しんでいるかのようなようだった。きじうちに行った誰かが、小屋から漏れるローソクの灯が外の叢の中の空罐にチラチラと反射しているのを見て”ギャーでたー”とわめきちらして帰ってきたことにも笑いころげていた程であった。

3日目。何の手掛りもないまま休暇が切れていよいよダムへ帰るボートに乗ろうとした時だった。

長田さんと、佐野と僕の3人は、思わず何かに引き留められるように立ち止まった。

「あのダイバーが潜って、上がって来るまで待たないか？」と長田さんが言った。僕もそう言おうと思っていた矢先のことだった。迎えのボートを待たせたまま、3人でじっと見守っていた。

厳冬の剣を征服した僕は、続いてその年の夏、あのチンネを目指して池ノ谷より三ノ窓に入った。

ワンゲル2年の夏合宿”カノープス”での2日目のバテよりひどく、おそらく、山をやり始めて最高にくたばったのではないかと思う。三ノ窓を前にして、足がどうしても上がらなくなり、池ノ谷ガリー方向から押し出される雪塊近くで大休止した。

その場所では、丹沢山岳会が、前年11月池ノ谷ガリーで雪崩遭難した3人を搜索中であった。逝った仲間を探している最中とは思えない程、和気あいあいと、バテた僕を尻目に非常に楽しそうであった。ふと、高桑の時を想った。

瀬戸(現 梶夫人である。あーあー、あの瀬戸がーである)からの突然の tel だった。デートの誘いかと嬉しそうな返事をしたのだが、と

長く感じられた。しばらくして、ダイバーが水の上に顔を出した。

「あったぞ!!」

その一言が、ワンゲル同窓会に参加したか如き我々に、おかれている状況を認識させた。空気が凍りついたようになる。半信半疑がついに現実となった。衝撃が、悲しみが我々を襲った。何かしなければ……でも、何をするのだ？

訳も分からないまま、その後の処理を長田さんと佐野とご家族親戚に任せ、僕はベルクハイムへ走った。ひたすら走った。ベルクハイムにはまだ同窓生が談笑していた。彼等が比重大い空気に包まれるまでの時間は、ほんの一瞬だった。何も言わず村中が駆け出してしまった。

倉谷は、ほんの僅かの間に重い深い悲しみの空気にすっぽり包まれてしまった。

口の中に、山の草木を一杯に頬張り、鼻の穴にも泥を詰めて、蠟人形のように横たわっていた高桑をそこに残し、我々は迎えのボートに乗り込んだのだった。

高桑の体をご家族に渡すことができた、彼の引き上げを見届けることができた……そんな答えを持って帰れることが、深い悲しみをやわらげていることをほのかに感じながら……

そんなことを、疲労困憊の頭の中で思いおこしていると、ふと周りの空気が、まさしくあの時のように張り詰めたのだ。

何も聞こえないはずなのに、何故か緊張感が伝わってくる。そしてあの時とまさに同じく、瞬間にして池ノ谷の空気の比重は重く、そして冷たくなり、これからチンネを目指す我々のパーティーをも包みこんでしまったのだ。

思わず「何だろう？」と立ち上がって、雪溪の下部を見ると、丹沢山岳会の捜索隊が、先程とは別人のように、真剣な顔できびきびと動いている。そのうち、シートに巻かれた人影が、

雪の上に横たえられた。何人かが、悲しそうな気配でじっと見守っていた。疲労も重なって、心を暗くした日であった。

翌日からは、2日間雨も続き、結局チンネ左稜線の登攀をあきらめて、雨の中を三ノ窓より剣本峰を経て早月で下山することになった。

夏の早月を下りるのは、高桑達と来て以来のことであった。今度は夏だから、避難小屋は確認できるだろう。

注意して下った。思い出の避難小屋は確かにあった。しかしそれはもはや小屋ではなく、崩れ落ち、樹林の中に残骸をさらけ出していた。  
”ああここで、高桑様のおかげで1時間も、トカゲできたのだ。”と少し懐かしかったのも束の間、そんなことはつゆしらぬリーダーは、そこでの休憩はとらず、一路馬場島を目指した。当時の我々は、目的とする登攀の前後途中は全くのアプローチに過ぎず、特に「後」は、ただ急いで下るのみで感傷に浸る時間もなかった。その頃には雨もやみ、再び夏の日差しが戻り始めていた。

その4年後には、14ピッチ、300mの岩壁を殆んど一人でリードして、ついにチンネ左稜線を完登した。その年は天候にも恵まれ、北条・新村ルートも殆どのピッチをリードして登攀できた。

その時はチンネの3ルートを登り、三ノ窓のベースを剣の頂上帽子雪溪へ移し、北壁登攀というのが当初の計画だった。しかし、台風接近のため、翌日以降より天候の悪化が予想された。憧れ続けてきたチンネ左稜線を登ったことで、一区切りついたこともあったが、台風＝高桑の連想が、夜のテントの中で僕の頭をかすめた。

翌日僕は、まだ真っ青な夏空の下で、即下山を決意したのだった。夏山 Joyの青空と白い雲に囲まれて、”ほんとに台風はくるんかいな”という心残り気なパートナーと共に、剣本峰経由で早月を下山した。

この時の早月は、本当に駆け下りた。誰もが

驚く程の短時間だった。あの避難小屋にも見向きもしなかった。後でそのパートナーから、翌日天候が悪化、三ノ窓から頂上へ向かっていたどこかのパーティーの一人が、長次郎のコルからの急な登りで滑落、死亡したことを聞いた。

もし計画通りにしていれば、悪天の中、我々も行動していたはずであった。台風＝剣＝高桑の連想の中から、高桑が抜けていれば、もっとチャンスにこだわっていたかもしれない。

彼は山の神の裳裾に控えて、僕を見守ってくれたのだろう。きっとこれからも…。



合掌。

## あるOBの戯言

20期 栃尾 俊治

近況報告も出していない私に白羽の矢が当たり、「グループ薮の山行のことも何でも…」と舟田さんより原稿を依頼され、締切を10日も過ぎてこれを書いています。OB会設立時より他人事のように思っていた私ですので、この原稿を書くにあたり、とりいそぎ「やまざと」を読み、書いている次第です。

こんなことからOB会に対して力が入っていないことが、おわかりかと思えます。

みなさんは最近山へ行っておられますか？私の方はといえば、ここ2ヶ月程仕事に追われ山へ行けず、苛ついている状況です。

私は以前より、OBとなっても山を続けている人が少ないことに寂しさを感じている一人です。「山とは？」と、現役の頃、一晚中語り明かした熱い思いはどこへ行ってしまったのか？と問い質したい。

確かに家庭を持つといろいろ束縛され、自由な時間がとれないこととは思うが、昔同じ気持ちで山へと向かった仲間としては残念である。

そんな折り、9月の中頃に、小桜の小屋で21期の竹本と出会い、学生時代以来の再会に、楽しい一夜を過ごすこととなった。ペンギン歩きに飄々とした風貌は昔と相変わらずで、今も山を続けていることに大変嬉しさを感じた。

下界での出会いも嬉しいものではあるが、山の上で、しかも白山の無人小屋ともなれば、感激もひとしおである。我々（グループ薮）同様にいまだに山へ足繁く行っている奴もいるかと思うと、俺も負けずにと闘志が沸いてくるものである。

OBの人達には、もう一度気持ちを奮い立たせ、山へ戻ってきてもらいたい。と同時に、現役及び新OBには、今の気持ちをずっと持ち、どんな形でもいいから山を続けてほしい。10年後、20年後出会った時

「山登っているか？」

との問いに

「ハイ、登っています。」

と答えてほしいものである。

私もこれから何年登ることになるかわからないが、OBとしてではなく、同じ山仲間として現役の人達と関わり、山の状況などを教えてもらいたいと思う。そして、決して私のために現役の捜索隊が出ることをのまないよう、心して山へ行きたいものである。

どこか山の上で会えることを、楽しみにしています。

いまだに山へ登り続けているOBより

（さてと、これでようやく今週は山へ行けるかな！！）

## 23期同期会報告

8月9日（金）の夜をメインに、23期の同期会を石川県白峰の緑の村で行いました。以前の会報でも一度紹介しましたが、23期はOBとなってからも何回も集まっており、若いうちは誰かが結婚すると、お祝いの大義名分で、数年前からは家族も連れてという事で、昨年冬に白馬乗鞍スキー場で、その前は立山山麓で行っています。さて、今回は21期の竹内さん、22期の桜井さんにもご参加いただき、全部合わせて12家族、40名が夏の白峰に集まりました。以下その内容について簡単に時間の経過と共に報告致します。

8月9日 15:00に現地集合ということで、それぞれ自家用車を使って三三五五集合一応1年半振りなので、ひとしきり現状報告の話に花が咲く。子供はというと幼稚園～小学校低学年がほとんどなので、それぞれすぐに友達となって遊び回っている。そうこうしているうちに、夜のバーベキューの準備と明日から白山へ登る家族はその食料の準備。アッという間に夕闇となり、バーベキュー場貸し切りのような状態で、大バーベキュー大会。ただ皆35才を過ぎ、昔のままのパワーとはいかないようで、買い出ししたビールと肉は少々余ったようですが……。バーベキューで腹一杯になったら今度は子供向けの大花火大会。これも少々数が多すぎたようで、あたり一面煙でモウモウ。やおら後片付けをしたり風呂へ入ったりして、その後は明日白山へ向かう家族（計5家族）は早めにおやすみ。残りの明日帰るだけの方は、夜遅くまでいろいろ語り合っているようでした。

次の日の朝6:00に白山へ向かう家族を見送り（注：筆者は残念ながら白山へは登らなかったの、白山登山の方の報告はできません。聞くとところによると南竜までは全員到着し、その日の晩はテン場でまた盛り上がったようです。その次の日頂上へ向かったかどうかは定かではありません）、朝ご飯を食べて解散ということにしました。

23期は地元でOBが結構残ったことや、気のいい人間が多いこともあり、卒業後の同期会を継続してやっています。仲間と酒を飲んだり、昔話で盛り上がったたりというのはいくつになっても楽しいものですし、今後も出来る限り続けていければいいなと思います。ちなみに次回（来年の夏頃？）は富山在住OB主催で、富山県氷見の海水浴とおいしい魚という案が有力なようです。

平成 8年11月

23期金沢在住OB

戸水・中川・名倉・鳥越



コジュケイ

MTBで通勤している。松本の西のはずれの田園地帯。10月末ともなれば、朝のいつとき、標高600m近いこの盆地一帯は放射冷却の霧に包まれる。収穫を終えた田畑の上を漂う乳白色のカーテンに下界はすべて閉ざされて、周囲の高い山々の頂あたりだけが、文字通り、浮かんでいる。

西空高くから安曇野を見下ろすのが常念岳。ずっと左へいった梓川の谷の奥には、緩やかな乗鞍岳の稜線。東の高ボッチの尾根が南へと低まった先、塩尻峠の上あたり、北岳と仙丈ヶ岳も浮かぶ。振り返って北の山々、爺ヶ岳、鹿島槍、五龍岳あたりはもう真っ白だ。先日の雨が山の上では雪だったらしい。

自身は濃い霧の中にいるので、なにか、とんでもない山奥に放り込まれたような錯覚に捉われる。気象条件にもよるけれど、このあたりではときどき遭遇する、山の気配が直接麓にまで降りてきたような瞬間だ。

同じ朝、通勤ラッシュに耐えている多くの人たちのことを想えば、この豊饒な景色を前にできるのはずいぶんと幸せな話だ。東京や大阪では働かないとする選択は正しかったという実感が、この朝のいつときばかりは、ゆるぎないものとなる。

\*

現実に戻らねばなるまい。

事務所へ一歩踏込むなり、生気が失せていくのがわかる。この一年半ばかりのあいだ、ともすれば頭をもたげてくる、どこかで自分を欺いていないかというつぶやきをどうにか押しとどめて、今日も仕事の顔になる。

考えようによっては、自分の机があって、とりあえず、朝、そこへ出て行きさえすれば日常が始まっていくというのはラクな話だ。それを繰り返せば一年になり、ボーナスもあたる。

その対極にあるような暮らし方、つまり、昼



近くに起きて、はて今日は何したものかとひとしきり考えて、結局は、桜湯に行つて、ニュー三久に買い物に行っただけで一日が終わるというような生活をずいぶん長いこと送っていたばくは、あれはあれで気楽だけれども、気持ちの深いところは結構不安にかられる日々だったということもしっかりと覚えている。

そんな意味での不安は、悪い物が落ちたかのように、今はない。

そして今の仕事も、少なくともその断片を切り取って見るだけならばそんなに悪くない。事務系の人たちに比べれば、気詰まりの多い部屋を離れて外へ出られる機会はずっと多いし、図面を描くのはいかにも技師という感じがして心地よい。2.5万分の1地図を見たり、航空写真を調べたりするのはもともと得意なほうだ。さして意味があるとも思えない書類など、さっさとハンコを押して回してしまえばよい。

それではなぜ？ 喉の奥に小骨がつかえたままのようなこの不快感はいったいどこからくるのか——もちろんそれははっきりしている。

林道を開けるということへの抵抗感。

山を刻んで車道を通すという事業に対しての、拭い難い不信感。

それをずっと考えていた。林務課林道係というところで仕事をし、給料を貰いながら、根本のところではそれを全否定している。「踏み絵」という言葉が、それほど場違いな響きを伴わずに、頭にちらついたりした。

\*

もとより、ぼくの場合は就職動機が不純だったような気もする。専門知識があるわけでもないのに、イメージとしては、林業試験場のようなところで、樹木の種子発芽試験とか、マツタケの現地適応化調査とか、そういったことをマイペースでやれたらというのがあった。余談だけれど、たいていどこの県でも林業試験場というのは山の麓の気持ちのいいところにある（鶴来の樹木公園を散歩したことのある方はお分かりでしょう）。それもひそかな魅力だった。

しかし現実には、県の試験の「林業」に受かった者が配属される可能性として圧倒的に高いのは、治山・林道の部門なのである。わかりやすくいえば、山の中の土木工事を受け持つセクション。長野県の場合、林務部関係の職員は本庁、出先を合わせると400人強（この数字からしてすでに、なりわいとしての今の林業の規模を考えると、異様な数だと思える）いるのだが、このうちの実に3分の2以上の職員が治山・林道

に携わっているのである。予算でみるとそのウェイトはもっと重くなる。それに比べると、ふつうの人がイメージするところの林業的なもの、造林や間伐への予算づけなどほんとうに微々たるものだ。

そしてこのことは、長野に限らずどの県でも同じであろうことは容易に想像がつく。なぜか。元締めである林野庁の考え方がそっくりそのままだからだ。この役所の国有林や林道をめぐる節操のない考え方は、白神山地の話などでも知っていたから、ぼくは国家公務員の林業職にパスしたときもそれを蹴った。一本すじを通したようで気分がよかった。

ところが県庁とて事態はまったく同じなのだ。県が管轄しているのは民有林、より里に近い森だ。それぞれの土地で山仕事をしたり、森の手入れをしている人たちの意見を聞き、サポートしていくのがその役目だと当然思う。けれども実体は、国が用意したメニューをただ当てはめて黙々とこなすだけのミニ林野庁と化している。中央集権国家ここに極まるという感じ。

具体的な話。松本から長野へ抜ける篠ノ井線沿いに、ぼくの担当する村がある。大きな事業の予定がないという理由から一年生に任されたいが、村の一番上流の集落で下水道を引くことになり、それを林業集落排水事業という林野庁の補助事業を受けてやることになった。山村の生活環境を整備することにより若者の定住化を促し、林業の振興、ひいては山村の活性化につなげるという趣旨からして、なにやらマユツバだなどと思わせるのだが、とりあえずそこまではいい。やっかいなのは、事業費の2割は林道に使いなさいという縛りが入ることだ。もとより村役場の担当者も下水道のことしか考えていなかったから、これには困った。申請期限も迫っている。役場の人と2人して急ごしらえの林道線形計画を地図に引っ張って提出したが、そんな林道に具体的な使い途があるわけもない。

この村の周りには、アカマツやコナラを主体にした、いかにもふつうの雑木山。かつては薪炭材を山に求めることもあったろうが、今はときおり、地元の人がキノコ採りに入る程度の静かな里山だ。そこへ無理やり、役所の考える「林業」を持ち込もうとするから話がどんどんいびつになっていく。

建設会社かにかのC.Mに、「地図に残る仕事をしているお父さんはスゴイと思う」と娘が言うのがあった。ぼくの場合で言うなら、石仏と観月の名所として知られる小さな村の里山の一隅に、無用の長物を刻んでしまったという苦みは、当分の間消えることがないだろう。



\*

なにやら内部告発ルポめいた話になってしまっていていけない。「林業の現場ならではの声を」というのが舟田さんからの依頼だったのに。

残念ながら、役所は（中央の）役所向けの仕事をするのに精一杯だから、ふつうに山仕事をしている人たちの声を聞くゆとりがない。逆に、自分の山や森をよく見て、そこに一番あった作業を実践しているような人たちは、はじめから行政の画一的なマニュアルなど信じていない。山の作業路も自分たちでつくる。（大町で、天然の落葉広葉樹の山を手入れして、新しい薪炭林の形を模索している荒山さんという方の森を、一度見に行こうと思う。）

役所が推進する無目的な林道事業に対して、そのうち必ずどこからか異議申し立ての声があるものだと、ぼくは思っていた。ところがそうだったことはほとんどない。理由として、林道工事が年々奥山へと進んでいって、今ではほとんど人目につかないような所で黙々と行なわれていること、山麓の集落に人がいない（役所言葉で言うところの不在村者が増えた）ので、チェックのしようがないこと、などがある。けれども何より大きいのは、今のところ、山あいの村での一番の収入源が、こうした公共事業による土木工事であることだ。

現場で工事のおじさんたちと昼飯を食べながら、ときにはそんな話になる。「こんな道つくってどうするんだろう」ぐらいのことは、みんなうすうす感じているのだ。そこいらの公務員なんかより、この人たちは政治を見る目も数段鋭い。でも結論としてはこうなる。「それでもむしろ食っていかにかやならんから」。



つい先日の衆院選の結果も代り映えのしないものだった。ともすればまた、経済テコ入れ、不況対策と称して補正予算が組まれ、公共事業がばらまかれるだろう。そうなればこの林道〇〇線はさらに1千万円の増工だ。ぼくらは山を削るために図面を引き、森を壊すために残業だ。現場の人たちもまた、雪がくるギリギリまでブルドーザーを動かし続けるだろう。

つまるところ、あれこれ言ってもこの国の公共土木工事依存のシステムは当然変わる気配がないし、今に始まったものでもない。そして、なにやかにやアドバイスめいた声も聞こえてくるのである。結局、おまえが言ってるのは、企画をやりたかったのに営業にまわされたというような、よくある新人の葛藤とおなじではないのか？と。樹木やキノコの名前を知る代わりに、コンクリートブロックの安定計算なんかをやらされているための愚痴ではないか？と。「仕事の表面上は悪くない」のだったら、そこだけを見て、働き続けていくよう自分をコントロールしていくのが社会人だということくらい、27にもなってまだ気がつかないのか？と。

——本当に、そうだろうか。

\*

前にも言ったように、金沢での後半の3年間（通算7年いたうちの）、ぼくはかなりのんびりと暮らした。もうすこし、何かまとまったことをやれなかったかという気がしなくもないが、いまさら仕方がない。

ただ、山だけはよく歩いた。ワングルの仲間を誘うのも気が引けるような、石川・富山・飛騨地方の不遇な低山へ、好んで一人出かけた。

——麓の村の、たんぼの脇の仕事道がそのまま尾根へと続き、いつしかそれは春の堅雪の下へと消えていく。ウサギの足跡を追って高度をかせげば、周りの雑木林はやがて幹周りの太いブナの森となり、ほどなく隣村とをへだてる頂稜の一角に飛び出す。ピークは厚い雪の下。思いがけないほど近くに、白山とそれに続く山々、目を転ずれば立山連峰も、東の空にくっきりと浮かんでいる。——

それで満足して、弁当食べて下りてくるというだけの、他愛のない山歩き。けれども、往き帰りに通った村の様子だとか、麓から見上げた尾根の緩やかな形だとか、静かな低山ならではの情景を、折に触れて思い出す。いわく説明し難いのだけれど、単なる一趣味として片づけてしまうほど軽くはない、思いのほか深いところで後々の自分に効いてくるような時間だった気がする。暇だったこともあるが、そういう山のことをいつも考えていたせいだろう。

山の往き帰りに目にした廃村の数々。そこを再度訪れ写真におさめ、また元住人を探しあて、かつての山あいの生活を聞きとる。こうした地味な調査を、富山の山好きな人たちの有志がまとめた、『村の記憶』（山村調査グループ編／桂書房刊）という本がある。豪雪と生活の不便、ダム建設による水没と、村を閉じなければならぬ理由は様々だったが、いずれにせよ、炭焼きをはじめとする山仕事を主体にした山の暮らしの価値を、社会全体が認めなくなっていった。昭和30年代後半から40年代にかけて、実に多くの山の村の灯が消えていったことがわかる。学校も、神社も、お墓までもが山を離れた。ぼくが親しんだ山の麓のそこここにも、そう遠くない昔、子どもが走りまわり、夕餉の煙が立ち昇る暮らしがあったのだと、あらためて思う。

「桂よ、さよなら。あけび、ぶどう、くるみ、なめこ、さようなら、桂よ」（西赤尾小学校桂分校の閉校式での『桂の歌』）

\*

あまり顧みられることもないが、世の中のうちねりとともに、多くの山あいの地域がそういう変遷を経てきた。林道建設の促進→林業の振興→山村の活性化、というような安易な図式をにわかには信じられないのは、そのあたりにある。基盤整備などと称して、道やダムを作れば何かがおこるという考えは、結局は幻想でしかなかったし、過疎を食い止めるどころか、山里の暮らしを動揺に陥れるだけだった。26年前、二人の生徒を送り出して閉校した桂分校のあった同じ五箇山に、こんどは高速道路が通るといふ。人形山がグレンデに変わり果て、数年後のワングルは、冬合宿の舞台をまた別の山へと探し求める、といった事態にならない保証はどこにもない。

\*

山あいの地で、心穏やかに暮らすということ。今また、そういう価値観を人間が取り戻しつつある（田村さんの試みを、みんなどこかで羨むように）。かつての村跡でも、草を刈り、水を引いて、季節のいいときには山の暮らしを選ぶ老夫妻などがいるという。

人はまた山に戻るのだろうか。



## 熱い大地の想い出話

33期 西村 かおり

皆さん、ただいま。パラグアイから8月に帰ってきました。

2年ぶりの日本に戸惑いながらも、ワングルの仲間や山々は全然変わりなくて、ほっとし、うれしく思っています。2年分のブランクを埋めるべく、今年は秋山に行きまこうと計画していたのですが、裏剣に行き、捻挫をして現在療養中（山は変わっていないくても、体力、筋力は変わっていた…）。

山は変わらないと思った一方で、今回山小屋ベルクハイムの変わりようには驚いてきました。が…。帰国し、同期で集まろうということで金沢へ行き、ついでに（！？）小屋作業、兼小屋見学、兼高三郎登頂をしよう…という計画でした。が、あいにくの雨。それでもしっかりと雨の中、慣れないツルハシ、鍬なんぞをふるって（ホント！？）仕事をしてきました。報酬の酒場が待っているにも関わらず、私の同期達は、現役の引き上げが決まり、若い女の子達が下りてしまった時点でやる気をなくし、日帰り而下りていってしまいました。（重いザックを担いできたというのに。私の帰国の方はダシだったのでしょか。私は彼等の分も含め、教祖様のお相手を務めました。田村大先輩の福井時代のご勤務先が妹の行っている会社だったと分かり、福井弁も懐かしんでいただきました。）

そうそう、そういう話を頼まれたのではなく、題にもあるように、皆様の税金（もちろん私も払っていた）を使って、青年海外協力隊員として派遣されたパラグアイでの2年間の想い出等を書こうとしていたのです。

何せ私は作文がすごく苦手で、題だけは早々に決まり「暑い」じゃなくて「熱い」（亜熱帯で、半年以上は夏で、40度を越す日が多い）なんてかっこいいじゃない…から、肝心の本文にとりかかるのに、1か月以上を要してしまい

まして…。さて、何を書きましょうか。

まず、パラグアイの基礎知識から。南米大陸のおへその部分に位置し、面積は日本の約1.1倍。人口約410万人。牛口800万以上。農牧業国です。余り知られていませんが、約1万人もの日系人が暮らしています。山も海もなし！！ただ、真っ平らな国。公用語はスペイン語とグアラニー語。そう、私はスペイン語が話せるのです（もちろん今の所役には立たず、日々忘れているのですが）。そして、首都はアスンシオン。そこの教員養成校（大学の教育学部みたいな所）で、理科の実験授業を受け持っていたのです。仕事の苦労話は多々ありますが、それはおいおい話すことにして、今回は毎日の生活に欠かせないお茶の習慣「テレレ」についてご紹介しておきます。

お茶そのものは、インディオ、グアラニー族の薬用飲料であったマテ茶（聞いたことがあるのでは？）を使い、それに薬草を入れた冷水を注いで飲みます（冬でしたら、熱くして飲みます）。このお茶を一日に何度も（仕事の合間にテレレをしているのか、テレレの間に仕事をしているのかわからないほど）、何杯もおなかチャブチャブになるまで飲むのです。なんでも、野菜を食べる習慣のないパラグアイ人達は、このお茶からビタミン類を取っているのだそうです。

テレレのやり方にはルールがあって、涼しい木陰で、家族や友人とともに、丸くなってテレレ椅子に座ります（どの家にも大きな、背もた

### テレレセット



薬草入水エシ(2L)



(プラスチック製)

れが倒れているテレレ椅子が必ずあります)。大体、年下や女の人か給仕係になります。ポットに水と氷をたっぷり入れます(田舎で飲めば、濁った井戸水、虫がうかんだ水の場合もあります)。グァンパという木や、牛の角製のコップにマテ茶(ジェルバ)を入れ、氷水を注いで、ボンビージャというストローで飲むのです。最初は自分(苦い!)、次は隣の人、また隣というふうに回し飲み。回ってきたら、全部吸わなければならないし、前の人か知らないおっちゃんであっても、ボンビージャの口をぬぐってはいけません。

何(十)周もするとおなかも張ってきて「グラジオス(ありがとう)」と言って輪から外れます。給仕係は輪の中の誰かが飲み続ける限りは自分も飲み続けなければなりません。私はよく、一杯の量を少なくしたり、飲む真似だけをしていました。

このテレレ、社交の場としてとても重要で、単調な毎日の生活の中で、いろいろな噂話、失敗話、笑い話、政治の話と、たっぷり情報交換をし、交流することになるのです。

ホームステイ先で私が初めてテレレの輪に入り飲んだ時、家族はじっとみつめたものでした。パラグアイ人の生活に溶け込むには、また、仕事をスムーズに進めていくための人脈作りにも、テレレへの参加は不可欠でした。最初は、知らないおっちゃん達との回し飲みや、井戸水には抵抗がありましたが、慣れると毎日飲まずにはいられなくなっていました。

困ったのは、授業中でも生徒が飲みながら人の話を聞いていることで、禁止令を出しはしましたが、暑い夏などはなあなあになってしまいました(とにかく暑くて、勉強も仕事もやる気が起きてこない)。

このテレレセット(グァンパ、ボンビージャ、ジェルバ)を日本へ持ち帰ってきたのですが、回し飲みする仲間がいません。家族でと思っても、1時間もテレレすることは不可能でした。いいところ2-3杯。それぞれに忙しいし、せいぜい二人。それも回し飲み抵抗があったり、少し癖のある味が不評であったり、結局一人で飲んでいます。でもそんな私もおいしくない。やっぱり外で飲まないと…。やはり、あの原色の広大な風景(赤土の道、青い空、大きな緑の木、原色の花、etc)がないと、おいしくないのだとわかりました。ああ、またおいしいテレレを飲み、パラグアイへ行きたくなってきたよー。

こんなテレレの習慣からもわかるように、パラグアイの人達は働き者ではありません。肥沃な土地からは主食のキャッサバ、牛肉や果物も世話をやらずに食べられ、食うに困るということがなく、ともかく暑く、のんびりなのです。かつかつ働くことはなく、もちろん残業もなく、その日が過ごせればよいのです。日本と比べれば便利ではないけれど、楽しく、気楽に、素直に生きていると思います。

こんなパラグアイの生活にどっぷり浸かってきた私。あくせく働く気も起きず、いまだにぐうたらしている状態です。日本での社会復帰にはもうしばらくかかるようです。

もっともっとパラグアイでの楽しい話があるんだけど、次の機会に。

テレレを試したくなった人、福井に来て下さい。たっぷり用意してあります。写真もあります。それでは、ひとまずこのへんで。

35周年記念誌では、ケルンに裏表紙を飾ってもらったものですが、次回からは協賛を得られない見込み。というのは、35期吉田氏がコージツに就職して以来、現役部員の足はそこへしか向かなくなってしまったからです。

物売るだけでなく、情報も技術も親切に付加してくれ、礼儀正しい彼は、中高年おばさんにも圧倒的人気を誇っています。

かつて、キスリングと革靴さもなくばキャラバンシューズ…程度の知識から進歩しないまま山を再開しようとした時、私は山道具店で立往生したものでした。身に染み込んだ幕営登山とワンデイハイクのギャップ、プラス、聞き慣れない新素材の品々、どう使いこなせるのかわからない便利商品の数々。あわてて山溪を買ってきて広げれば、よくわからないメーカーに、どこを比べればよいのか…これまたわからない。

店員に素直に聞けばよいものを…相手が当然のように「山の経験は？」とこちらの技術を量ろうとすれば…なまじワングルOBなばかりにうろたえ、しどろもどろになった自分がありました。あの時、吉田さんみたいなワングルOBがいてくれたら、私はもっと気楽に聞けて、もっと利口に快適に山を楽しんでいけたらと思う。

かくして迫った「原稿ちょーだーい」

## 今どきの山道具あれこれ

35期 吉田 稔

OB会の中では一番下っ端の者が、諸先輩方に向かってこのような原稿を書くことは非常におこがましいのですが、いつもお世話になっている舟田先輩から依頼されましたので、一店員という立場から、'96年現在の山の道具の傾向、売れ筋商品などについてご紹介させていただきます。

尚、商品名や素材等は年々変化していきますので、ここに挙げたものでも無くなってしま

可能性はありますし、又、メーカーに関してはコージツで扱っているものに偏らざるをえないこともお許し下さい。

### <靴>

無雪期（6月～11月中旬）を中心に山へ行かれる人が大多数のため、一番よく出るのは、革+GORE-TEXの登山靴です。無雪期の中でも、7、8月の夏山を中心として、2、3回程度の山行をされる方には、ナイロン布+GORE-TEXの靴がよく出ます。以下、山行別に具体的な商品名を挙げていくと次のようになります。

\*日帰り中心でなおかつ回数の少ない方には、無雪期に限っていえばナイロン+GORE-TEX。

例) キャラバン GK40 ㊦ 19,500 円

シリオ251GTX ㊦ 23,000 円

\*日帰り中心でも毎週末山に行かれたり、小屋を利用した2、3泊程度の山行をされる方には、アッパー（一番外側の部分）と靴底の耐久性が必要になってきますので、革製、もしくは、革+GORE-TEX。このタイプはそんなに重くもなく、軽アイゼンも装着でき、夏の白馬などの雪渓、残雪期の山にも使用可能。

例) 革+GORE サイズ25.5

シリオ272GTX ㊦ 35,000 円 (約1450g)

シリオ267GTX(女性モデル) サイズ23.5  
㊦ 34,000 円 (約1250g)

ザンバラフジャマGT サイズ40  
㊦ 35,000 円 (約1330g)

### 革

ザンバラフジャマ サイズ40  
㊦ 26,000 円 (約1440g)

\*テントを持参する山行で、常に荷物が20kg以上、今だに現役と変わらずバリバリ山に登っていらっしゃる方、少々雪でも山に行かれる方には、昔ながらの重登山靴。革製で両足で2.0kg以上のもので、靴底も固くしっかりしたものがこれに該当。又、積雪期、山岳会に入会されて、冬・春合宿、遠征等に行かれるほどの方にはプラスチックブーツなども。

もちろんこれらの靴にはアイゼン装着可。ちなみに、今の現役が一年を通じて使用しているのが

ハンクグ ラングコップェル 両足

ⓧ 51,000円 (約2350g)

ハンクグ ビッツパリュー 両足

ⓧ 49,000円 (約2100g)

の2機種。それ以外では

ローバー アイガー 両足

ⓧ 43,000円 (約2100g)

マインドル スーパーマッターホーン

ⓧ 52,000円 (約2800g)

積雪期プラスチックブーツ

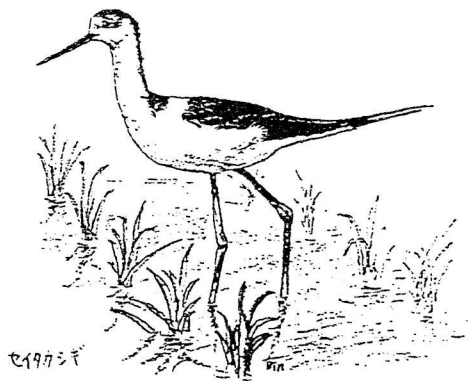
ローバー チベッタ 両足

ⓧ 46,000円 (約2300g)

以上が今時の靴です。ここにあげたのはあくまで一例であって、万人にとっていい靴というのはありません。山行別で分けてみた場合に、靴自体の性能で適していると思われるものです。一番の問題は、自分の足に合うかどうかです。必ず、前後サイズを含めた3足でサイズ合わせをすることが重要です。

さらにそれぞれの特徴を列記すれば以下のようになります。

- ・ナイロン布製--軽量、履き易い、防水性無し。
- ・ナイロン+GORE--軽量、履き易い。GOREが有効の期間は防水性があるが、GOREがだめになると水が漏る。
- ・革製・軽登山靴--履き慣らし、防水クリームを塗る手入れが必要。耐久性あり。
- ・革+GORE--履き慣らしが必要。GOREが有効でなくなっても、革登山靴と同様の手入れで利用できる。
- ・革製・重登山靴--十分な履き慣らしが必要。防水クリーム等の手入れが必要。耐久性はダントツ。防水性も高い。
- ・プラスチックブーツ--防水性は文句なし。5年以上たつと劣化がはじまり割れる可能性有り。



#### <ザック>

これは、ザックの背面長と背中長さの合うものが良いでしょう。つまり、担ぎ易いものとなります。ザックの中では40 l以上の容量のものには背面長が調整できる機種もありますが、それ以外のものはある程度長さが決まっていますので、実際に背負ってみることが重要です。

容量に関しては、以下のようになります。

- ・20 l以下--日帰り、ハイキング程度。サブザックとしても使用可。
- ・20-30 l--日帰り。雨具、コンロといった一通りの装備を十分収納可。
- ・30-40 l--一年を通じてオールラウンドに使える容量。コンロ、1-2人用のコップ、非常パック、ツェルト等。秋口からの防寒着、小さなシュラフも収納可。
- ・40-50 l--3泊以上の小屋泊まりをされる方等にお薦め。
- ・50 l以上--テントを持ての長期山行。パーティーを組んでの山行向き。

具体的なメーカー名を挙げれば、一般によく出るのは、ミレー、ロウアルパイン、オスプレイ、バイレス、ダックス、カリマー、ゼロポイント等です。

形状的には、アタックザックと呼ばれる縦型のものが主流になってきています。かつてワン

ゲルのシンボルであったキシリングは、残念ながら一年に一つ注文があるかどうかという状況です。その原因は、担いで快適に歩けるタイプのザックが豊富に出回っているからのように思われます。

#### <服装>

服装で特に気配りしていただきたいのが下着です。下着の素材が生死を分けた遭難例もあります。化学繊維の下着を使っていたのが、ベストです。お客様から「オーロンの〇〇ありますか?」と聞かれることもしばしばです。

ところが現在、オーロンを使用した下着類はほとんどないと言ってよいでしょう。それほどに新素材の開発が盛んで、今は、ダクロンQD、クールマックス、ウィックロン、ドラロン、秋冬ともなればクロロファイバーなどといった素材を用いたものが主流になっています。これらの素材でさえ、来年には新素材にとって替わられる可能性があるほどです。

以上の素材の共通点は、即乾性です。これらの素材名を記憶しなくても、登山用品店で「即乾性の素材を使った下着」という表現で、買い求めることができます。夏は快適ですし、冬は冬で温かい「すぐれもの」です。ちなみに、現役部員は、冬場はゼロポイントの下着を使用しています。

- ・夏用…ダクロンTシャツ（シェラデザイン、ダンロップ、ジャックウルフスキン等）  
ウィックロンTシャツ（モンベル）  
クールマックスTシャツ（ノースケープ等）
- ・秋冬用…ノースケープ、ゼロポイント・ジオラインシリーズ（モンベル）  
ジャックウルフスキン等

上記の下着のみならず、服装すべてにおいて、登山とは切っても切れない汗に対しての工夫がなされています。汗は不快感を伴うだけでなく、もともとは体温調節で出されたものでありながらその後の放置が体温を奪い、疲労を増加させてしまいます。ですから、体の表面に出た汗を衣服の外へ外へと出すことが重要となり、即乾性の下着、シャツなどの中間着、GORE-TEXの雨

着という組み合わせが、快適かつ安全につながるということになります。

靴下もこういう素材を用いたものが多くなってきました。

- ・ローナー…これは耐久性といい、クッション性といい、お薦めの一足です。

中間着、防寒着としてはフリースウェアをお薦めします。フリースとは、現在は主に、ポリエステル起毛素材のことを意味します。フリースウェアは、軽くて保温力が高く、もちろん乾きも早く、メンテナンスも楽です。ただ、風は通しますので、風を遮断するGORE-TEX等の素材と重ね着することで、その弱点をカバーして下さい。フリースにも何種類もありますので、店頭で直接お確かめ下さい。（つい、いつもの口調が出てしまいましたが…）

#### <コンロ>

ワンゲル内では、コンロの代名詞とされているホエーブスが、生産中止となってから、3-4年がたちます。

現在よく出るのは、ガスカートリッジ式のコンロです。雪山の場合は、ガソリンコンロがよく出ます。

- ・ガスカートリッジ式…火力の安定を求めるなら、EPIのAPSA IIストーブ。これはガスを急速に気化させ、燃焼効率を高める機構がついているタイプ。軽量、コンパクトで、常に二人ぐらいでの使用であれば、プリムスのエクスカイザーEX-ULT-IA チタンバーナーが薦め。
- ・ガソリンコンロ…コールマンのアンレデットピークストーブ等は使い易い方です。コンロ好きな方には、MSR ウィスパライト・インターナショナル等がなかなかいい味のコンロ。





### <コップェル>

何種類もありますが、今夏によく売れたのはチタン製のものでした。容量的には2-3人ぐらゐのもの。軽さが一番の魅力です。食器や武器（スプーン、フォーク）もチタン製品はよく出ます。

### <シュラフ>

化繊と羽毛の2種類に大別できます。

- ・化繊---モンベル、イスカといった所が売れ筋。化繊はメンテナンスが楽で、コストも低い。羽毛に比べるとコンパクト性に欠ける。
- ・羽毛---非常にコンパクト性に富むが、メンテナンスに手間がかかる。湿気を避けることが第一。イスカ、モンベル、マウンテンクイップメント等が売れ筋。

又、シュラフの性能をアップする道具に、シュラフカバー、マット等があります。

- ・シュラフカバー---GORE-TEXを用いたものがほとんど。
- ・マット---現在よく出ていて評価の高いものは、カスケードデザインのサーマレスト、ウルトラライトⅡ 3/4 (119cm)、ロング(180cm)。サーマレストは、広げてバルブを開けると中のウレタンが空気を吸収して自動的に膨らむ。肉厚もそこそこにあり、なかなか寝心地が良い。ウルトラライトⅡ 3/4の場合重量394gというのも魅力。

### <テント>

今一番良く出るのは、2-3人用のテントです。テントも軽量、コンパクトという傾向にあります。

- ・アライテント エアライズ2  
(本体+ポール+フライ 収納サイズ30×150cm  
1.75kg ㊤ 44,000円)  
他、マジックマウンテン、ダンロップ、モンベル等。

### <トレッキングボール>

今年一番売れた商品と言えます。是非、先輩方にも使っていただきたいと思います。特に、ダブル（両手）で、下りに使っていただければ、その効果に驚かれるでしょう。

・レキ スーパーマカルーアンチショック等

㊤ 18,000円（ペア）

### <その他>

冬に雪山を楽しむには、登山以外の方法もあります。例えば、クロスカントリースキーで医王山の林道を歩いてみる、テレマックススキーで雪山を歩き、深雪の中を滑り、一つのシュプールもない所を自由自在に滑る---というのも、非常におもしろいものです。

以上思いつくままに書いてみましたが、道具を文章だけで紹介するのは、非常に難しく、自分の表現力の不足が悔やまれます。何といても、実際に触り、比べていただくのが一番なのですが、多少とも皆様の道具選びの参考になれば幸いです。

世の中には、ここに挙げた商品の他にも、良いものは無数に存在します。

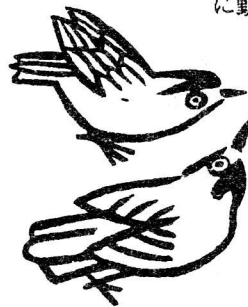
「新しい道具を毛嫌いせずに、自分の登山に採り入れていくのも、登山技術の一つだ」

と、中高年の登山学で一躍有名になった岩崎元郎さんも、著書の中で述べておられます。

皆様、道具に頼り過ぎることなく、道具を活かして山を楽しんで下さい。

（筆者は、コージツ高尾店

金沢市伏見台1-13-25 ☎0762-45-8033  
に勤務）





11月8日の金曜日、33期の西村さんと、その中学生時代の友人2名、そして私と、物理学科の友人の計5名で、楽しくお酒を飲む機会があった。

私と西村さんは、ワングルの先輩・後輩の間柄であるが、他の人々同士は全くの初対面である。今日はなかなか珍しい面会で酒が飲めるなと思い、片町へ行く。酒はおいしく、会話が弾む。愉快、愉快。学部の人々も大満足で、「次回があるのなら是非誘ってくれ」とのこと、やはり「ワングル子」の名を欲しきままにした西村さんの人徳ゆえになせるワザなのでしょう。「あっ、そうそう。うち、舟田さんにパラグアイでの2年間について、書いてくれって頼まれてるんやった。」

と、ぼそりと言われる。思い出した。私も確か原稿を頼まれている。まっいいや。今日は飲もう。

(編者注…もう、許せん！締切を過ぎとるっちゃうのに、一緒になって飲んどるなんて。何が忙しいんやて、エエ！？)

「ご一報下されば、コンピューターにて、すぐ書き直します」と添えてあったけれど、この苦情を書き込むために、腹立ち紛れに自分で打ち直してしまったワネ。)

そういえば、ワングルの1柙代の先輩だったかと思うが、こんなことを言っておられた。「社会に出ても、学生時代の友達付き合いが長くというのは大切なことだ。友達付き合いなんでものは、一朝一夕には出来ないものだから、大切にしなければいけないのではなからうか。」全くその通りで、この飲み会も西村さんとお出会ったから実現したわけで、感謝しなくてはいけないなと思った。

8月23日の金曜日の早朝、立山ケーブル駅に集合。今年で4回目となる、蒲原 良太郎君追

悼山行の始まりである。

私は大学院の2回生でいまだに学生であるが、この山行のメンツの大半はすでにそれぞれの仕事を持っている。後輩の中にも、学生でなくなった人々が多数いる。「2泊3日で剣岳本峰まで」が予定であるが、仕事その他の都合で1泊2日の人も約半数おり、その人々は明日剣沢で現地集合することになっている。蒲原の御両親は車ですでに到着されており、準備万全の様子。

昨年から、計画書は大学に提出せず、団装は全て私物、または我々が購入した物で間に合わせることにし、これからも未永く続けていこうと、こんなスタイルに決めた。ケーブル駅の広場で、テント、鍋、食糧等を一杯に広げ、団装の荷分けのじゃんけん。掛け声にも気合が入り、勝利者から順々に取っていく。初日の夕食となるはずであった鳥肉約2キロを、私の家の冷蔵庫に置き去りにしてきた以外は、順調な滑り出しである。こういったアクシデントがあると、場の雰囲気は一気に和むが(言い訳)、会計の榎村さんは少々(かなり)困った様子で、近くのなんでも屋で豚肉を調達していた。

久しぶりに会う人々との会話が弾み、ケーブル、バスを乗り継いで室堂着。さてさて、ここからは歩きであるが、剣沢までのトンネルが欲しいと思ったのは、私だけだろうか？今年あたりから誰かバテてもおかしくない状況になってきている。ここから一度下って雷鳥沢へ、そこから登り返してさらに下るあのルートと、それぞれが考え想像するのか、不安そうな顔が並ぶ。蒲原さんは作ったような笑顔を見せ、去年よりもパワーアップした感がある。何でも、自宅付近の山を登っておられるとかで、今年は行けそうである。そしてバテたのは今年も37期の柴田君であった。

夕方、剣沢にて線香を焚き、剣岳に手を合わせる。37期には後輩としての付き合い、35期以上には先輩としての付き合い、我々には同期と

しての付き合い……で、考えることもそれぞれに違っているはずである。

写真と花を供え、剣岳をしばらくぼーっと見ている間、もし蒲原がいたらどうなっていたのかなと考えた。……まず彼は、受講カードの出し忘れて留年するであろう。が、教授の恩赦で何とか進学。夏、山以外の日は毎日海水浴へ。真っ黒になる。冬、苦手なスキーに無理矢理連れていかれ、骨折、入院。我々が見舞いに行くも、「どーしてお前らが来るんだヨ。可愛いねえちゃん一人も来ねーじねーかヨ」と言うに決まっているから、そこで我々のブラックユーモア出動。ワングル子に鉢植えのボタンの花を持っていさせるが、その意味が分かっていない彼は、非常に喜ぶといったもので、次々と想像が膨らんでいく。

こんな想像をするのも、ここにこうしているからなんだろうなとは思いますが、4回目という慣れなのか、4年目という歳月なのか、初回の追悼山行の時のような緊張がない。ともあれ蒲原の御両親と、剣岳本峰へ行きたい。今年こそは、今年こそはと思うが、なかなか実現しない。去年は、わずかに一服剣までであり、少々意地になってきた感もある。明日は晴れるだろうか？酒もそこそこに、明日に備えて就寝する。

24日土曜日。起床するが無情のガスがたちこめている。無理をすれば行けるのであろうが、それではこの山行の主旨から外れるので、とりあえず二度寝を決め込む。どうしてこれほどまでにツキがないのか。

しばらくするとガスが晴れてきた。しかしもう本峰へ行って帰ってくるだけの時間はない。前剣までならば行けるということで、支度を始める。サブザックに、昼飯、水、その他一式を詰めて出発。前剣まで何のことなく到着したかにみえたが、実は、蒲原のお母さんが小さな落石に当たっていた。小さな落石とはいえ、これは今後の重要課題として残る。前剣以上となると、たてばい、横ばい、門など、御両親には少々怖い思いをしていただかなくてはならない。その対策を万全にすることで、剣に登りたい夢

を叶えてあげられるよう、確実なステップを刻んでいきたい。

テン場に戻れば後は1泊2日組を待つだけとなり、ビールを飲んで彼等を待つ。ビールがどんどんまわってきて、いい気持ちになり、剣岳がやけに近くに見えるようになった頃、その面々が到着した。剣沢が一気に賑やかになる。半年、1年、2年ぶりの再会である。職場の話、給料の話、結婚の話、それぞれの代で固まって話している。みんなとても嬉しそうだ。

夕食の後、宴会はさらにパワーアップした。明日は帰るだけという気楽さと、剣岳本峰に登っていない余剰体力で、話は尽きない。34期の松浦さんと奥さんも絶好調で、久しぶりにマシンガントークを聞く。酒が入ればさらにエンジン全開、今夜は皆さんほんとうに楽しそうだ。私自身も久しぶりに腹の底から笑い転げる事ができ、来年も、再来年も、こうして再会できたらいいなと思いつつ、シュラフに入った。

下山後、来年は34期の奥先輩がチーフを務めることとなり、テントと鍋などを手渡す。そして、誰もが心の底で引っ掛かっていたことを、ついに誰かが口にする。

「このスタイルで、本当にいいのだろうか？」ほとんどの人が、少なからず同じことを気にかけていただろう。しかし、解決法を見出すのも難しそうだし、ほったらかしておけといった感じであった。10月下旬に36期で蒲原の墓参りに行く予定なので、そこで酒を飲んで思っていることを言い合おうということにはなっている。

ともあれ、来年こそは本峰へ登りたいものである。



手配などをしているうちに、二回ほど「腹が痛い。ウンチがしたい。身体が動かない」などといったのに急に静かになった。おそらく身体がマヒしてきたのだろう。呼吸も脈拍も、見ているまに弱くなっていくのがわかる。意識がもうろうとしてきたようだ。事態は急を要する。再度、現状を伝え、無線でヘリの出動を要請した。しかし、答えは「ノー」であった。

自然と神に祈る気持ちになる。付近を通る登山者も足を止め、固唾を飲んで成り行きを見守っていた。スノーボートを待っている余裕などない。なんとしてでも、一刻も早く運ばねばならない。と思っていた矢先、呼吸が停止した。

パーティーのリーダーがマウスツーマウスの人工呼吸を始め、私は心臓マッサージを並行して行った。最初は、すぐに息を吹き返した。しかし、すぐに停止してしまふ。何度も繰り返すうちに、だんだん弱くなっていく……。

どのくらい時間が経過したろうか。まったく反応を示さなくなった。みんな、茫然として立ちつくす。仲間の「死」を認めたくないのか、リーダーは狂ったように心臓マッサージを始めた。それを見た私は、再び蘇生法を始めた。かれこれ二十分以上も経過したろうか、おそろおそろの瞳孔を確認してみた。完全に散大しており、これ以上手の施しようがないと判断せざるをえなかった。思わず合掌する。リーダーは、遭難者にしがみつき泣き出した。残っていた他の部員も、すすり泣いている。認めたくなくとも、これが遭難の厳しい現実だ。

これからは救助ではなく、遺体搬送となる。無線で、スノーボートがいらなくなったことを伝え、遺体搬送の準備をした。駆けつけてくれた野営管理所のアルバイトや剣山荘の息子さんの力を借りて交替で担ぎ、別山尾根を下りた。途中、文部省登山研修所の先生方や受講生も加勢してくれた。身長一七五センチの大柄な遭難者の搬送は難儀したが、みんなの協力で安全にスピディーに運ぶことができた。

一服剣まで来たとき、もうすぐヘリが来るとの連絡が入った。最後のところは、金山と乗彦が担いで走り、剣山荘ヘリポートまで運び、どうにか間に合った。そして、やっと彼は、あれほど待ち望んでいたヘリコプターに乗って、ふもとの町へ下りていった。あとで医者から聞くと、遭難者は骨盤骨折で内出血しており、おそらく病院までヘリコプターで運んでも間に合わなかっただろうとのことであった。

飛び去っていく遭難者を見送りながら、平成三年の夏、北壁で我々の目前で息を引き取った小学校の女先生のことを思い出した。

山は本当に怖いと思った。これで、自分たちが救助できなかった人は、何人になったろうかと考えると、複雑な思いに駆られるのであった。

私に背負われ、抱きついて「あったかい」と呟いた大学生の言葉が、妙に耳に残って消えなかった。

「山岳警備隊 出動せよ！」

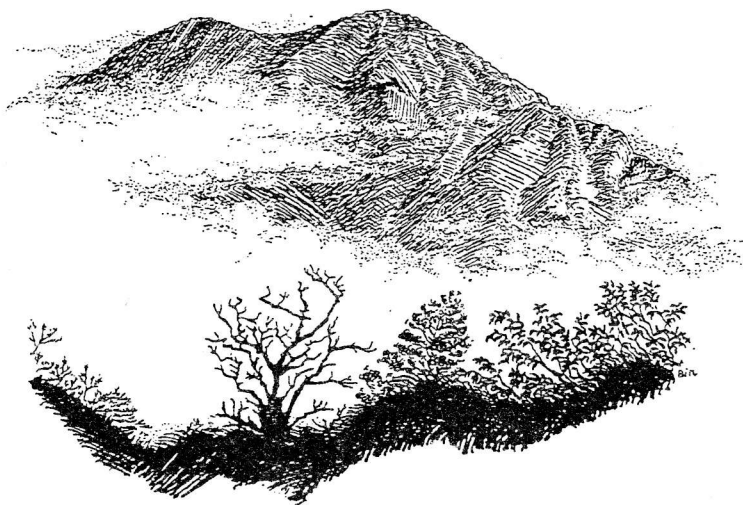
(富山県警察山岳警備隊編

東京新聞出版局)

から、転載しました。

2 ページ前からお読み下さい。

ゴーストライターのいるノンフィクションということで、多少事実とは違う記述もあるようですが、36期蒲原 良太郎さんの事故のことです。



登山者の多い別山尾根道を、汗を拭き拭き登る。私が現場へ着いたときは、私より一〇センチほど足の長い乗彦がすでに現着し、「弱ったぞ」と、しかも面て遭難者に応急手当を施していた。遭難者は、岩壁の下で腕と頭から出血して血だらけになり、右足は腫れ、大腿部から直角に折れ曲がっていた。

「痛い。痛い。足が動かない」と呻いていた。いつまでも同じ場所に置いておくわけにもいかず、ヘリを要請するにしても、乗せることのできる場所まで下ろさなければならぬ。ザイルを素早くセットし担ぐと、さっきまで「寒い、寒い」といていた遭難者が私の背中に抱きついて、

「あったかい」

と大きく、安堵の息をついた。ほんのしばらくして、

「これで帰れるんですね。お願いします。ヘリコプターを頼んで、病院へ運んでください」

「腰から下の感覚がありません。力が入らん。どうなったんでしょうか？」

「無茶苦茶に腹が痛い。なんとかしてください」

しがみつき、哀願する。

「わかった。すぐに場所のいいところまで下ろしてやるから、頑張れ！」

必死になっていた。もう少しで、ザイルなしでも歩けるところまで来たとき、

「腹が痛い。下ろしてくれ！」

痛みに耐えかねたのか、腕で力いっぱい私のあご下を絞めた。息もできず、これは大変なことになったと思い、

「あと一〇メートルだ。頑張れ！」

励ましながら、急いで平らなところへ運び、岩の上に下ろした。すると今度は、

「ウンチがしたい。ベルトを外してズボンを下ろしてくれ」

といった。もう猶子がない。乗彦が無線で懸命にヘリを要請していた。

「天候曇り。視界はときどきガスがかかるが、剣沢は晴れてよく見える。西の風約三メートル。平蔵の避難小屋からビックアップ願います。どうぞ」

「天候が不安定で、現状では平蔵でのビックアップは高度的にも不可能。平蔵の都合か剣山荘まで搬送してください。どうぞ」

現場で遭難者を見ているものには、本当につれない言葉が返ってきた。

運べといったって、運ぶことじたい危険なのは目に見えている。かといって、手をこまねいて待っているわけにもいかない。担ぐと痛がることから内臓出血、あるいは肋骨骨折も考えられる。ぐずぐずしていることも許されず、少しでも早く病院へ収容するため、搬送する決断をして派出所からスノーボー



が育ってもいいのに、年々世話役が楽になって  
もいいのに、ますます車の手配にも難渋し、絶  
句するような質問を受けるようになってきて  
いる。

(その日私は千葉へ出掛けていて、参加してい  
たのは主人である。主人からの又聞きの間  
の話。)

くろゆりへ入会(総会時、若干名の補充があ  
る)して2回目の山行であるA氏は、車中でも  
連れとビールを飲んで騒いでいた。くろゆりの  
全員を知っているわけでもない主人は、随分な  
めた人がいるもんだと呆れたそうだが、徳本峠  
へ着く手前で、故障者が出たとの騒ぎに近づい  
てみると、案の定A氏であった。

## ある事故から

15期 舟田 節子

8月25日、前夜車中泊で、くろゆりクラブは  
上高地から徳本峠へ向かった。

くろゆりクラブは、12年前朝日新聞に北陸の  
百山が連載されたことをきっかけに、読むだけ  
ではつまらない、実際に登ってみたい…の読者  
の要望を受けて発足した。その企画で部数を伸  
ばした支局長はとくに転勤し、律儀に面倒を  
見続けているのが、我がナカオ山岳会である。

「今の…」は決して若者だけではなく、中高  
年にも蔓延している。中から次々とリーダー格

# ある大学生の死

谷内六治（上市署／分隊長）



ミヤマガラス

これは平成四年八月二十六日、釧岳の一般ルート、カニの横這い付近で、ある大学山岳部の下山中に起きた事故。私の背中で、「あったかい」と呟いていたのに介抱の甲斐なく、目の前で息を引き取った大学生の話である。

当時、釧沢警備派出所には、久保ちゃん（久保英一隊員）しかおらず、私は佐伯乗彦と文部省登山研修所の大学山岳部の夏山リーダー研修会講師として、別山北壁で岩登り技術を教えていた。

岩場で研修生相手に講釈をたれていたら、

「事故発生、応援頼みます」

とのマイクが入った。派出所で、釧山荘からの連絡を受けた久保ちゃんが管理所のマイクで呼びかけているのだ。山本一夫主任講師からは、

「谷内先生と佐伯先生、現場へ行ってあげてください。応援がいるようでしたら、いつでも呼んでください」

と、ありがたい言葉をいただいた。

そして現場へは、たまたま遊びにきていた元山岳警備隊員の佐伯茶祥も行ってくれることになった。山の人たちの仲間意識と損得抜き協力には、本当に頭の下がる思いがする。

事故のパーティーは女子一人を含む七人で、今朝、早月小屋を出発、早月尾根を登り釧岳頂上を経て下山中、カニの横這い付近で遭難者が浮き石に乗り、約一〇メートル転落し、瀕死の重傷を負ったものだった。

「休めば、そのうち治るわいね」「交代で担いで降ろすか」と騒がしいなかで、緊急搬送を必要とする発作と見抜いたのは、やはり現職の強みである。

徳本峠の主の応対は結構のらりくらりだったそう。中高年登山者の我儘に、いちいち付き合っていられないのか彼等の本音であろう。それでもおたおたの騒ぎには同情して、「私も一緒に担いであげましょう」とまでは申し出てくれていた。

それでは間に合わない。「金沢大学の…」と名乗ったところで、ようやく彼は真顔になり、その後はまさに場馴れした対応で、ヘリ要請に動いてくれた。要請してから10数分の空白時間があつたそう。後で、この間にA氏宅へ「ヘリ搬送には75万かかるか払う意志があるか？」

との確認が行われていたと聞いた。民間ヘリはこの確認がとれない限りは飛ばないそう。ともかく確認ができてから現場へは「ヘリの手配がついた」との連絡が入ってきたのだった。

A氏は幸いに一命をとりとめ、詰まったのが細い血管だったおかげで順調に回復し、職場復帰の見込みもあつた。後日お礼に来た時、

「どうしてもヘリでの搬送が必要だったとの医師の証明があれば、高額医療として還付してもらえるんですが…」と洩らした。

書類があれば書きますよと返事はしたのだが……。

この事件の教訓……ちょうど山溪1月号にも特集が組まれている。くろゆりも今、改善を図ろうと苦慮しているところである。



## 城内から角間へ

37期 山本 英男

あれは92年の春のことでした。  
ご縁がないとばかり思い込んでいた<sup>茂</sup>に登れて（現役当時も<sup>茂</sup>PWはあったけれど、ビラに名前を書くのは憚られたものでした。）、私は意気揚々と部室へひけらかしに行きました。そんな話でも持っていなければ、卒後ン年の部室は、やはり数居の高い所でした。

その部室に座っていたのが、当時1回生の37期山本君。まだ疑うことを知らない初々しい彼を強引に誘い、エリーに行きました。（だって屋間？だったし、まだ年長児を抱える身としては、夜飲みにお誘い直しという訳にもいきませんでして…）

あの時のたかがコーヒー一杯のために、O Bになってからまで原稿をせまられるなんて…。くれぐれも、「お婆さんの親切」には気をつけましょう！

楽しいお手紙ありがとうございます。いつものことながら、返事が遅くなってすいません。

11月23、24日と高三郎へ歩荷トレに行く予定だったのですが、さすがに一人だったからか、やる気がないからか、寝過ごしてしまいました。24日に日帰りですぐに登ってきましたが、体力不足で頂上まで行くのはあきらめ、ガレ場の手前で引き返してきました。山頂近くはこの時期でも、灌木のブッシュが激しく、なかなかしんどいものがありました。ベルクハイムは早くもカメ虫の住処となり、とても近づける雰囲気ではありませんでした。

恐らくいくつかは誤字脱字があると思いますが、許して下さい。また、この前の小屋作業に関しては、喘息がひどく、あまりいい思い出となっていないので、部室の移動のことを書くことにします。 11月30日

部室が城内から角間へ移ってから、もう3年目となった。僕達の代が城内の教養部で1年半行を受けた最後の学年となった。昔（僕らが現役だった頃）ではあたりまえだったことが、今ではそうではないことがいくつかあるだろう、また、形を変えて残っていることや変わっていないことなどあるのではと思われる。ここでは、無け無しの記憶を掘り起こして、城内から角間へ部室が移って部の活動がどのように変わったのか、くだらないことを中心に探って行こうと思います。

### 買い出し

城内に部室があった頃と今と大きく変わったこととして、まゆる、味袋関係はすべてここで揃えていた。特に安いというわけではなかったが、世界のダイヤモンドというだけあって怪しい食べ物はず、山行の買い出しということが頭に浮かぶ。以前はみんなで歩いて近江町市場へ買い出しに行っていた。これは、かなり前のOBの方々の時代から恐らく変わっていないことでしょう。カレーやシチューのルーや行動食、塩、胡椒など、いわゆる味袋関係は無数にある。変な差し入れはたいていここのものだった。そして、肉は天狗、メタロウ関係はライフガード、野菜は、……、店の名前は忘れたが、ばら売りのしてくれるお店だったと思う。そしてもう一つ忘れてならないのが、近江町市場入り口のパン屋であろう。（ここも名前は忘れました。）山行に持っていくパンは、ほとんど、偽リッチパンというパンで、なかなかうまかった。

とにかく買い出し=近江町という構図が当然のこととして当時の部員の頭の中にはあったのでは。

今は、ほとんどのものをジャスコで仕入れているというのが現状でしょう。また、買い出しには地理的なことからもちろん、車は不可欠なものとなっている。だから、車を持っている人間が一人もいないパーティはどこか別のパーティに時間を合わさなければならない。

### 練習

練習する場所が大学のキャンパスであるということは変わらないが、練習方法は大きく

変化していると思う。城内では、きつい坂がたくさんあるので、それを使ってよくダッシュをしたが、角間の坂は緩やかなので、使いづらい。

また、雨の日は教養の校舎を走ったりしていたけど、角間ではどうしているのか、はっきり言ってよくわからない。というのも、自分が現役の頃、雨の日はほとんど部活にいかなかったからで、この場をお借りして、謝らせていただきます。どうもすみません。

そういえば、城内の頃は、部室の前にある白鳥路へ通じるルートがあって、そこから卯立山のソフトボール場へよく行ったのを覚えている。また、冬には兼六中学校？にサッカーをしに行ったりもした。また、自分が2年生の後期は、城内からほとんどのものが移転し、体育館やほかの部の部室も使いたい放題であった。その反面、何気ない寂しさが漂っていたような気もする。その頃、テニス部の部室に泊り込んでいる人がいて、うわさにもなったりした。

城内の部室は、一年中じめじめしたところで、夏は蚊がすごく、冬は冬でストーブが壊れたときなど寒くて仕方がなかった。初めて部室に行ったときの印象は暗く、陰気臭いところだと思ったのが正直な気持ちだった。部室のことにに関して、ベルクハイムにかかれていると思うが、いったいどれくらいの代があそこを使っていたのだろうか。汚いのはは確かだが、その割にはあれだけ狭いところに山行に使われる道具すべてがおいてあり、使い勝手が、今と比べるとよかったのではないかな。

## 部室の移動

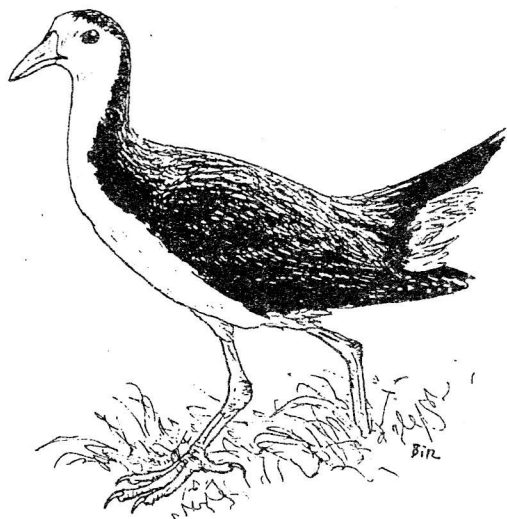
正式に角間の部室を使うようになったのは、僕らが3年になる頃、だから、94年の4月頃だったと思う。当時、部室が移動するというに伴って、角間での部室の割り当てはどうなるんだ、ということが話題になっていたが、一つ上の代の先輩方のおかげで二つの倉庫を借りることができた。城内にいた頃よりも、かえって使える場所は広がった。僕は部室の移動自体にはあまり関わらなかったからか、引越しのことはほとんど覚えていない。本来なら、今、ワングルと山岳部が使っている部室が体育会系のほとんどのサークルで使わなければならないはずだったが、なぜか、今でも、ほかのサークルはあそこを使っていない。だから、ワングルがいいように使っ

ている。

僕ら工学部の人間は、部室が角間に移って、とにかく、練習に行くのはかなりきつくなった。工学部生で車を持っている人間が、その頃、誰もおらず、さらに最悪なことに、バイクも僕は持っていなかったの、練習の日は自転車で行くより仕方がなかった。

城内のように交通の便がいいところなら、寒い冬の日や雨の日には、バスですぐに行けるのだが、角間行のバスは本数も少ないし、乗ろうとしても、小立野から旭町の方へ歩いて降りなければならず、「ああ、練習に行かなくちゃ。」と思いつつ、家でゴロゴロするという日が結構あった。

角間と城内という、二つの部室を過ごした数少ない学年の目からみた雑感を書いてみましたが、早くもモウロクしたのか、結構忘れたことがありました。山行にまつわる思い出と比べたら、インパクトの強いものではないと思いますが、こうやって振り返ると、やっぱり、城内の部室は何かとうまくまとめられていてよかったなあと、実感してしまいました。



昨夏、同期横井さんへの追悼文を書いていた時、ついこの間元気に同期会を仕切ってくれていたのに……の悲しみの蔭で、また別の心の痛みを感じていました。それは、すでに逝った二人の仲間「高村さん」「比田井さん」に対して、追悼文集を作らないまま来てしまったことでした。

確かにあの当時、まだ社会へ船出して日も浅いそんな時に、まさかこんなことになるなんて……御家族とは比べものになりませんが、私達も大きなショックを受けました。それこそ、言葉にならない……「追悼文集を作ろう」の声が上げられない程の打撃を受けました。また、本当に自分のことだけで精一杯、前を見ているしかない時期でもありました。

しかし、それから日が流れ、作れないこともなかったのに、そのままで来てしまったことは怠慢としかいいようがありません。一生懸命生きてこられたご家族にも、申し訳ないことをしてしまいました。

そんな呵責をかかえたまま、また日は過ぎて迎えた同期会。比田井さんから、バレー部の追悼集を見せていただき、さらに強まってしまった胸のうずき。聞けば、一部の仲間うちでは追悼集を作ろうという話はあって、佐野さんが責任者になっていたとのこと。そんな……人選ミスだね。

だって、忠篤さんとは無二の親友だった佐野さんだもの。彼のことを思い出すだけでウルウルになって仕事にならんわね。ええ、私彼とは二夏をスタクカムウシュベで過ごした仲ですから、わかりますわよ。そんなのは、やっぱり、大胆かつ細心。温厚かつ冷徹。原稿を集めるためには、手段を選ばぬキャラクターじゃなくちゃ。

だから言ったのです。「手伝ってあげるわ。だから、同期会報告、ちゃんと書いてね。」

ともあれ、そんな経緯でプロジェクトはようやく発進することになりました。遅れたお詫びに、少しは編集方針をたててと、佐野さんと協議しているのですが、いわゆるお悔やみではなく、ご家族へのエールになるものをと考えています。

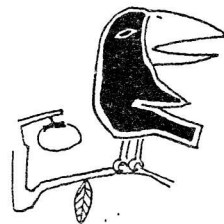
お父さんが、その時どんなことを言い、どんなことに笑い、どんなことに涙していたか……。皆の心に残っているお父さんを書いてもらい、そんなふうに皆の心に懐かしく残っていることをどうか励みにして……と、これから原稿依頼を行う予定です。

そう方針をたてたところで、編集長は考えました。卒業してからあまりに日が経っていて、思いおこすのがかなり難しい。それに卒業してからの高村さん、比田井さんがどうしていたのか、今ご家族がどこまで受け止められるようになっているのか、それがわからないと、ただでさえ重いワッゲルOBの筆は動かないかも。

そこで、本来なら周りからまずお慰めするのが筋というものでしたがあえて、千佳子さん、澄恵さんから思い出を語っていただくことにしました。幸いに、強く生きておいでたお二人はこんな失礼なお願いを受けて下さいました。

この会報に原稿依頼の同封されている方々はどうか以上の趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いします。

また、かれらとのご縁がなかったOB諸氏におかれましては、この機会にご冥福を祈っていただければ幸いです。



15期 高村 千佳子

まず、えい君こと、夫高村 栄一の卒業後から、私と出会う前まで…。

昭和50年4月に、川崎重工業ディーゼル設計の開発部門に配属されましたが、ディーゼルの景気が悪く、すぐ設計の方に転籍になったようです。入社して半年は、毎月金沢に帰省していたそうです。お母さんの話では、ほとんど外出していたそうで、学生時代の彼女に会っていたらしいですが…。

入社してから山にはよく登っていたようです。六甲山が近くにありますが、六甲山縦走（須磨一宝塚 約55km）も楽しんでいたそうです。

ここから私の知っているえい君です。昭和52年のいつ頃だったか、「スケッチ会」という、写生したり、美術館に行ったり、版画をしたりするサークルに、別々の友人を通じて参加した時…それが初めての出会いでした。次の会の時には私が会計で、会場費集めを担当し、たまたま「高村君」と名前を覚えていたことが、彼にはすごく嬉しかったそうです。それから何となく話しやすくなっていきました。

同じ会社でもビルは違っていたのですが、私と同じビルに彼の友達がいました。ある時、その友達に彼が山行きの日程を持ってきて、余分があるからと私にも渡してくれました。私もまあ貰っておいてもいいかな程度で受け取りましたが、実に奇麗にスケジュールなどが書かれていて、意外な面を見たような気がしたことを覚えています。他にもカルタ大会に誘われたりしましたが、百人一首なんて殆ど忘れていたので恥をかくだけと思い、その気持ちの方が強く断ってしまいました。

そんなふうに、その頃は仕事も頑張っていました。山に登ったり、人形劇のサークルに参加したり、英会話に通ったりと、アフター5も

充実していたようです。

そうやって何度かサークルで顔を会わしているうちに、

「給料日の後の金曜日は、寮の夕食が無い日だから、一緒に食事をしませんか」

との電話がかかり、フルコースを御馳走になりました。（あれからは、フルコースを食べには全然連れていってもらっていないような…）

食事は三宮でしたが、帰りは「少し歩こうか」と神戸駅まで。さらに「もう少し歩こうか」と、結局私の家まで3時間歩かされ、へとへとに。でも、それから寮まで帰らなければならなかった彼の方が、もっと疲れただろうと思います。

その後、どこの山かは忘れましたが、彼が友達と二人で登山に行くことになり、彼の誕生日（3月17日）と同じ頃だったので、女の子のマスコットをフェルトで作ってプレゼントしました。登山の時にはちゃんとリュックにつけて、持っていったくれたそうです。そのお返しというプレゼントがなんと”警報ベル”でした。結構高張るし、重たいし…。毎日持ち歩いていれなくて、彼は不満のようでしたが…。そんなに心配してもらわなくても、誰も襲わないのに…と思いましたけど。

それからグループで山に行ったり、スケッチに行ったり、また仲間の結婚式の出し物の準備をしたり…と、大勢での行動が多かったように思います。まだまだ結婚なんてお互いに口に出してもいなくて、気楽に過ごしている時突然に、彼に岐阜工場の航空機部門への配転の話がありました。



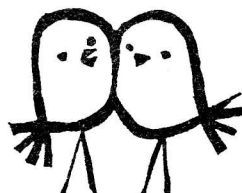
離れてもお付き合いを続けていくのかどうか、自分の気持ちを決めなければならなくなっていました。私の方は、母が昭和50年の10月に亡くなっており、父と兄との3人暮らしの家事を私が引き受けていましたので、遠くに行くことが考えられませんでした。父の方も頑として神戸からは出してくれそうもありませんでしたし、父の顔を見ていたら寂しそうで何も言えませんでした。結婚の話まで進んではいなかったこともあり、私は今がお別れ時なのだ、自分さえ彼の事を諦めればいいのだと自分に言いかけました。

彼に「神戸の高村君ならついていけるけれど、岐阜の高村君にはついていけない」ようなことを言いました。そうしたら、彼は配転の話を断ってしまいました。もちろん何度も上司に説得されていましたが、彼の意志は強く、頑張ってくれました。ちなみにいつも、私のプレゼントしたマスコットを胸のポケットにしのばせてくれたそうです。そんな彼を見てみると、こんな私の為に自分の出世も捨てて神戸に残ってくれた彼を本当に尊敬し、ついていこうと思いました。ですから、何か月か後に明石工場へ配転が決まり、結婚を申し込まれた時には、もう私の心は決まっていたので、その場でお返事することができました。

新居を探すのがまた一苦勞でした。入社5年以上の人は社宅に入居できるのですが、丁度5年目でしたので、民間の賃貸を探さなければならいけませんでした。

西は垂水から北は鈴蘭台まで、電話帳で不動産屋を調べ、見せてもらい、1件1件間取図を書き留めていくので時間がかかりました。感心するやら、もうここらへんで決めてほしいという気持ちやら…20-30件は見たように思います。鈴蘭台にやっと決まった時には、嬉しいよりへなへなと感じてした。

そうやって苦勞して見つけた家も、半年後には社宅に入居できることになり垂水の社宅に転居。さらにお正月に金沢へ帰省した時に、高村



の両親から早く同居したいとの話があり、また年明けから家探しをするはめになってしまいました。今度はたまたま早く思うような家が見つかったというか、彼の仕事が忙しくなりつつありそんなにこだわる時間もなかったというか、最初の大変さに比べればそんなに苦勞もなしにスムーズに決まりました。ですから昭和54年6月に結婚して入った鈴蘭台から、10月には垂水の社宅、翌年の6月には明石の少し西の土山まで、1年の間に3回も引っ越したことになります。

同居の話を聞いた時には、私の方はもう少し二人で暮らしたく思っていました。しかし彼は父が40歳の時の子供で「少しでも早く自分達で面倒をみてあげたい」と涙しながら話したので、両親思いな彼の姿に、同意しました。

(自分の方が先に亡くなるなんて、まさかその時には考えもしなかったことでした。)

いざ同居してみると、お二人共本当に優しく、食事の用意や家事をしていただきました。お父さんにもアイロン掛け等、よくしてもらいました。私は母が亡くなってから、いやその前から母も働いていたので、夕食の用意はずっとさせられてきました。ですから仕事から帰ってすぐ温かいご飯がいただけるなんて、最高でした。

土山に引っ越しする少し前に、赤ちゃんが出来たことがわかりました。仕事を続けながら引っ越しの準備をしていたので、ちょっと無理をしたのか切迫流産しそうにもなりましたが、12月無事にさおりが誕生しました。実家の父は私の結婚後半年くらいで再婚しており、私は産後も実家へ戻らず、高村の両親のお世話になりました。産休が明け、私は朝6時半頃に出勤して夕方6時頃に帰宅する生活に。その間、両親がさおりを見ていてくれて、夕食も出来ていました。

彼の方は、仕事ばかりで子育てというよりは、まるで可愛いおもちゃかベットのよう。普段の日はさおりの寝顔ばかりで、休日でも仕事だったりしましたから、たまに家に居られる時には、子供の顔をみるとほっとするのでしょうか。無茶苦茶可愛いがっていました。一生懸命遊んであげたりお風呂にいれたりして、まださおりが小さかったせいもあり、一度も叱った事は無かったように思います。

(そうやって私達をささえてくれたご両親は、彼が亡くなった後、今度は彼の姉の夫が亡くなりそちらへ移られました。もうお父さんは、彼と並んで卯辰山のお墓で眠っておいでます。)

明石工場では、工作課という、技術職と技能職の人が混合している職場にいました。現場の人が2交代でする仕事のプログラムを一人で受け持つというハードな仕事でした。もともとが公式から考え込むタイプの人だから、納得がいく迄に時間がかかりますし、人に頼まれたら断れない人だから、他の人より多く仕事を持たされたようです。

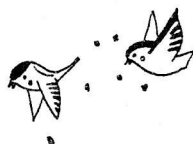
毎晩夜中の12時頃帰宅していました。終電が無くて、タクシーで帰ってきたこともよくありました。宴会のある時の方が帰宅が早かったほどです。残業代はせいぜい月に40時間くらいしかついていないようでした。彼にすれば、またここからやり直そうと必死だったのかもしれませんが。そんなに無理をしなくても、出世しなくても、楽しく暮らせたのに…と思います。

昭和58年のお正月には、加古川の宝殿駅から近くの山へ、初日の出を見に登りました。そのお正月休み明けからしばらくして風邪気味のようだと会社を休みました。近くの病院で点滴を打ってもらい、家で2-3日休んでいましたが、だんだん調子が悪くなり、別の病院に入院しました。脳脊髄膜炎と診断されました。脳に菌が入っているせいでしょうか、言う事も少しおかしくなり、住所を聞かれると、金沢の住所を言ったりしました。その前から相当疲れていたと

思うけれど、疲れたとも言わずに、毎晩遅くまで仕事仕事でした。そんな過労で抵抗力が落ちていると、風邪の菌にも負けてしまうのですね。風邪は万病の元といいますが、本当にその通りです。(皆さんもどうか無理をしないで下さい)意識不明のまま、旅立ってしまいました。

亡くなる前の年の秋頃、土山の近くにお墓の広告が出ていました。両親から、もう引き払ってしまった金沢にあるお墓では遠いから、近くに作ってはという話があり、彼とその場所を下見に行ってきました。彼が「こんな狭い所は嫌だ」と言ったので、そのままになっていました。

意識朦朧の中でも金沢の住所を口にしたり、彼は金沢を愛して、思い出一杯の土地なのでしょうね。ですから、お墓を神戸に移すことはできませんでした。たまにしかお参りには行けなけれど、大好きな金沢の地で安らかに眠っていることでしょう。



金沢のワングルのお友達に、たくさん会わせてくれました。松林さんと彼との三人で節ちゃんのお宅を訪問したり、松下さんと三人で食事をしたり。金沢に帰省した時、ワングルの集まりがあり、二人で参加させてもらったりしました。結婚式の招待メンバーを相談した時も、「ワングルの19人には全員に声を掛けるのだ」と、頑と言い張っていました。その時の彼の気持ち、ワングルの人達と接してみて納得できました。

15期会に声を掛けてもらった時、初めはとても辛くて参加できませんでしたが、思い切って参加してみたらとても楽しいひとときを過ごすことができました。こんな素晴らしい仲間を持っていた彼はしあわせだったなあと思います。そして私達親子に残していつてくれたことにも感謝しています。



苦しい時の神頼みではないけれど、さおりが病気になる時、テストの時、受験の時と、もう何回、何百回、彼に拜んで頼んだことでしょう。これからも、遠い空の上から見守ってくれていることを信じて、恥ずかしくないよう、精一杯歩み続けたいと思います。

ー彼の、短くも濃い生涯の歩みー

1952年3月17日 高村家の5番目めの長男として  
誕生

1967年4月 金沢大付属高校入学

1970年4月 金沢大学入学 ワンゲル入部

1975年4月 川崎重工業㈱入社

1979年6月10日 結婚

1980年12月27日 長女 沙緒里誕生

1983年2月9日 永眠 30歳

今の私達親子の近況

私は相変わらず川崎重工業の神戸工場に勤務して、時代の波のパソコンでアップアップしながら、注文書や送付状を入力する毎日です。

沙緒里は兵庫高校の1年生になり、テニスに明け暮れています。

金沢へは、毎年、節ちゃんのお世話になり、お墓参りに行っています。

ワンゲルの15期会にもいつも声を掛けて頂いて、皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

「追悼文集を作るので、卒業してからの歩みを書いてほしい」というお手紙を頂いた時は、大変だな、書けるかな？と心配しました。でも、書いていくうちに、忘れかけていたことも思い出したり、いろいろなことを思いおこしながら書き終えることができました。心の整理にもなり、娘にこういう形で父親の事を伝えることが出来て、嬉しく思っています。

書く機会を与えて下さった節ちゃんを初め、ワンゲルの仲間の皆さんに心から感謝しています。

拙い文章で、きっと天国で彼が笑っている事でしょうー。

1996年11月

15期卒業記念アルバムの中から、比田井さんが佐野さんあてに書いた章を転載します。

佐野さんが、追悼文集をこれまで作れなかった件は、これにて不問。（すべて、編集長の独断）

15期卒業記念アルバムの中より

今思うと

きみと僕と奥名は

かなり似かよった人種であったような気がする。

似かよった性格、似かよった価値観を持っていたような気がする。

僕は きみとは楽な気持ちで話が

そして、つきあえたような気がする。

何か話をしなければとか

話の間にこわいとか

そんな気持ちを少しも持たないで。

似かよった者同士であったからだろう。

僕の短所が、きみの行動の中に見えた時

自分を非難するかわりに

きみを非難することがよくあった。（許せ。）

逆に きみの好意にかなり甘えさせて

もらったことを

感謝しています。

・求めよ。もっと自分に素直に。

・簡単に結論を出すな 何事も。

徹底的にやれ。

今思いつくきみへの忠告

同時に 自分への忠告。

学校における心の平安な場は

部室であり

大学生活における心の平安な場は

きみであった。

きみは確かに 他人のことに  
気をつかってくれた。  
しかし今年は 自分のことを  
もっとみつめねばなくなるだろう。  
そして 平安な場を 安息な場を  
失った僕自身にも

いつまでも  
友達でいてください。  
絶えることなく。

山での友だちは  
兄弟よりもなつかしい  
ほんとうにそう思います

### 思い出が多すぎて

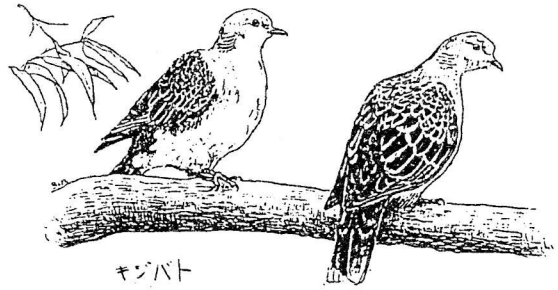
最初に君に会ったのは  
そんな劇的なものではなく 自然に  
ごく自然に 心の中に入ってきました。

一年の合宿の結団式  
渡辺は覚えているが  
君はさっぱり

白山の南麓で 食器を洗いながら  
北島さんや 君と 冗談いったこと。  
あそこから 君がなんとなく近い人間  
わかりあえる人であるような気がしました。

合宿の思い出。多すぎます。  
どうしても出発が遅れたこと。  
薬師沢の五目寿司。  
あの食欲は みんなが行動中に  
キジ打ちにいった心の余裕と 水のきれいさから。  
四年生と 女の人のこわさ。

合ワンの思い出 多すぎます。  
カメラこわしたこと。バテたこと。  
野坂さんのこと。



僕にはスキー合宿より 春山の方が  
思い出に残っています。  
C2 での強風の中でのブロック作り  
金井と3人で隣り合わせて  
寝たことなんか。

後立での天狗でぬれぬれになったこと。  
白馬駅前の「コマクサ」で飲んだコーヒー。  
僕がクラブをやめると言い、  
何度も足を運んでくれた君。

牛小屋に泊まったこと。  
脱衣所に泊まったこと。  
「逆境のときこそ、人間の真価が問われる」  
を知りました。

晩秋白山、白馬岳は、上級生として  
余裕をもった山行であって  
強烈な印象は残っていません。

愛知に行った時は  
いろいろお世話になりました。

汚れちゃった悲しみは  
なにのぞむなく ねがふなく  
汚れちゃった悲しみは  
倦怠のうちに死を夢む

汚れちゃった悲しみは  
いたいたしくも 怖気づき  
汚れちゃった悲しみは  
なすところもなく日は暮れる――

## 不思議な縁

15期 比田井 澄恵

(文中の夫の名に、殿をつけたことを先にお断りします。そうしないと私の気持ちがすまないような気がしたものですから。)

今年(平成8年)は、忠篤殿が健在であれば結婚満20周年であるはず。なのに、何と忠篤殿の”7回忌”という節目の年にあたります。

この節目の年にちなみ、ワンゲル部15期会の方々の御好意で「追悼文集」なるものを発行していただける由、家族共々大変喜んでおります。

そこで、(旧姓石田)忠篤殿との出会いから、38歳の若さで無念の病死をするまでの、教職16年間、結婚生活14年2ヶ月、をかいつまんでここに記したいと思います。

私と忠篤殿が出会いましたのは、ここ長野小諸市にある小諸商業高校(通称小商)でした。忠篤殿は定時制、私は全日制勤務でしたので、普段はほとんど顔を合わせることはありませんでした。ただ、週2時間は全日制生徒を教えていたためか、事務室などでみかけることがありました。今から思うと、私の方は石の上にも3年目となり職場事情にも慣れて、多少の余裕と好奇の目で、新人忠篤殿を見ていたかもしれません。

当時職場では、30歳未満の者が青年部なるものを結成し、時々町へも繰り出したり、冬にはスキー教室を開きなどの活動で、気分転換と明日への活力作りを行っていました。

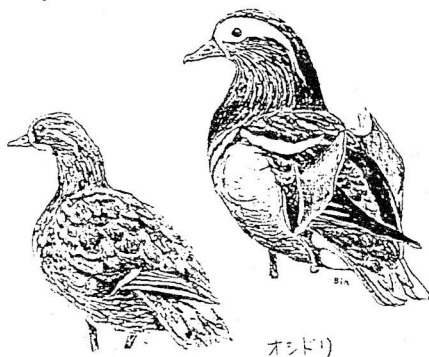
忠篤殿は新潟県の雪深き安塚町生まれ、山スキーにかけては玄人はだ。かたや私は、小諸生まれの小諸育ちでありながら、スキーをする機会に恵まれず全くの素人。忠篤殿に1から習い、徐々にではありますが少しは滑れるようになったというわけで、いってみれば、スキーが取り持った縁でありました。

忠篤殿にしてみれば、結婚なんてまだ早いと思っていただろうに、私の方が世間でいう適齢期。忠篤殿の優しさと思いやり…まさに救済事業ってところでしたでしょう。これは、ほんとにそう思う。忠篤殿と出会わなかったら、恐らくいまだに一人者だったと思うくらいです。

こうして昭和51年春3月。すべては忠篤殿のプランで、富士7合目へ二人で登り、新生活をスタートしたわけです。

忠篤殿は小商を後にし、作久市野沢南高校へと異動。男子バレー部監督として、生涯をかけたともいえる情熱を注ぐことになります。バレー競技との出会いは、幼年の頃より、長兄、次兄からの影響が多大でありました。バレーと向き合っている間はそれこそ人が変わったみたいに、つまり別人のようだと言ってよいほどの心血を注いでおりました。それが、後に何回かの病魔との戦いのエネルギー源ともなったように思われます。

朝練と放課後の練習が毎日続く中、昭和53年8月25日夕、突然意識を失くし救急車で入院。忠篤殿26歳の時です。その時私は最初の妊娠で6ヶ月目に入っていました。意識不明の原因は良性脳腫瘍、簡単に言うと脳腫瘍に因るものでした。その年11月4日手術。私の出産は12月20日でした。大変な事が続いた年でありましたが、翌、新年は夫の術後も良好で職場復帰がかない、長女の誕生と、明るい年を迎えることができました。



オシドリ

夫は相変わらず熱心な指導に明け暮れ、家庭の方は術後2年半近くして長男誕生とさらに賑やかになり、平穏無事な日々が過ぎておりました。

昭和57年4月、忠篤殿は二度目の異動。上田市、上田高校へ赴任。やはり男子バレー部の監督として、日曜日無し、夏休みもほとんど部活指導と補修授業につぶれるといった日々。それも義務感からではない為、いつでもよい汗をかき、よい顔をしておりました。家に帰ってからの、一杯のビールをおいしそうに飲み干す顔は、決して忘れられません。

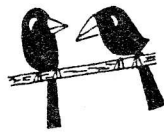
こうした中であっても先の頭部手術のことは決して忘れていたわけではありませんでした。定期的な検査、服薬など怠るようなことなどなく、真面目で、几帳面な人でした。それにも関わらず、何と神は酷いことをなさるのでしょう。

この頃より、背中を反り返すような素振りを度々見掛けるようになりました。毎日運動とは縁の切れない生活をしていましたから、筋肉痛かあるいは関節痛かと本人も私も思っていました。

昭和59年9月、思いもよらぬ肝臓疾患であることを知らされました。皮肉にも私の方は、これより2ヶ月位前、切望した3人目の妊娠を知り、束の間、大喜びをした後のことでした。医師からはその時、夫の前で、血管腫と聞かされていましたが、後、必然的に悪性腫瘍と知ることになります。

小諸市内某病院の紹介で、都内中央区国立がんセンター病院で即刻大手術となりました。翌60年8月には2回目の手術。この年4月、次女を出産したのですが、この出産は考えに考え抜いた末の結論でした。今から思うと、わが家に幸せを運んでくれた神の子であると言っても過言ではないかもしれません。忠篤殿33歳、私35歳の時のことでした。

このような峠ともいうべき年を越し、忠篤殿は又職場復帰を果たし、バレー部にも再び情熱を注ぐ日々となりました。肝臓の2回目手術より1年後、上田高校男子バレー部は県代表とな



り、北信越大会出場権を獲得しました。その大会では、初戦突破、惜しくも2回戦で敗退とはなったものの、これはもう大満足だったに違いありません。くしくも会場は、忠篤殿の故郷、高田リージョンプラザでありました。

これを境に、気力の上ではなんら遜色ないものの、体調には少しずつ弱りが見られるようになっていき、1年のうち療養期間の方が長くなる傾向にはありました。けれども愚痴めいた事など一言言うわけではなく、常に周りの人の事を思いやる、温かく、影響力の大きな人でした。

世の年号も変わり、忠篤殿は、平成2年6月18日、ついに帰らぬ人となりました。38歳でした。最後は私一人に見取られて。

先に申し上げましたとおり、今年は亡くなって早6年。毎年8月15日には欠かさず、10名前後の上田高校男子バレー部のOBの皆さんが墓参りに来てくれ、近況報告、結婚報告などをしていってくれます。

夫の人生は短くはありましたが、濃縮した、この上ないかけがえのない人生でありました。我家の子達も、高3、高1、小5となり、元氣だけが取柄の子供に成長してくれました。

今年は山梨県清里で行われた15期会に、小5の次女と初めて参加させていただき、二日目には小諸の忠篤殿の墓参りを参加者全員でしていただきました。ありがたく、言葉に言い表せないほど感謝致しました。

以上、生来文才の全く無い私ですが、事実にできるだけ忠実に書いたつもりでいます。今後とも15期会の皆様をはじめ、ワンゲル部の方々には何かとお世話になることと思いますが、よろしく願い申し上げます。

11月11日 記

猶、男子バレー部OBの方々の”追悼文集”の中から1編を掲載していただきます。30名の方から一つ選び出すのは非常に苦慮しましたが、わか家の子等と同様に、お父さんと死別（小学1年時）死別された経験をお持ちの方のものとしました。

用同上いづー比田井先生の思い出ー

より

58年度卒 寺西 浩一

比田井先生と初めて知り合ったのはもう9年前になります。野沢南高校から上田高校に転勤され、そしてバレー部顧問として私達を指導して下さいました。

今、目を閉じて先生を想い浮かべてみますと、汗をかきながらジャージ姿でボールを打っておられる真剣な姿が思い出されます。あれ程お元気でいらっしゃった先生が…非常に残念でなりません。

先生には時として怒られもしましたし、はたかれもしました。全てに情熱を持ってぶつかってきた下さいました。言われたから、怖いから従うのではなく、先生を見ていると自然とやらなければ…という気持ちにかられたから不思議です。

その中でバレーボールを通して、人生で大切な二つのことを教えて頂きました。

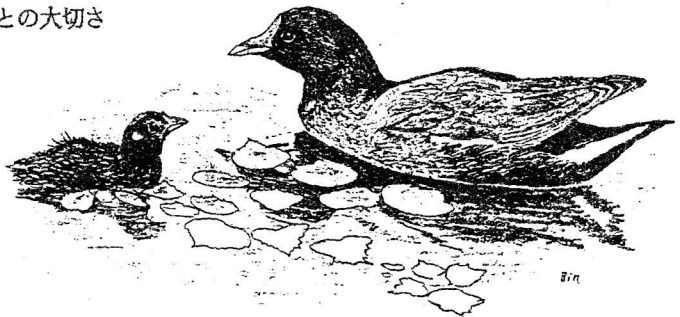
- 1) 感動することの大切さ
- 2) 苦しいことを乗り越えることができる、  
体力・精神力をつけることの大切さ

感動する心というものは何事にも換え難いものです。感動する為には、努力が必要です。努力なしでは感動は有りえないのです。努力して努力して、それでも駄目ならさらに努力して、そして最後に望みをかなえる。しかし、この為には、苦しいトレーニングに堪え、目標に向かって努力しなければなりません。

先生は、私達と一緒に苦しんで、努力して下さいました。今でも、県大会で負けた時の、先生の悔し涙を忘れることはできません。

私事になりますが、私は小学校1年の時、父親と死別しました。それからは寝たきりの祖母、母親と姉と私の4人の生活が始まりました。あれから18年経ちましたが、その間何度も苦しいこと、悲しいことがありました。母に我儘をいく度となく言い、困らせ、辛い思いをさせました。苦勞をかけました。その事を思い出す度にいつも涙が出てきます。子供の為に自分の人生の全てをかけてくれて、本当に感謝しています。

どうか家族全員が力を合わせて、頑張ってほしいです。お母さんを助けて、盛り上げて欲しいです。父親がいないというハンディに負けることなく、力強く生きて欲しいです。苦しいこと、悲しいことは数多くありますが、それらを乗り越えて行って欲しいです。それがきっとお父さんの願いだと思います。



# OB会会計報告

(平成 8年 7月 1日～平成 8年11月30日)

会計 23期 鳥越

## 《 収 入 の 部 》

|        |         |
|--------|---------|
| OB会費納入 | 253,000 |
| 小屋作業寄付 | 15,000  |
| 預金利息   | 1,132   |
| 計      | 269,132 |

## 《 支 出 の 部 》

|                     |         |
|---------------------|---------|
| OB会報 (やまざと) No.5制作費 | 45,654  |
| 〃 郵送料               | 114,080 |
| 〃 人足代               | 2,800   |
| 平成8年度小屋作業援助金        | 50,000  |
| 小屋作業食費、備品代          | 28,950  |
| 〃 その他雑費             | 6,300   |
| 3期田村氏小屋番補助金         | 24,100  |
| OB・現役 (3年) 懇親会      | 78,383  |
| 事務局連絡費              | 7,900   |
| 文具費その他              | 13,657  |
| 計                   | 371,824 |

## 《 差 引 剰 余 金 》

|                   |           |
|-------------------|-----------|
| 前回 (8.6.30現在) 繰越金 | 1,650,147 |
| 収 入 の 部           | 269,132   |
| 支 出 の 部           | 371,824   |
| 差 引 合 計           | 1,547,455 |

以 上



477口



## 96年度夏合宿 感想

### <北海道party>

〔行程〕 旭岳－忠別岳－化雲岳－トムラウシ山（途中下山） 5泊6日  
西田 秀輝（3回生 L）

なんでロープウェイが止まっているんだ！でもそこは大自然だった。

後藤 秀明（3回生 sL）

トムラウシ温泉はいい湯だった。

山崎 茂雄（2回生）

思っていた以上に楽な山行だった。

田村 賢司（1回生）

天気が悪かっただけに晴れたときの展望には素晴らしいものがあつた。

森田 義文（1回生）

ド快晴のとき再び北海道を訪れたい。

谷本 愛（1回生）

楽あれば苦ありの山行だった。

### <南アルプスparty>

〔行程〕 三伏峠－荒川岳－赤石岳－聖岳－上河内岳－光岳 8泊9日  
阪本 京子（3回生 L）

やっぱり山は南アルプスです。来年は一人で登っているかもしれません。

小西 陽介（3回生 sL）

最後の夏合宿を思い残すことなく過ごせました。北もいいけど南もよかった。

前川 昌宏（2回生）

さわやかな夏のアルプスを堪能できてよかったのだ。

市山 祐司（1回生）

よかったと思う。

掛布 真司（2回生）

僕もよかったと思う。

得田 馨理（1回生）

9日間も山で暮らすなんて信じられなかったけどあつという間で楽しかった。

### <北アルプス縦断party>

〔行程〕 烏帽子岳－野口五郎岳－三俣蓮華岳－黒部五郎岳－笠ヶ岳 7泊8日  
岩倉 里英子（3回生 L）

リーダーという立場を利用し、マイペースな山行にしてみました。3度目にしつてやっと夏合宿の楽しさを知りました。

上田 穰（2回生 sL）

出発まではいろいろアクシデントはありましたが、行ってみれば晴天続きで北アルプスを堪能できたよい山行でした。

中野 貴巳子（2回生）

昨年とはうってかわって今年の北アルプスはすばらしかったです。

長谷川 夏樹（1回生）

直前に変更があつたものの、すばらしい天気に恵まれすばらしい山行でした。とくに黒部五郎周辺のカールには、花が咲き乱れ、小川が流れ、ぜひもう1度と思うところでした。

竹内 利行（1回生）

天気が悪くなくてよかった。

長井 航（1回生）

夏山って最高。

<北アルプス横断party>

[行程] 燕岳-槍ヶ岳-双六岳-黒部五郎岳-薬師岳 7泊8日

老田 浩章(3回生 L)

疲れたが充実した山行であった。

小川 利枝(2回生 sL)

いろんな百名山を制覇できたのでうれしい。あと、高岩君がステキだった。

高岩 伸行(2回生)

メジャーな北アルプスの山々に登ることができてよかった。

佐藤 豪一郎(1回生)

高岩さんのエールをじかに見ることができて幸せでした。

林 司(1回生)

転んで痛かったです。

## 行事報告(96年度夏合宿以降)

\*利尻PW 8/11-8/12

札幌-(車中泊)-稚内-利尻島-北麓野営場<sup>△</sup>-利尻山-フェリー乗り場  
L西田 sL後藤 牧原 山崎 森田 谷本 田村

\*熊野川PW 8/20-8/22

金沢-田戸<sup>△</sup>-赤木川合流点<sup>△</sup>-河口付近-金沢  
L上田 sL金吉 三浦 老田 川本 後藤 長谷川 田村 佐藤

\*中央アルプスPW 9/2-9/4

金沢-しらび平-千畳敷-駒ヶ岳キャンプ場<sup>△</sup>-木曽駒ヶ岳-空木岳-駒ヶ岳キャン  
プ場<sup>△</sup>-千畳敷-金沢  
L西田 sL小西 小川 長谷川 得田

\*飯豊連峰PW 9/13-9/16

金沢-胎内ヒュッテ<sup>△</sup>-門内小屋<sup>△</sup>-飯豊山本山小屋<sup>△</sup>-川入-金沢  
L老田 sL友野 橋本 西馬 中野 長谷川

\*倉谷PW 9/14-9/17

犀川ダム-五段の滝手前<sup>△</sup>-ワンゲル平からの沢との合流点<sup>△</sup>-奈良岳<sup>△</sup>-千丈温泉  
L金吉 sL佐川 宇根 三浦 小泉 市山 林 竹内

\*小屋作業 9/21-9/22

CL川本 (4回生4人 3回生5人 2回生8人 1回生10人)

\*百四丈PW 10/10-10/12

金沢-山崎旅館-黒滝手前の河原<sup>△</sup>-百四丈の滝-清浄が原<sup>△</sup>-室堂-別当出合  
L金吉 sL橋本 石川 小泉 佐藤 市山 長谷川

\*口三方歩荷トレ 11/1-11/2

登山口手前<sup>△</sup>-登山口-口三方岳-千丈温泉  
L前川 sL小西 老田 加藤 高岩 林 河村

## 編集後記

「上級生になったら、下を動かすことを覚えにゃいかん。それが相手の為にもなるんや。自分が動いとりゃいいもんやないんや。」

どうしても身体が先に動いてしまう私に、口から先に生まれた男高村さんは諫めたものでした。それも、例のごとく無邪気な笑顔を浮かべながら。

納骨の日、五月晴の空の下、あどけないさおりちゃんに、きびきびお墓の用意をされる千佳子さん。そして、かるうじて立っている風情のお父さん。この春秋に富んだ若者達の間はどうして息子の顔が交じっていないのか…あきらめきれぬ表情を、上の息子二人が大学生となった今はかえって鮮明に思い出すことがあります。

他大学のWVが踏破し、問い合わせもくるというのに、何故我が金大WVにBH-白山完全踏破の記録がないのか？一年の合宿参加を自粛したほど決してタフとはいえない身体だったのに、情熱を燃やし、かつやり遂げた人でした。その彼の墓前には、前日BHから取ってきたキクザキイチリンソウと、これは仕方がないので花屋のクロユリを、倉谷の水にさして供えてもらいました。

卯辰山の彼のお墓へ行くと、彼の声が聞こえるのです。

「生きとるやないけ。生きとれば、言いたいこと言えるやんけ。言いたいことは言ってこにゃいかん。やれることはやってこにゃいかん。」

うるさい男や。こんなことにはまった何分の一かは、えいちゃんにも責任あるんや！



### OB会報「やまざと」 '96冬号

発行日 平成9年1月

発行者 大島 良治

編集責任者 舟田 節子

印刷 中川 晃成

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会

事務局 金沢市橋場町10-49

☎0762-22-9288